

英検

英語情報

2019
冬号
WINTER

英語教育の“今”を知る。明日からの授業が変わる。

特集「授業改善を考える」

新学習指導要領に向けて

中学校の授業のあり方と果たすべき役割

CLASS REPORT

徳島県 徳島市立高等学校

岐阜県 可児市立西可児中学校

三重県 四日市市立常磐小学校

明日から使える! 英語で授業 7つの鉄則

滋賀県立米原高等学校

高大接続改革ニュース

明治大学

TEAP Hot News!

上智大学

東京都立桜修館中等教育学校

大妻中野中学校・高等学校

第68回

全英連

滋賀大会レポート

「Be Active!」〜児童・生徒が主体的に学ぶ英語教育〜



明日から使える!

授業のテクニックを
動画で見られる!



英語
情報

『英語情報』専用アプリで
写真をかざすだけ!

※詳しくは56ページで!



英語教育の“今”を知る。 明日からの授業が変わる。

グローバル時代を迎え、大きな転換期を迎えた日本の英語教育。

地球的視野を持って、多様な価値観を持つ人々と協働し、

社会課題を解決するために行動を起こすことのできる

グローバル人材の育成は喫緊の課題とされています。

このような時代をたくましく生き抜く力を育むために、

2020年度からは新学習指導要領が段階的に実施され、

センター入試は4技能を重視した大学入学共通テストへと変わります。

授業が変わり、入試も変わり、英語教育の重要性はさらに高まっています。

だからこそ、今、英語教育に関わる教員の皆さんには、

「生涯にわたり学び続ける自律した学習者を育てること」が求められています。

そのためには、目の前の子供たちの可能性を信じ、

子供たちが自らの考えや気持ちを表現し、伝え合う体験をいかにさせるか。

そして、自己肯定感をいかに育むことができるか、ということが大切です。

それは学びへの興味・関心を引き出し、学ぶ意欲を高めることにつながります。

英語教育とは、いわば人間教育そのものなのです。

全ては、これからの日本を担っていく子供たちの未来のために。

公益財団法人 日本英語検定協会は全国の教員の皆さんに寄り添いながら、

『英語情報』を通じて、各地で授業改善に取り組む方々の実践をはじめ、

英語教育に関する最新の情報をお届けしていきます。

2019年1月15日

公益財団法人 日本英語検定協会



英語情報 2019 冬号 CONTENTS



04



20



30



32

02 最新情報

02 NEWS & TOPICS

04 特集

04 「授業改善を考える」

新学習指導要領に向けて

中学校の授業のあり方と 果たすべき役割

文部科学省初等中等教育局 教科調査官 山田 誠志

CLASS REPORT

AR 10 〔高等学校編〕

生徒の深い学びにつながる問い掛けと
生徒とのやり取りを大切にした授業

徳島県 徳島市立高等学校 教諭 多田 聖子

AR 12 〔中学校編〕

「内容」を重視した指導を通じて
自分の考えや気持ちを表現する力を付ける

岐阜県 可児市立西可児中学校 教諭 高木 恵子

AR 14 〔小学校編〕

子供たちの思考を深め
英語で表現することを楽しむ授業づくり

三重県 四日市市立常磐小学校 教諭 川端 あみ

16 授業改善

16 〔連載〕【最終回】

中学校・高等学校の

授業改善と評価のあり方

明海大学 教職課程 准教授 百瀬 美帆

18 〔連載〕【最終回】

小学校外国語活動・外国語科の

授業で使える「評価」のためのアイデア

愛知県立大学 外国語学部 准教授 池田 周

AR 20 〔連載〕【第18回】安河内 哲也先生が聞く

明日から使える！英語で授業 7つの鉄則

滋賀県立米原高等学校 教諭 堀尾 美央

24 〔リレー連載〕新学習指導要領に向けて

〔高等学校編〕【第4回】

段階を踏んだディベート活動を通じて、
主体的に学ぶ姿勢を育てる授業

千葉県立磯辺高等学校 教諭 植草 智代

〔中学校編〕【第4回】

海外研修で学んだ

インプット（言語指導）のあり方

福島大学教職大学院 教職実践高度化専攻 菅野 賢介（現職教員派遣）

〔小学校編〕【第4回】

子供たちの伝えようとする気持ちを

大切にした授業づくり

茨城県 下妻市立総上小学校 教諭 鈴木 仁子

30 高大接続改革を見据えて

30 〔高大接続改革ニュース〕

受験生のためにも、実用英語技能検定
（従来型）採用を継続

～明治大学 牛丸 元 副学長（入試改革担当）に聞く

32 TEAP Hot News!

上智大学が2021年度入試において
「TEAPスコア利用型入試」を導入

34 TEAP活用事例のご紹介

東京都立桜修館中等教育学校

大妻中野中学校・高等学校

36 指導のヒント

36 〔連載〕【最終回】

英検2級・準2級・3級

ライティングテストを活用した
発信力の育成

Write more. Write well. Write it right!

清泉女子大学 文学部 英語英文学科 教授 大井 恭子

38 Pick Up! 英語教育

38 〔わが町の英語教育事情〕静岡県

「CAN-DOリスト及び言語活動」をベースに
「わかる」から「できる」授業へ

AR 42 〔EVENT REPORT〕

第68回 全英連滋賀大会レポート

「Be Active! ～児童・生徒が主体的に学ぶ英語教育～」

AR 44 〔小学校 授業実演〕

コミュニケーションの楽しさを味わい、
自ら求めて学ぶ児童の育成

大津市立晴嵐小学校 教諭 平山 美穂

AR 45 〔中学校 授業実演〕

即興的な対話力と発信力の育成
～言語活動の指導と評価～

竜王町立竜王中学校 教諭 関口 真

AR 46 〔高等学校 授業実演〕

虎姫高校で育てたい学習者像を目指した
英語指導のあり方

滋賀県立虎姫高等学校 教諭 川瀬 千津

48 〔EVENT REPORT〕

全英連の各地域ブロックでも

「英語教育研究大会」を開催

第66回 九州地区英語教育研究大会（日本のひなた宮崎大会）

第68回 東北六県英語教育研究大会

50 教員研修

50 〔2018年度 英検 英語教員海外研修報告 小学校教員編〕

自身の授業のあり方を見つめ直し

指導力の向上に努めた16日間

52 『英語情報』オススメ本

News & Topics

英語学習指導などに役立つ最新情報をお届けします

INFORMATION

生徒が学外で受験した、英検®・TEAPの成績が分かる！

英検協会より直接成績データが入手できる 英検・TEAP成績ダウンロードシステムをご活用ください

このたび公益財団法人 日本英語検定協会（英検協会）では、中学校・高等学校の先生方の進路指導等をサポートする「英検成績ダウンロードシステム」「TEAP成績ダウンロードシステム」をご用意いたしました。高校・大学入試出願時に提出する調査書（申請書）等には、「外部資格・検定試験等の資格取得状況」の記入が求められます。しかし、実用英語技能検定（英検）やTEAPの団体受験を実施されているいらっしゃる学校では、生徒様が学外で個人受験をした試験の成績を把握するために、先生方がご苦労されているのではないのでしょうか。

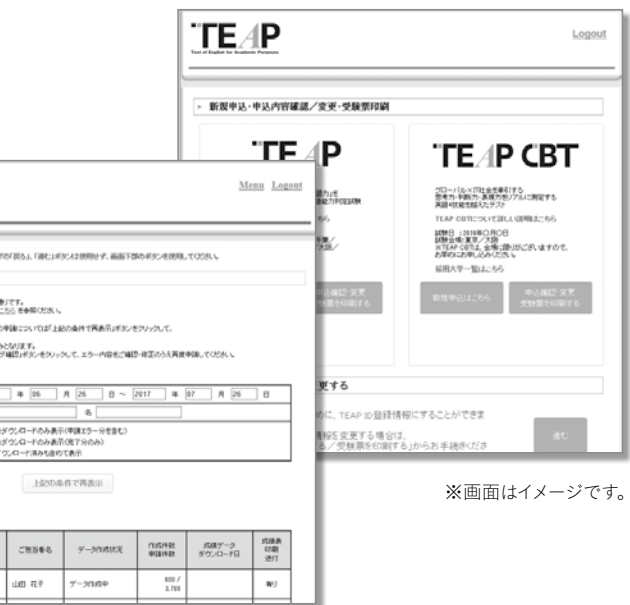
「英検成績ダウンロードシステム」「TEAP成績ダウンロードシステム」は、無料で簡単に登録・利用ができるサービスです。入試本番を控えたこの時期にぜひご登録いただき、生徒の学習指導、調査書作成や進路指導にご活用ください。

<英検・TEAP成績ダウンロードシステムご利用にあたり>

- ・申請書を送るだけで簡単に登録でき、無料でご利用いただけます。
- ・調査書作成時に必要な成績データを、英検協会から直接、Excel形式で一括ダウンロードすることができます。
- ・成績のダウンロードは、テンプレートに必要項目を入力するだけ。
- ・別途提供させていただく「英語外部検定 受験状況調査票」をご利用いただくと、調査書記入時に必要な情報を生徒様から簡単に収集することができます。



※現在リニューアル中につき、画面はイメージです。



※画面はイメージです。

英検・TEAP・IELTSで出願可能な大学を検索

英検・TEAP・IELTSの資格で出願可能な入試方式がある大学や、入学金・授業料減免等のサポートを整えている大学が多数ございます。英検協会ではそのような大学の情報をウェブサイトにてご紹介しております。

「英検成績ダウンロードシステム」「TEAP成績ダウンロードシステム」と併せて、進路指導にご活用ください。

<https://search.eiken.or.jp/qualification/>

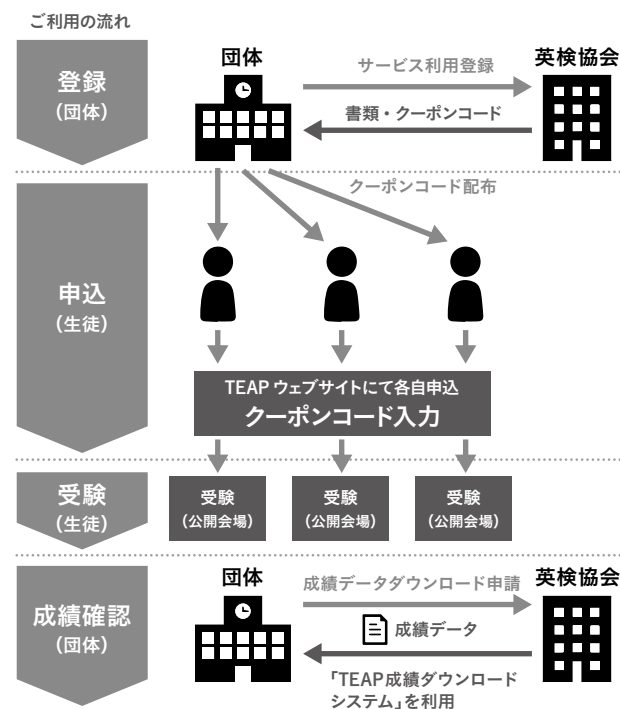


INFORMATION

「TEAP団体専用クーポン利用型申込」のご案内

TEAPの「団体専用クーポン利用型申込」は、受験申込を受験者個人が行い、受験料を学校（団体）が支払う方式で、受験者は一般の申し込みと同様に公開会場にて試験を受験するものです。団体受験責任者は必要な手続きを経たうえで、受験した生徒の成績データを前述の「TEAP成績ダウンロードシステム」より取得し、管理・分析にご活用いただけます。なお、受験料は学校経費や公費助成などを利用した支払いを可能としておりますので、受験者が直接支払い手続きをせずに受験することができます。お申し込みに際しては、受験者が各自で事前にTEAPウェブサイトから「TEAP ID」を登録する必要があります。

「TEAP団体専用クーポン利用型申込」についての詳細は、TEAPウェブサイトにてご確認ください。なお、本誌P.34-35にて、利用校の事例をご紹介しておりますので、併せてご覧ください。



【お問い合わせ先】

英検協会 英検サービスセンター TEAP運営事務局

TEL : 03-3266-6556

E-mail : teap-dantai@eiken.or.jp

英語教育関連書籍2冊を各1名様にプレゼント！

英語教育等に関する書籍2冊を、抽選で各1名様に差し上げます。本誌に関するアンケートにお答えいただき、ご希望の書籍番号をご明記のうえ、『英語情報』編集部までご応募ください。詳細はP.52をご参照ください。



NEWS

2019年度よりTEAPの試験会場を栃木・京都・長崎で新設

英検協会は、TEAPを2019年度も7月、9月、11月の年3回実施します。試験実施にあたっては、大学入試の外部資格・検定試験におけるTEAPの採用大学の広がりを受けて、昨年度までの20都道府県（北海道、宮城、秋田、茨城、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川、新潟、石川、長野、静岡、愛知、大阪、兵庫、広島、香川、福岡、熊本）に加え、新たに栃木、京都、長崎でも会場を設置することとなりました。

なお、会場がない地域の高等学校において、学年全員受験などをご検討していらっしゃる場合には、詳細な説明資料をご用意しておりますので、英検協会 (support-kokusai@eiken.or.jp) まで、お気軽にお問い合わせください。

TEAP 試験概要

■試験時間 リーディング 70分 / リスニング 約50分 /
ライティング 70分 / スピーキング 約10分

■受験料 4技能パターン 15,000円 (税込) /
2技能パターン 6,000円 (税込)

詳しくはTEAPウェブサイトにてご確認ください。

INFORMATION

「英語情報AR」アプリがバージョンアップ！



『英語情報』では、全国の小・中・高等学校の優れた授業実践の取り組みを記事と動画でご紹介しています。動画を視聴するには『英語情報AR』アプリ（無料）が必要です。お手持ちのスマートフォンやタブレット端末（iPhone/iPad、Android）にてアプリをインストールしていただければ、誌面上の「AR」と記された画像にアプリをかざすだけで、動画が自動再生されます。

なお、2019年1月よりアプリをバージョンアップし、動画のスクリーン後に誌面からスマートフォンやタブレット端末を離しても、動画が視聴できるようになりました。今後は『英語情報』が手元になくても、アプリ内で記事を読めるようになるほか、最新情報をお知らせするプッシュ機能も追加され、ますます便利になる予定です。ぜひこの機会にアップデートをお願いします。アプリのご利用方法については、巻末にてご紹介していますのでご覧ください。



※英検®は公益財団法人 日本英語検定協会の登録商標です。

新学習指導要領に向けて

中学校の授業のあり方と果たすべき役割

新学習指導要領のもとでは、小・中・高等学校の接続が重視され、英語の授業は児童生徒のコミュニケーションの場面とし、自分の考えや気持ちを伝え合う言語活動を通して指導を行うことが求められる。小学校で外国語活動や外国語を経験してきた生徒を受け入れ、高等学校での高度な言語活動への橋渡しをする中学校において、これからの授業はどのようにあるべきか。そして、中学校の果たすべき役割とは何か。文部科学省初等中等教育局教育課程課および情報教育・外国語教育課の山田誠志教科調査官にお話を伺った。



「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは？

 小学校 外国語活動	 小学校 外国語	 中学校 外国語	 高等学校 外国語
外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらを結び付けた統合的な言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(下線は編集部)

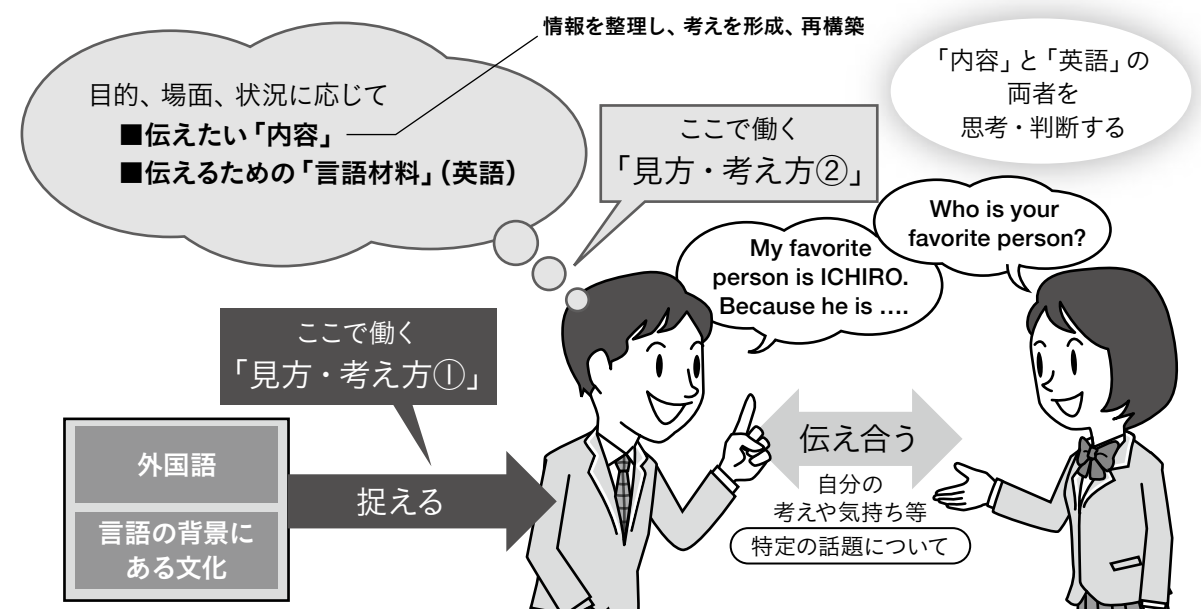
新学習指導要領の目標では、小・中・高等学校のいずれも、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ」という表現が使われています。それでは、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは何を指すのでしょうか。そして、「見方・考え方」を働かせる目的とは何でしょうか。

新学習指導要領解説では、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を「外国語によるコミュニケーションの中で、どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考し

ていくのかという、物事を捉える視点や考え方」であるとしています。そして、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて、情報や自分の考えなどを形成、整理、再構築すること」と示しています。つまり、「見方・考え方」を働かせる目的は、外国語で表現し伝え合うためであると言えます。

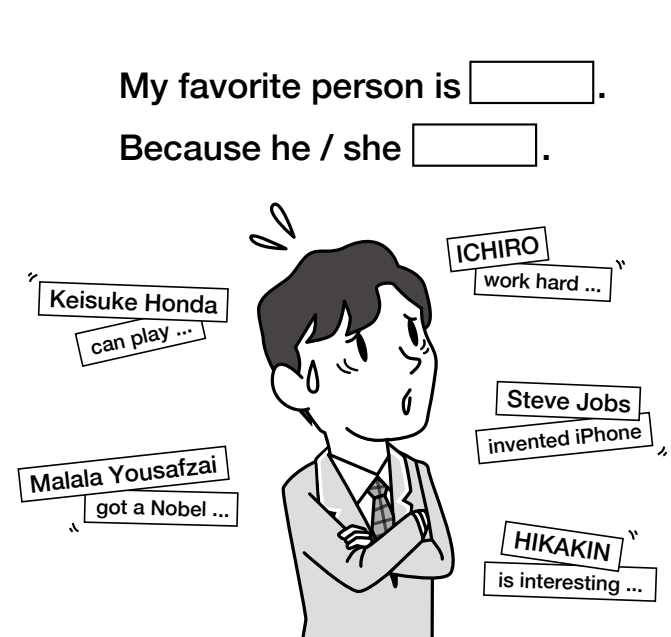
生徒が自ら伝えたい「内容」を考え、伝えるための「言語材料」も考える

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方（イメージ図）



中学校における言語活動を例に見てみましょう。My favorite personをトピックに、AさんとBさんがやり取りをします。2人はまず、「自分が大好きな人物は誰だろう?」と考え、Aさんはイチロー選手について伝えようと考えました。その時に頭の中では、「イチロー選手のどのようなところがすごいのか」「自分がイチ

ロー選手を好きな理由は何か」といった自分の考えや気持ち等を、英語でどのように表現し、伝えようかという思考が働いています。Aさんは伝えたい「内容」と、伝えるための「言語材料」の両者を考えています。新学習指導要領が求めているのは、このような思考や判断が生徒自身の頭の中で起こるような授業です。



人物や理由などの「内容」は考えているが…



目的・場面・状況等に応じて「見方・考え方」を働かせる

生徒自らが「見方・考え方」を働かせるために

しかし、実際の授業でよく見掛けるのは、先生が生徒に向けて、“Today’s topic is my favorite person. Please talk about your favorite person with your partner. Before that, I’ll tell you some useful expressions.”と言って、生徒たちがどのように尋ねたり答えたりすればよいのか、その表現を先に示している指導です。“Who is your favorite person?” “My favorite person is”やbecauseのあとに続くと思われる表現を黒板に書いて、「さあ、この表現を使って伝え合おう!」と活動が始まるのです。すると、生徒たちはこれらの表現を使ってやり取りをします

が、人物や理由などの「内容」は考えたとしても、「英語でどのように表現するか」ということはほとんど考える必要がありません。先生は、生徒が自分では英語で表現できないかもしれないという不安から、よかれと思って活動の前に表現を与えていると思いますが、英語の授業はコミュニケーションの目的・場面・状況等に応じて、生徒自らが「見方・考え方」を働かせ、表現するための英語も考えてこそ成立します。そのためには、「活動をする前に英語の表現を与えずに」ということが、「見方・考え方を働かせる」ための1つの方法だと言えるでしょう。

どのように表現と出会わせるのか？

しかしながら、活動の前に表現を与えず、トピックだけを示して生徒同士が活動する場合、そもそも自分の考えや気持ち等を伝えるための表現を知っていなければ、やり取りを続けることができません。アウトプットをするためのインプットの指導は欠かせません。それには、前述の例であれば、生徒に“My favorite

person is”や、becauseのあとに続く表現と、どのように出会わせるのかということが重要です。従来のように表現だけを先に与えて、文の構造を説明するのではなく、その表現を、いつどのように使うのかという場面のなかで捉えさせるという指導が大切です。このような捉え方をするために必要なことが、「見方・考え方」だと考えています。

このような指導は、小学校の先生方ならすでに実践されているでしょう。新しい表現を教えるときには、必然的な場面を設定し、その場面に応じて自然にその表現が使われるように、まずは音声により内容を推測させたくて、実際にコミュニケーションの場面で使って十分に慣れ親しませるという指導をしています。中学校では、言語材料の構造を理解させることも必要です。しかし、それを行うのはどのタイミングがよいのでしょうか。場面のなかで英語を導入し、音声を十分に聞かせ、実際に使わせてから当該言語材料の構造を説明して理解させるという順序による指導も必要です。

「言語活動を通して」指導するとは？

授業では、例えば教科書本文の内容に関する自分の考えを、生徒同士に伝え合わせるという活動を行っている先生がいっぱいいると思います。とても良い指導です。その際には、ペアでの活動が終わったら、いったん、共通して見られたエラーを取り上げて、「さっき、このように話している人が多かったけれど、どこが間違いだか分かる?」とクラス全体に投げ掛け、生徒自身に考えさせて、間違いに気付かせるという指導もできます。音声によるコミュニケーションではaccuracyを意識しづらいものですが、適切な時期に、明示的な指導を行うとよいでしょう。

エラーを修正するタイミングはいくつかあります。まずは、生徒がやり取りをしているときです。先生は教室を回って生徒の発話に耳を傾け、その場でリキャストをすることができます。ただし、リ

「活動あって学びなし」の授業としないために

これまでの授業では生徒にエラーを起こさせないような指導をしてきたかもしれませんが、これからの授業では思考力、判断力、表現力等を育成するために、言語活動のなかで出てきたエラーを拾い上げて指導することが求められます。新学習指導要領の目標に示されている「言語活動を通して資質・能力を育成する」ことを実現させようとした場合、このような指導は必ず行う必要が出てきます。活動のあとにいかに指導をするか。そこが大切です。それができなければ、「活動あって学びなし」ということ

先生がまず自らの考えや気持ちを話す

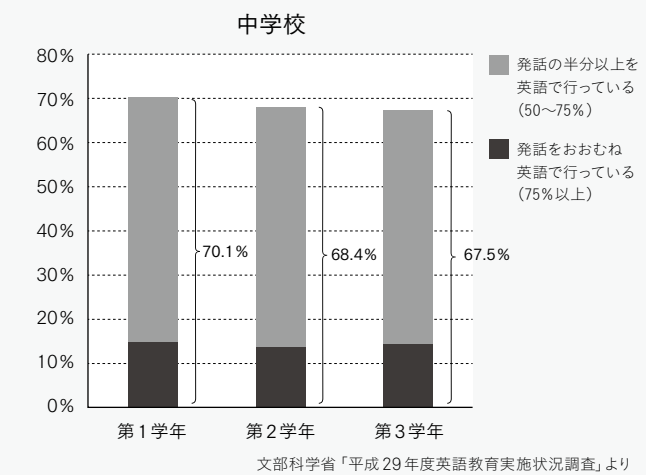
新学習指導要領では、中学校でも「授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする」と示されました。文部科学省の「平成29年度英語教育実施状況調査」によれば、右グラフのように、「授業における英語担当教師の英語使用状況」は中学校で「発話をおおむね英語で行っている（75%以上）」と「発話の半分以上を英語で行っている（50～75%）」を合わせた割合は、第1学年では70.1%、第2学年では68.4%、第3学年では67.5%となっており、前年度に比べて各学年ともその割合が上昇しました。この結果から、先生自身が授業中に英語を使うことへの抵抗感はさほど大きくはないと感じています。

ただし、授業における英語使用について、クラスルーム・イングリッシュの使用は大切ですが、それに加えて、コミュニケーションの手段としての英語も大切にしていきたいです。授業を実際のコミュニケーションの場面とするためには、先生ご自身も自分の考えや気持ち等を話すことが大事だと言えます。前述のMy favorite personをトピックとするなら、まず先生が好きな人物について話すということです。これまでに拝見してきた実践では、

キャストは生徒の気付きによるところが大きいことを踏まえ、粘り強く続けてほしいと思います。次に、活動を終えたときです。前述したように、明示的に指導します。そして、授業の終末、もしくは単元の終末です。授業で十分に音声によるコミュニケーションをしたあと、各自が話した内容について書かせる活動を取り入れます。その際には、先生がエラーを全て訂正せずに、クラスで共通に見られる間違いを次の授業でクラス全体に共有し、ペアやグループでどこがエラーなのかを考えさせるのも1つの方法です。エラーがある箇所に赤線を引いておき、どのように直すのかを生徒自身に考えさせる方法もあります。また、書いた英文をペアで交換して読み合い、内容についてコメントをしたり、エラーについて話し合わせたりすることもできるでしょう。

になってしまいます。言語を習得するには相応の時間が必要であり、その過程においては、エラーの含まれた発話や筆記があるものです。むしろ、それは正常な言語習得のプロセスを踏んでいることだと言えます。エラーをさせないのではなく、エラーがあっても当然、という気持ちで生徒と向き合うこと、そしてすぐにできるようにならないのは普通のことだと思うことはとても大切です。このような指導観や生徒観を持って生徒の前に立ち、授業を行っていただきたいと思います。

授業における英語担当教師の英語使用状況



生徒たちが主体的に自分のことを話そうとする姿勢が見られ、先生が自らのことを語る場面がありました。また、先生が話した内容について、生徒に“Do you know ...?” “What do you think ...?”などと問い掛けながらやり取りをして会話を広げ、生徒の考えや気持ちを引き出す指導もよく見ました。

間違いを恐れずに安心して話せる教室に

生徒が話した内容に対して、先生が驚いたり、共感したりというように何らかの反応を示すことも大切でしょう。思春期真っただ中の中学生は、自分の本当の考えや気持ちを、友達や先生に伝えるということが恥ずかしい年代でもあります。だからこそ、「先生が自分の話した内容を聞いてくれた」といった安心感を与えられると、「聞いてほしい」「もっと話したい」という意欲が湧くことでしょう。生徒は間違いや不十分さを毎回指摘されれば萎縮しますが、話したことを先生が受け止め、褒めてくれれば自信につながり、間違いを恐れずに話そうとするものです。

中学校はこれまで、どの生徒も同じようにスタート地点に立っていましたが、これからしばらくの間は小学校でどのような外国語活動、外国語の授業を受けてきたのかによって、入学段階で

の実態には差が生じるでしょう。だからこそ、「生徒同士で学び合う機会の保証」が大切になります。生徒間には学力の差や英語学習歴の差もあります。生徒同士がペアやグループで活動を繰り返し、お互いに学び合わせることが大切です。

授業の振り返りの際に「今日できるようになったことは何ですか」という設問に加え、「それができるようになったのはなぜですか」といった設問を入れることも大事です。「主体的・対話的で深い学び」を実現するには、学習の見通しを持ち、学習のプロセスを見つめ、学習したことを振り返り、次の学びにつなげることが求められます。したがって、「なぜできるようになったのか」という視点から振り返らせ、それを自覚させることも、今後は必要でしょう。

評価（テスト）も変える

各校で実施している定期考査にはまだ改善の余地があると考えます。従来のように暗記力や知識の有無だけを問うような出題をしていませんか。教科書本文を覚えてさえいれば、穴埋め問題や並べ替え問題ができて高得点になる、という試験では、生徒は授業中の言語活動は定期考査には生きないと考え、言語活動に真剣に取り組まなくなるかもしれません。国立教育政策研究所のホームページでは、平成30年度に実施した「英

語予備調査」の調査問題が公開されています（下記QRコード）。本調査問題を先生自身が解いてみることは、これから求められている学力について理解を深めることにつながるでしょう。テスト改善は、授業改善同様、大変重要なことです。今後の授業における指導や定期考査にも生かし、学習到達目標と指導、評価の一体化をめざしていただきたいです。

平成30年度に実施した「英語予備調査」の調査問題

	「読むこと」より	「書くこと」より
	7 次の英語は、あなたが見つけたイングリッシュ・カフェ（English Café）という催しのホームページの一部です。参加者が事前に準備すべきことを知るためには、この中の1から4のどの部分を読めばよいですか。最も適切なものを1つ選びなさい。 English Café Free English Program Date : Sunday, June 3rd Time : 3:00 p.m. - 5:00 p.m. Place : City Hall Restaurant <i>Come to English Café and ...</i> 1 -You can enjoy speaking English with people from many countries. -You can learn about their countries: the U.S., Australia, Canada, China, India ... 2 -You will have a chance to tell them about Japanese traditional things in English. Please think of something to talk about. 3 -We are going to have some food from other countries. Of course, there will be Japanese food, too. 4 If you have any questions about the program: You can send an email to midori@xxxxxx, call 0120-□□□-□□□, or visit our office at City Hall. 中英-15	10 初めて日本を訪れる外国人観光客向けに、パンフレットを作ることになりました。あなたは、A Gift from Japan!（日本らしいお土産）の記事を担当します。そこで、あなたがすすめるものを1つ決めて、理由とともに30語以上の英語で記事を書きなさい。 ※ 短縮形（I'm や don't など）は1語と数え、符号（、や？）は語数に含めません。 (例) No. I'm not. 【3語】 ※ 下の枠は、下書きに使っても構いません。解答は必ず解答用紙に書きなさい。 A Gift from Japan! ※ ここには、あなたが選んだお土産の写真正が入ります。 中英-25

「英語予備調査」の調査問題はこちらからダウンロードできます。



中学校が果たすべき役割は新学習指導要領の具現化にほかならない

新学習指導要領に向けて中学校が果たすべき役割とは何でしょうか。中学校入学段階における既習内容の把握と授業への活用。高等学校における言語活動の高度化に対応できるよう、学習内容の一層確実な定着。増加する語彙と追加された文法事項への対応。これらは全て中学校に求められていることであり、中学校の役割といってよいでしょう。これらを含め、中学校の外国語教育に求められていること（具体的な指導の方途例を含む）は新学習指導要領および解説に書かれています。ぜひ解説も読んでいただきたいと思います。

また、文部科学省のYouTube『mextchannel』の「外国語教育はこう変わる!」では、新学習指導要領の趣旨を踏まえた授

業動画を公開しています。授業者へのインタビュー動画も掲載していますので、ぜひ下記QRコードより、併せてご覧ください。

新学習指導要領は小・中・高等学校の一貫性を意識して改訂されました。冒頭で示したように、目標を一つとってみても、小・中・高等学校の接続、一貫性が明らかです。具現化するためには、いかに新学習指導要領に書かれている内容を咀嚼し、具体的な指導に落とし込むかにかかっていると思います。換言すれば、新学習指導要領の記述内容は、「要するにどういうことなのか」「ごく簡単な言葉を使うとどのように言い換えることができるのか」という視点で読み、授業を思い浮かべながら具体的に理解することが大切です。

文部科学省 YouTube『mextchannel』



授業研究会は、他校種の授業を見るとともに、「当たり前」を疑う柔軟な視点を持つ

小・中・高等学校の一貫性を意識した新学習指導要領のもとで、よりよい授業を実践していくためには、授業研究が不可欠です。小・中学校にはかねてより授業研究の文化が根付いています。これからは、校内や同じ校種だけでなく、異なる校種の授業を見る機会にも積極的に参加しましょう。小学校や高等学校の先生方も、もちろん同様です。文部科学省では「外国語（英語）教育強化地域拠点事業」を行い、各地域で小・中・高等学校が連携して研究開発課題に取り組んできました。その最終報告が、文部科学省のホームページに掲載されていますので（下記QRコード）、それらの取り組みに学ぶことも多くあると思います（『英語情報2018 秋号』特集記事でも同事業について紹介）。

また、授業研究では、これまでの「当たり前」を疑ってみてほしいと思います。例えば、「教科書音読が何度も行われているが、それは何のためにさせているのか」「教科書本文の内容理解をQ&Aで確認しているが、その方法で生徒全員の理解の状況を確認できるのか」「Small Talkが実施されているが、その活動でどのような力が身に付くのか」などです。当たり前のように行われてきているさまざまな指導について、「それは生徒のためになっているのか」という視点から見つめ直していただくことで、いろいろな指導のアイデアが生まれてくるのではないのでしょうか。教師の見方・考え方を柔軟にすることが必要だと思います。

文部科学省「外国語（英語）教育強化地域拠点事業」最終報告



勇気を持って一步を踏み出し、生徒の変容を味わってほしい

中学校の先生方が、授業以外にも学校行事や生徒指導、部活動などで忙しいなかで、授業改善に真摯に取り組んでいらっしゃることは尊敬に値します。その一方で、まだ言語活動主体の授業を実践されていない場合には、ぜひ、ここでお伝えした「見方・考え方を働かせる」「言語活動を通して指導する」ということを意識した授業に取り組んでいただければと思います。

これまで持っていた指導観や生徒観を変えて、新しい指導に踏み出すことは勇気がある場合があるでしょう。しかし、ぜひ新たな最初の一步を踏み出してください。例えば、明日の授業から1分でも2分でもいいので、自分のことを英語で話し始めてみる。最初は戸惑う生徒も、続ければきっと笑顔で耳を傾け始めるでしょう。自分たちも英語で話そうと、さらなる意欲をみせるでしょう。そのような生徒の変容を味わってほしいと願っています。私も自分がやれることは全てやりたいと思っています。未来ある子供たちのために、半歩前進の気持ちでお互いがんばりましょう。

山田 誠志（やまだ・さとし）

文部科学省初等中等教育局教育課程課および情報教育・外国語教育課外国語教育推進室教科調査官、国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官を併任。岐阜県市町村立学校教員、大垣市教育委員会指導主事、西濃教育事務所指導主事、文部科学省初等中等教育局国際教育課外国語教育推進室事業推進係長、岐阜県教育委員会学校支援課指導主事を経て、2018年4月より現職。





生徒の深い学びにつながる問い掛けと 生徒とのやり取りを大切にした授業

徳島市立高等学校は、1962年の開校当初より交換留学生制度を設け、県下の公立高等学校で初めて海外への修学旅行を実施し、国際人として広い視野を持つ生徒を育ててきた。多田聖子先生は、「理系の生徒こそ、将来は英語でアウトプットする力が求められる」と折に触れて生徒たちに伝え、授業ではデータや情報を整理して論理的に述べる力を養っている。生徒の深い学びにつながるような発問を投げ掛け、生徒同士のやり取りを大切にした普通科理系英数クラスでの「コミュニケーション英語Ⅲ」の授業を取材した。



教科調査官が見る多田先生の授業

文部科学省 初等中等教育局 教育課程課および情報教育・外国語教育課 下山田 芳子 教科調査官

多田先生は常にこやかな笑みを絶やさず、授業は終始和やかな雰囲気にあります。リスニングの教材としてALTへのインタビューを録画したり、インターネットで入手できる海外の番組の動画を活用したりするなど、教科書の本文と関連した新しい英語の情報を豊富に与えている点や、4人組のグループディスカッションで一人一人の役割を明確に決め、ディスカッションの進行そのものを練習させている点、Warm-upから始まる全ての活動が最後のディスカッションに向けて関連付けられており、生徒が段階を踏

んで自分の考えを形成していくことができるようになっている点など、言語活動を中心とする授業づくりで参考になる工夫が随所に見られます。気になった点としては、生徒への問い掛けやディスカッションのトピックの適切さです。抽象的過ぎて話し合うには焦点化が難しい、逆に単純すぎて高校生の発達段階にあった深い問いにはなっていないと思われるものもありました。今後は、生徒が英語でディスカッションをするなかで思考を深めることができるような問い掛けの工夫に期待しています。

【本時の目標】

- ① To be able to express your opinion logically by using your experience and what you learned.
- ② To be able to exchange your opinions by cooperating with classmates.

【教材名】

『SKILLFUL English Communication Ⅲ』（啓林館）
Lesson 10 If We Could Talk with the Animals...
全7時間中7時間目

2. Mika sensei's answer

ALTのMika先生にも同じ質問に答えてもらう。生徒たちはMika先生が答えている動画を見ながら、キーワードをワークシートに書き記す。聞き終えたらMika先生の答えについてグループで話し合い、クラス全体で確認する。



4. Jigsaw Activity

ボルネオ島のオランウータンTildaに関するニュース記事が教室の4カ所に貼り出されている。4人組のグループで、各自が担当する記事から読み取った内容を伝え、ワークシートの英文を完成させる。



6. Discussion②

"If you could talk with an animal, what animal would you like to talk to?"の問いについて、再びグループで話し合う。多田先生は生徒とやり取りをしながら発言を引き出していく。



多田先生の授業の様子は
こちら



1. Warm-up

本時の目標を確認し、ペア活動をする。3つの質問について、30秒で自分の考えをまとめ、パートナーと伝え合う。その内容を全体に共有し、多田先生が追加で質問して思考を深める。



3. Watch a video

教科書の題材に関連したBBC Earthの映像を視聴する。多田先生は"Are these animals talking? - Why?" "Can any animals talk and use language like humans? - Why?"と問い掛けた。



5. Discussion①

グループでのFour Role Activityにより、Discussion Leader、Speaker、Listener、Mood Makerの役割を交替しながら話し合い、自分の考えと友達の考えの共通（相違）点を知る。話し合った内容は全体に共有する。



7. Reflection

授業を振り返り、"Can any animals talk and use language like humans? - Why?"について、ニュース記事の情報や友達の意見も参考に、家庭学習として自分の意見を書いてくるよう指示が出された。

正解のない問いを投げ掛け、 生徒自身の考えを引き出す

「生徒には英語でコミュニケーションを楽しむことや素晴らしさを感じてほしいと思います。人と関わるのが楽しいと思える生徒を育てたいのです」と語る多田先生は、いつも優しい笑顔で生徒たちを見守っている。そのため、教室には温かい空気が生まれ、生徒たちが互いの考えを知ることを楽しみ、学ぶことに意欲的に取り組もうとする姿勢が見受けられる。

多田先生は生徒たちに、みんなが学び合う仲間であることを伝え、授業でのペア・ワークやグループ・ワークを通じて、生徒たちがと

もに学び、伸びていく機会を多く設けている。そして、生徒の深い思考を促すために、生徒が発言すると常に“Why?”や“What do you think?”といった問い掛けをして意見をさらに引き出し、全体で共有していく。そうして生徒に英語で考えさせ、自分の言葉で表現させて、内容のある英語を論理的に述べる力を養っているのだ。

生徒の言語活動を主体とした授業をつくるうえで、多田先生が大切にしているのは「教材研究」だという。「英語の教科書で扱う題材は、環境問題や宇宙科学、歴史、平和など幅広いジャンルにわたります。そこで、英語科教

員間だけでなく、題材に応じて他教科の先生と相談して私自身も学び、理解を深め、生徒にどのような情報を提供し、話し合わせるかを考えています」。授業では正解のない問いを投げ掛け、生徒に自ら考えさせ、発言させる。そして生徒たちは自分や友達のさまざまな考えに触れ、答えは1つではないことを知り、家庭学習では授業での意見交換を踏まえて、改めて自分の考えを整理し、英語で意見を論理的に書く。ときには、「英語の授業を通じて得た情報、友達と話し合って生まれた考えなどが、他教科の授業でも役に立った」という生徒からのうれしい報告を聞くこともあるという。

卒業しても学び続ける 自律した学習者を育てたい

この日の授業で多田先生は生徒たちに向けて、次のようなメッセージを送った。「これから皆さんは、正解のない問いと直面することもあるでしょう。その際にはぜひ、精一杯考えて、自分の意見を相手に伝えようと努めてほしいと思います。今日は皆さんが英語で考え、それを友達と伝え合おうとする姿を見ることができて大変うれしく、誇りに思います」。センター試験まで2カ月という時期にあっても、生徒の言語活動を主体とした授業スタイルはそのままに、音声や映像、文字

から瞬時に必要な情報をキャッチし、友達と意見を交換しながら自らの考えを深める学びによって、生徒たちは学びへの意欲を高めている。授業で見られたJigsaw ActivityやFour Roles ActivityによるDiscussionなどは、生徒たちが大学へ進学してからの学びの場でも大いに役立つものだ。実際に卒業生たちが来訪した際に、「ディスカッションでモデレーターをした」「留学先でも発言できた」などと、同校での学びが大学でも生かされていることを喜んでいるという。「卒業してからも自律した学習者として学

び続ける人であるためにも、今は土台を築く時期。だからこそ、生徒が自ら学ぶ力を培うために、私たち教師は種をまいています。生徒たちが大学へ進み、社会へ出ていくなかで、いつその種が花を咲かせるのかは分かりません。しかし、いつか開花した時には、高校生の時に経験した学びがあったからだと言ってももらえるよう、生徒とともに楽しいことや苦しいことを共有し、ともに成長していきたいと思います」。多田先生は生徒たちにいつも寄り添いながら、生徒にとって身近なロールモデルとして、今なお自身も学び続ける姿勢を示している。



「内容」を重視した指導を通じて 自分の考えや気持ちを表現する力を付ける

可児市立西可児中学校の高木恵子先生は、自分の考えや気持ちを表現するためにどのような英語を使えばよいのかを、生徒自身に考えさせることを大切にしている。そのために「内容」を重視した指導を通じて、場面に応じて必要な文法や表現を実際に使って覚えるという言語活動を繰り返し行う。3年生の授業を訪ね、生徒たちが自ら考え、表現し、ともに学び合う様子を取材した。



教科調査官が見る高木先生の授業

文部科学省 初等中等教育局 教育課程課および情報教育・外国語教育課 山田 誠志 教科調査官

Small Talk では、活動の始めに教師が行ったことと行わなかったことが着目に値します。行わなかったことは言語活動で使用する英語表現の明示。行ったことは動画で確認してください。生徒が「言えずに困ったこと」を全員に考えさせている場面での指導の仕方も参考になります。教科書本文の内容理解においては、文脈に着目して概要を捉える読み方を身に付けさせるための活動例が示されています。1文1文日本語に訳すという読み方を変えるための方途を考えるきっかけになるでしょう。教科書を読んだ「後」の言

語活動では、学力差を考慮し、最も印象に残った文を1文抜き書きするという活動に取り組みさせています。その文を選んだ理由を英語で書くことにも挑戦させています。また、お互いに読み合わせ、コメントを書かせたり誤りを直させたりするほか、多くの生徒に共通して見られる誤りを取り上げ全体指導する場面もあります。技能統合の指導、正確さを高める指導の好事例です。全体を通じて、生徒から引き出すこと、待つこと、笑顔で接し、よく褒めることなど、授業において大切なことが多くの場面で見られます。

【本時の目標】

アウンサンスーチーの政治生活に関する記事を読み、自分が感じたことや考えたことを書くことができる

【教材名】

『NEW HORIZON 3』（東京書籍）
Unit 6 Striving for a Better World
全10時間中5時間目

2. Read & Think①

アウンサンスーチーについて教科書から抜き出した6つの英文が、ワークシートのどの箇所に入るかを文脈から考え、ペアで話し合う。クラス全体で英文を声に出して読みながら順番を確認した。



4. Write your feeling and thinking①

3分間の制限時間内で、各自が本文中で一番印象に残った英文を書き記し、それを選んだ理由を添える。生徒たちが書いている間、高木先生は教室を回り、個々の理解度に応じてアドバイスをした。



6. 全体指導

生徒が陥りがちな表現のエラーを全体に共有する。高木先生は黒板に英文を書き出し、どこに間違いがあるのかを考えさせて意見を求めた。その後、各自が書いた英文をもう一度見直した。

※仮定法の用法については、次時に改めて指導した。



高木先生の授業の様子は
こちら



1. Small Talk

“Who do you respect?”について、高木先生と生徒が対話したあと、生徒同士のペアで対話する。日本や世界で社会に貢献した人物8人から、自分が尊敬する人物とその理由を伝え合う。



3. Read & Think②

本文中で印象に残った英文と理由を述べる。高木先生は生徒の発言を受け止め、“It is difficult for him to do that like her. If he was locked for 15 years, he would give up.”と言い換えて全体に共有した。



5. Write your feeling and thinking②

書いた英文をペアで交換して読み合い、加筆修正をする。“Why do you think so?” “What does it mean?”などと助言したり、間違いと思われる箇所は修正を書き添えたりする。



7. Write your feeling and thinking③

見直した英文について、自分の伝えたい考えや気持ちをどうしたら表現できるかを全体で確認する。異なる生徒とペアで確認し、加筆修正をしたあと、次時の予告をして授業は終了した。

なぜ、そのように考えるのかを大切に

8年間にわたる小学校教員の経験を踏まえ、今年度から再び中学校の英語科教員として教壇に立った高木先生は、以前よりもコミュニケーションの場面を意識し、内容を重視した指導に重点を置く。授業での生徒への指示はゆっくりとはっきりとした英語で、生徒が「今、何をしたらよいのか」を明確にする。そして、「自分の考えや気持ちをいかに表現したら相手に伝わるか」と問い掛け、生徒自身に考えさせる。生徒に発言を求める際には、生徒に寄り添いながら、生徒が自分の言葉で表現するのをじっと待つ。そのうえで生徒の発言を受け止

め、その内容を褒めてから、平易な英語を用いて言い換えて正しい表現へと導いていく。このような指導を通じて、生徒の気付きを促し、どのように表現したら相手に分かりやすく、正確に伝わるのかを意識させている。

高木先生は「授業では、教科書や友達と対話をしながら『自分ならどのように考えるか』を意識させるように問いかけます。その際、できるだけ短い時間で想起させ、自分の言葉で表現させることを心掛けています」と話す。Small Talk でもメインの活動でも、生徒と対話をしながら必ず“Why?”と問い掛け、自分の考えの根拠を添えて論理的に述べさせている。生

徒たちは既習の表現や単元で学んだ文法事項を使いながら、どのような場面で使うのかを理解し、表現する力を身に付けていく。

「単元の最初にまず、その単元で扱う文法事項や単元のゴールを示しています。今回の単元では、日本や世界で社会に貢献した人物について話す際に、関係代名詞を使って表現しました」と説明する高木先生。この単元はこれまでと異なり、社会的な話題が題材として扱われた。「当初は、生徒に身近な話題ではないので、必ずしも自分ごとに引き寄せて考えなくてもよいと思っていました」。しかし、授業を進めていくうちに、取り上げた人物について理解を深めな

がら、生徒が自分ごとに引き寄せて考え、表現しようとする気持ちが芽生えていたようだ。

英文と対話しながら読み進め、 自らの考えを表現する

高木先生は「英文を読んで理解するだけに終わらず、自分の言葉で考えや気持ちを表現できるまでに引き上げたい」と考える。読むことを文字の音声化や内容理解にとどめず、筆者はなぜそのように考えたのか、自分ならどう考えるかを意識し、対話をするように読み進めてほしいという。授業では、取り上げた英文が本文中のどの箇所に当てはまるのかを考え、意

見交換をする場面（上記動画2）があったが、生徒たちは意見を出し合い、学びを深めた。高木先生は「穴埋めの答え合わせではなく、なぜその箇所に当てはまるのかを文脈から推測してほしいのです」と活動の意図を述べる。

この単元では、このあとの残りの時間でさらに教科書を読み進め、生徒同士で自分の考えを伝え合う活動や、自分が尊敬する人物について、まとまりのある英文を論理的な構成で書く予定だ。終末には文法事項の定着度を測る単元テストや、1対1の対話によるパフォーマンステストも実施して評価に取り入れる。同校の成績評価はパフォーマンス評

価を重視しており、定期考査では教科書本文をそのまま出題せず、教科書の題材に関連した初見の英文の読解、表現、知識・理解を測り、リスニング問題も出題する。高木先生は「中学生は定期考査や高校入試を意識して、『間違えたくない』と正確さばかりを求めがちですが、自分の思いを伝える力を大切にしたいと考えます。そのためには、今後もマッピングをしてから考える活動を取り入れるなど、まず内容を重視し、自分の思いをどのような英語で表現すればよいかを生徒自身に考えさせることを重視した指導をしていきたいと思っています」と語った。



子供たちの思考を深め 英語で表現することを楽しむ授業づくり

四日市市立常磐小学校では移行期間に入った今年度、3、4年生で年間15時間、5、6年生で年間50時間の外国語活動を導入した。来年度は3、4年生で35時間、5、6年生で70時間の最大時間数で先行実施する予定だ。中学校の英語科教員免許を持つ川端あみ先生は、2年前に小学校教員として同校に赴任し、現在は4年生の学級担任として、子供たちの思考力・判断力・表現力を育む授業づくりに取り組んでいる。

【本時のめあて】

相手におすすめの文房具をわたそう

【教材名】

新学習指導要領対応小学校外国語活動教材

『Let's Try! 2』

Unit 5 Do you have a pen?

全4時間中4時間目

2. 単語の復習

フラッシュカードを使って、文房具の英語を復習する。川端先生が“What's this?”と問い掛け、児童を指名して発音させたあと、全員でリピートする。ひと通り確認したあとはカードを1枚ずつ見せながら、先生に続いて子供たちも発音した。



4. Activity

川端先生と児童によるデモンストレーションのあと、全員で“Do you have ...?” “Yes, I do./No, I don't.”と、ペアで聞き合って相手の持っているものをチェックした。次に、グループでお店を作り、パートナーが持っていないものを集め、活動後は相手にもらったものを全体に共有した。



6. 絵本の読み聞かせ

Polly Dunbar作の絵本『Dog Blue』をゆっくり、はっきりとした英語で読み聞かせる。川端先生は絵本に出てくる犬の色や名前を尋ねたり、“Do you have pets?”などと問い掛けたりして、児童とやり取りをしながら物語を読み進めた。



川端先生の
授業の様子は
こちら



1. 歌～Let's Chant♪

子供たちの大好きな‘Rain, rain go away.’をジェスチャーを入れて歌う。次にクラスの児童の名前を織り交ぜて再び歌うと、英語を楽しむ空気が生まれた。続いて、“Do you have ...?”と尋ねる表現をチャンツで口ずさませ、本時の活動へのつなぎとした。



3. Today's Goal～Small Talk

本時のめあてを黒板に書き出し、子供たちと声に出して確認する。川端先生がペンケースを手に、自分が持っている文房具を“I have”と紹介し、持っていなかった消しゴムについて児童に“Do you have an eraser?”と尋ねて、手渡してもらった。



5. Let's Watch and Think

世界の子供たちが持ち物について紹介する映像を見て、何を持っているのか、持っていないのかを聞き取り、クラス全体でやり取りをしながら理解する。自分たちとの共通点や相違点についても全体で話し合う。



7. 振り返り

今日の授業でできたことについて、振り返りシートに記入する。聞くこと、話すことについて、5段階評価で自己評価するほか、自分ができたことを自由記述させる。川端先生は教室を回り、児童それぞれと確認しながら内容を深めた。

学級担任だからこそ

子供の実態に応じた指導ができる

三重県四日市市では、市内全ての公立小学校に英語専科教員が配置されている。常磐小学校では5、6年生は専科教員が、3、4年生は学級担任と専科教員によるチーム・ティーチングで授業を行っている。2年前に同校に赴任した川端先生は中学校の教員免許を持っているため、初任から4年間、市内の中学校で教壇に立っていた経験を生かして、4年生の学級担任として1人で外国語活動の授業を行っている。

「中学校では教科担任として授業を行い、高校入試に向けて、知識を教え込むという指

導を意識せざるを得ませんでした。でも、小学校で教えるようになったら、知識の習得を求めるのではなく、映像やフラッシュカードなどを使いながら、子供たちが英語を楽しむ雰囲気があり、学びに対するポジティブな姿勢を感じました。英語を使ったやり取りで、自分の考えや気持ちを話すことの大切さを意識した授業づくりを心掛けています」と、川端先生は自身の指導への意識の変化を語る。そして、学級担任が授業を行うことについて、「日頃から個々の児童の状況が把握できている分、そのときの実態に応じて声掛けをするなど、きめ細やかに指導することができる」とメリットを感じているという。

授業づくりで大切にしているのは、子供たちができるだけ多く、英語を聞いたり話したり、まねをして話したりすることができる機会をつくることだ。デジタル教材やフラッシュカード、絵本などを使ってテンポ良く授業を進め、自らが率先して英語を楽しむ姿を見せている。また、新しい語彙や表現に出会わせるときには必ず子供たちとのやり取りを通じて何度も使って、一人一人の理解の様子を確認して、ジェスチャーを交えたり実物を見せたりしながら丁寧に進めていく。そしてメインの活動では、子供たちが自ら考えたり、気持ちを表現したり、伝え合う喜びを感じたり、思考を巡らせたりできるように目的や場面・状況を設定している。

臆せずに自分の考えを述べられる人に

教室では、どの子供も笑顔で積極的に活動に参加し、臆することなく自分の考えや気持ちを伝え合っていた。その背景には、川端先生が外国語活動に限らず、国語や算数でも言語活動を大切にしており、子供たちが自分の考えを発表し、みんなで話し合う場を意識的につくっていることがある。4月に学級担任となり、「討論のできる子供を育てたい」という目標のもとで、各教科等の授業を通じて、子供たちが自分の意見を持つこと、自分の意見を相手に伝えること、友達の意見を受け止めること、相手の気持ちを考えることを大切に指導してきた。それが外国語活動でも生かされているのだ。

「いつか子供たちが世界へ出て行ったときに、物おじせずに自分の意見を述べることができるようであってほしい。そんな願いを込めて、子供たちが授業で小さな成功体験を積み重ねながら、自分の考えや気持ちを素直に発言していいんだと思える学級づくりをしてきました」と話す川端先生。この日の授業でも、子供たちに常に問い掛け、考えや気持ちを引き出しながら、そのたびに褒めたり、驚いたりと反応しながら、子供たちが安心して発言できる空気をつくっていた。

2月1日の「第15回全国小学校英語教育実践研究大会 三重大会」では、川端先生や同校の高学年の先生が公開授業を行う。大

会に向けて、「これまでの実践経験を踏まえ、子供たちが思考し、表現することを楽しむ姿を見ていただきたい」と川端先生は考える。来年度、同校では外国語活動の授業を3、4年生で年間35時間、5、6年生は70時間として先行実施する予定だ。だが校内にはまだ、学級担任として外国語活動の授業を行うことに不安を抱える先生もいる。校長先生のリーダーシップのもと、英語専科教員や川端先生が中心となって校内研修を行い、クラスルーム・イングリッシュや絵本の読み聞かせの練習を重ねている。川端先生は「2020年度に向けて、学級担任が授業で活躍できる場をつくっていききたいと思います」と抱負を語った。

〔連載〕

中学校・高等学校の

授業改善と

最終回 自律した学習者を育てる授業の工夫



自ら進んで頂上をめざす自律した学習者

これまでの回で「思考力を伸ばす授業」「CAN-DOリストの活用 指導と評価の一体化」「妥当性・信頼性のある評価」について提案してきましたが、最終回ではこれまでの考えを登山に例えてみたいと思います。

初級登山者にとっては、学習到達目標である頂上が見えていればこそ、歩みを進める意欲が湧くはずです。まずはインストラクターの指導に従い、登山に不可欠な基礎体力を付け、さまざまな種類の登山道を歩くための道具の選び方、地図の読み方、天気図の見方などを学びます。そして、学んだ知識や技能を使いながら実地訓練を行い、道中は仲間と励まし合いながら計画に従って登ります。ガイド役のインストラクターは計画通りに登山が進んでいるかを評価し、登山者はこの評価を励みに先へ進みます。こうして頂上に到達した登山者が得た達成感、また山に登ろうというモチベーションとなります。

このように自ら進んで次の頂上をめざす登山者（学習者）こそが「自律した学習者」であると言えます。Holec（1981）は、自律した学習者とは「自分にどのような学習が必要であるかを見極め、学習のゴールを決め、その学習に必要な教材を選択し、自分の不得意な部分を認識し、適切な学習のペースや時間配分を決め、学習の進捗具合をモニターしたり、学習を評価したりすることができる学習者」であるとしています。この定義をそのまま学校での授業に当てはめることはできませんが、登山の例と合

わせて考えることで、授業を通して自律した学習者を育てる工夫を見いだしていきたいと思います。

「学びに向かう力」があれば
自律した学習者になれる

まず生徒がめざす頂上、つまり英語学習の目的はどこに置かれているのでしょうか。文部科学省が平成29年度に行った英語力調査（高校3年生）では、「身に付けたい英語力」について、34.9%の生徒が「海外旅行などをする時に、英語で日常的な会話をし、コミュニケーションを楽しめるようになりたい」と回答し、次点の「大学入試に対応できる力を付けたい」の19.5%を大きく上回っています。また、この質問項目と「話すこと」の調査結果（得点）とのクロス集計によると、「話すこと」においてB1レベルの得点を取った生徒のグループでは、60.1%が「英語を使って国際社会で活躍できるようになりたい」と回答しており、この傾向はほかの3つの技能についても同様に見られるという結果が出ています。つまり、多くの高校生のゴールは卒業時にあるのではなく、生涯のどこかにあるのです。もちろん教師は教え子たちが卒業後、自分自身のゴールに到達できたかどうかを検証することはできません。しかし、在学中に鍛えられた次の登山へのモチベーション、すなわち「学びに向かう力」があれば、自律した学習者になれるのです。

自律した学習者が育つ授業の具体例

さて、自律した学習者を育てる授業の具体的な工夫に目を向けてみましょ

う。私自身が2013年に千葉県立長生高等学校1学年において行った「タイ・マレーシア・ブータン・インドネシアにおける水事情を知り、水は貴重な資源であることを学ぶ」プロジェクト型学習を紹介します【表1】。前述の例えを引用するなら、1学年後期の登山体験です。

まず生徒にとっては、プロジェクトの講演者の出身国についてリサーチを行い、その国に関する質問を考えることが1つ目の課題です。授業で学んだ知識や練習した技能を使う機会となり、教師はグループごとに作成した質問を点検し生徒を支援しました。また、クラスによって違う国についての講演を聴いたあと、クラス代表生徒が講演のサマリーを作成、発表しました。この発表をビデオに収録し、インターネット上の専用のクラウドにアップロードして、生徒全員が期限までにほかの3カ国についてのビデオを視聴し、4カ国分のレポートを作成しました。

教師の支援や周到な準備が必須

このプロジェクトを通して「生徒が英語を使わざるを得ない場面」の提供は、教師の重要な役割の1つであると実感しました。また生徒の自律型学習には、教師側の周到な準備が必要であることも分かりました。学校教育における自律した学習者の育成には教師側の支援が重要であり、教師には講義型ではない教授法の知識や技能が必要です。そして指導実践のなかで、その知識や技能の使い方を学ばなければならないということになります。

もう1つの実践例、ディベートマッチ

評価のあり方

百瀬 美帆（ももせ・みほ）

明海大学教職課程准教授。千葉県内の公立高等学校で、長年にわたり4技能を育む英語授業、国際交流プログラム等先導・推進してきた経験や県内の教員研修講師等の経験を持つ。2017年4より現職。『レクス英和辞典』（旺文社）、外国語教科書『empathy oral communication I・II』（教育出版）などの執筆のほか、文部科学省作成『Broaden Your Horizons with English! - 英語を使って羽ばたく日本人 -』DVD添付用ワークシート作成に携わる。

【表1】千葉県立長生高等学校で行った1学年の「コミュニケーション英語I」でのプロジェクト型学習
使用教材：『Genius English Communication I』（大修館書店）Lesson 8 Water Crisis

配当時間	授業	リサーチ活動（授業外）	レポート作成（授業外）
6	水の惑星と呼ばれる地球が現在、水不足の危機に瀕していることを知り、それを防ぐ方策および水不足解消のための科学技術について学ぶ。	講演者の国についてリサーチし、グループごとにその国に関連した質問を準備する。	
1	アジアアカデミー講師4人の講演「タイ・マレーシア・ブータン・インドネシアにおける水事情」* ※1クラスにつき1人の講演者 ※生徒は講演者に対して準備した質問をし、理解を深める。		・グループごとに講演内容を項目に沿ってまとめ、英語担当者に提出する。 ・教師がサマリー作成に必要な情報の有無を点検する。
6	Lesson 9 Coffee and Fair Tradeの授業 授業は次の課に進んでいます が、生徒は各自でビデオ視聴の計画を立て、4カ国の水事情についてまとめたレポートを期限までに提出します。		講演内容を他クラスと共有するためのプレゼンテーション作成希望者を募集する。
		プレゼンテーション用Power Pointを作成する。	
			各国の水事情についてのサマリープレゼンテーションをビデオ撮影し、クラウドで管理する。
		クラスでの講演以外の国の水事情についてビデオを視聴して、4カ国分のレポートを完成させ、提出する。	

*千葉県では、県内の高校生の国際意識の醸成を目的として、独立行政法人日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所と合同で平成13年度から幕張アジアアカデミー事業「アジア総合学科」を開催しています。

も紹介します。ディベートの基礎的知識や技能を指導したあと、クラス内ではグループ対抗戦、学年内ではクラス対抗戦を行いました。「勝負」がつく活動ですので、生徒たちのなかには自然に強い意欲が湧き上がり、チーム内で一人一人が役割を担うことで全員が責任を持って準備にあたり、進んで学習活動を行うようになりました。

ここでも教師の役割は重要です。対抗戦までの指導過程での関わりはディベート指導法等に紹介されていますが、特に私が実感したのは、対抗戦後の教師からのフィードバックが生徒の意欲を刺激するということです。「この勝敗

はこういう理由によって決した」ということを、ジャッジ役の教師が分かりやすく論理的に提示することによって、対抗戦が「勝負ごと」から「学習活動」へと昇華します。ここでも教師には特別な知識・技能と実践力が求められますが、英語科全体で取り組むことで個々の負担を軽減することができました。

最後に

「中学校・高等学校の授業改善と評価のあり方」について書いてきましたが、これまで紹介してきたことが、新学習指導要領を踏まえた授業の実現に努力されている先生方のヒントになれば、と

願っております。私は改善の第一歩は同僚性を高める「チーム英語科づくり」から始めると信じています。先生方が協働する姿は生徒にとつての良きモデルとなることでしょう。

最後に、William Arthur Wardの言葉で本稿を締めくくらせていただきます。

Four Types of Teachers

- ・The mediocre teacher TELLS.
- ・The good teacher EXPLAINS.
- ・The superior teacher DEMONSTRATES.
- ・The great teacher INSPIRES.

授業で「評価」のための 使えるアイデア

最終回：「学習のための評価」～問い掛けによって児童に学びを意識させる～

これまで「指導と評価の一体化」をめざすための活動例として、「CAN-DOリスト形式のポートフォリオ」を用いた学びの振り返りや、各時の目標を段階的に設定するからこそ可能な「授業終わりの簡単なパフォーマンス評価」などをご紹介してきました。大切なのは、これらはいずれも「形成的評価」として行われるということです。

外国語教育における形成的評価

診断的評価：事前に学習者の状況を把握し、学習・指導の計画に反映して成果を最大限にするために行う。

総括的評価：単元や学期、年度など一定期間の学習後に到達度や習得状況を総合的に把握するために行う。

形成的評価：学習の過程のなかで到達度や習得状況を把握し、その後の学習・指導の改善に生かすために行う。

評価は上の3つに大きく分類されます。以前にも触れたように、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（中央教育審議会、平成28年12月21日）では、小学校高学年の教科としての外国語教育における「観点別学習状況の評価」について右記のように述べられており、外国語学習の過程を通して継続的に、場面ごとに適切な方法を用いて児童の状況を把握する「形成的評価」の活用が求められることが分かります。

「学習のための評価」という考え方

評価の3つの種類のうち、学習・指導成果の検証を行うための総括的評価が「学習の評価（assessment of learning）」であるならば、形成的評価は「学習のための評価（assessment for learning）」とする考え方があります。この評価において、指導者は得られた情報に基づいて指導内容や方法、計画を修正するとともに、学習者に現時点での学習状況や今後の学習方法について十分かつ適切なフィードバックを与えます。それを学習者も具体的に理解することで、学習者自ら学びの改善を図るようになり、学習への動機付けも高まることから、結果として学習成果が上がることを期待できるという評価の捉え方です。

さらにこの「学習のための評価」のうち、「学習者としての自分自身」について学ぶことを通して「どのように学ぶか」を意識させ、学習者の「メタ認知

能力（自分の学習状況を客観的に捉え、評価し調整する能力）」の発達を促す側面を強調する、「学習としての評価（assessment as learning）」という考え方もあります。学習者が次第に自分の力で学習活動を振り返り、改善できるようにするため、学習の初期段階から定期的に、指導者の支援を得ながら自己評価やほかの学習者とのピア評価（相互評価）を行っていくことを重視するものです。

小学校の外国語教育においても、このような学習の過程で行われる評価を通して「今の段階で自分は何ができるのか」「何をどのように理解しているか」「以前からどのように進歩したか」「目標にどれだけ達していないのか」「どこに困難や混乱があるのか」などを把握し、「どのように学ぶか」を自分で考えて学習を継続することのできる「自律的な学習者」の育成をめざすことが大切です。

必要な資質・能力を育成するための学びの過程を通じて、筆記テストのみならず、インタビュー（面接）、スピーチ、簡単な語句や文を書くこと等のパフォーマンス評価や活動の観察等、多様な評価方法から、その場面における児童の学習状況を的確に評価できる方法を選択して評価することが重要である。（下線筆者）

評価に必要な情報を引き出す

「学習のための評価」において、指導者は次のような役割を果たしながら、「observing（観察する）」「listening（注意して聞く）」「questioning（問い掛ける）」「discussing（話し合う、議論する）」「reviewing their work in progress（進行中の課題を点検する）」という方法で指導改善や学習者へのフィードバックに必要な情報を収集します。

・「良い学びとは」について学習到達目標に照らし合わせて具体的に示し、学習者と共有する。

・自己評価のための具体的な観点を分かりやすく示す。

・学習者が自分の学びや思考を確認するための問いを段階的に提示し、その過程を導く。

・学習者に考える時間を与え、振り返りや疑問を言葉で表すように促す。

・学習者が相互に問い掛けながら高め合い、理解し合える雰囲気をつくる。

・学習における曖昧さや不安への耐性を高められるように支援する。

外国語活動や外国語においては、英語という言葉についての知識・技能の習得状況に加え、言語としての日

本語と英語の相違や、円滑なコミュニケーションに重要な要素などの理解の状況についても、評価のための情報を集めます。観察や課題の点検のほかに、例えば次のような働き掛けや問い掛けを行って、学習者の思考や自己評価を把握することができます。

・言語活動の途中で、「どういう（誰の、どのような）パフォーマンスが良いと思うか」と児童に問い掛け、考えを引き出す。重要な指摘が出ればそれらを具体的に整理し、再開後の活動において留意させる。

・さまざまな語句や表現を聞いたり言ったりするなかで、「日本語の言い方とどこが同じ（違う）か」「面白いと思う（発）音はどれか」「今まで習った言い方とどこが同じ（違う）か」といった問いを与えて、発音や文構造など言語の形式的側面に注目させ、気付きや考えとして引き出す。

・「振り返りシート」を単元や学期など学習の区切りで1冊にまとめておき、適宜読み返しながら、自分の変容を含めて本時の振り返りを行わせる。各時の目標を踏まえたとうえで「目標に達するにはまだ何が足りないか」「友達の発表で見習いたいところはどこか」「まだ難しいと思うのはどのようところか」「次の授業で何をが

んばりたいか」など具体的な問いを設定して考えを引き出す。

小学校段階の外国語教育では、「正確さ」や「適切性」の観点から筆記テストやパフォーマンステストで十分な評価を行うことがまだ難しいからこそ、毎回の授業のなかで児童に語り掛け、問い掛けることにより、気付きや思考を意識化させ、言葉で表現させることが重要です。それが評価のための情報の一部になるからです。指導者は得られた情報をしっかりと分析し、指導改善と児童一人一人へのフィードバックを行うだけでなく、良い気付きや振り返りをほかの児童とも共有することにより、クラス全体に評価の波及効果（washback effect）を促したものです。

最後に

移行期間1年目も終わりに近付き、「全面実施後の評価がどうなるのか不安だ」という先生方の話をよく伺います。児童が英語の学習についてどのように考え、自らの習得状況をどう捉えているかを、日本語で構いませんので、まずは指導者からの問い掛けによって引き出し、明らかにすることから評価への取り組みを始めてみてはいかがでしょうか。

【参考文献】

Assessment Reform Group (2002), Research-based principles to guide classroom practice, available at: http://www.hkeaa.edu.hk/DocLibrary/SBA/HKDSE/Eng_DVD/doc/Afl_principles.pdf



池田 周（いけだ・ちか）

愛知県立大学外国語学部准教授。英国ウォーリック大学博士課程修了。博士（英語教育・応用言語学）。小学校英語教育学会愛知支部理事、「愛知県義務教育問題研究協議会専門部会」委員、文部科学省「小学校の新たな外国語教育における補助教材の検証及び新教材の開発に関する検討委員会」委員などを務める。外国語としての英語リテラシー習得について、小・中・高等学校を通じた指導のあり方、および国語科と外国語科の連携に関心を持つ。

〔連載〕

安河内哲也先生が聞く

英語で授業

安河内 哲也 (やすこうち・てつや)

一般財団法人実用英語推進機構代表理事、東進ハイスクール、東進ビジネススクール英語講師。文部科学省「英語教育の在り方に関する有識者会議」委員を務める。英語学習の楽しさを世に広めるべく、テレビ番組などでも大活躍中。英検1級など英語関連の多数の資格を持つことでも知られる。



明日から
使える！

【第18回】

7つの鉄則

滋賀県立米原高等学校

堀尾 美央 先生

堀尾 美央 (ほりお・みお)

滋賀県立米原高等学校教諭。普通科英語コースの授業を担当するほか、ESS部の顧問を務める。授業や部活動でSkypeを使って海外の子供たちや生徒、先生との交流、協働授業を行う。2016年度JICAグローバル教育コンクールで「JICA理事長賞」を受賞し、2017年度には英国の非営利教育団体であるパーキー財団による「グローバル・ティーチャー賞」のトップ50に選出された。2018年11月の全英連滋賀大会では分科会で「Skypeを活用したグローバル教育の可能性」について発表。

英語を使って世界とつながり、 コミュニケーションをする楽しさを伝えたい

新幹線と在来線が乗り入れする米原駅を持つ一方で、人口減少が大きな課題となっている米原市。堀尾美央先生は緑豊かな森の中に校舎を構える滋賀県立米原高等学校で、生徒たちに英語を使って世界とつながり、気持ちが通じ合う楽しさを味わってほしいと考えています。しかし、市内に住む外国人は500人ほど。「海外との接点もなく、外国人と接する機会も少ない地方の高校生が、海外の生徒と関わる機会を増やしたい」との熱意から、Skypeを使った交流授業などに取り組んできました。普通科英語コース2年生の「コミュニケーション英語Ⅱ」の授業を訪ね、話す内容や知識を持って、思考を深め、英語力を高める言語活動の様子取材し、英語で授業を行う7つの鉄則を伺いました。

ICTを活用して理解を促し、英語でのやり取りを通じて自分の意見を論理的に発信する力を付けている生徒たちの様子にご注目ください。



堀尾先生の
授業の様子は
こちら

本日の授業

英語コース2年生「コミュニケーション英語Ⅱ」

使用教科書：Revised ELEMENT English Communication Ⅱ（啓林館）／単元名：Lesson4 Life in a JarよりPart1、2

導入・復習

英語で考え表現するVocabulary Quiz

ペアを組み、自分が選んだ本文の新出語彙について英語で説明し、それが何を表す語なのかを相手が答えるVocabulary Quizから授業を開始。お互いに問題を出し合ったあと、クラス全体に向けて1人の生徒が出題し、ペアで話し合って解答する。その際、堀尾先生が補足説明をして答えを引き出した。続いて、本文Part1と2に関するQuestion and Answerにより、本文内容を確認した。



展開①
ペア・ワーク

映像から状況を描写し、本文内容を理解する

教科書の題材に関連した、1945年当時のワルシャワのユダヤ人強制居住区（ゲットー）内部の映像を視聴する。1人の生徒は目を閉じ、もう1人の生徒が音声のない動画に映し出された人々の様子を英語で描写するのを聞き、どのような状況なのかを質問しながらペアで内容を理解する。そのあと、クラス全体で内容を共有した。続いて全員で再び映像を視聴し、堀尾先生は「なぜ子供たちは路上で眠っているのか？」について質問し、ペアで意見を交換させると、これが本文で学んだポーランドの慈善活動家イレナ・センドラーが、ゲットーにいる子供たちを救おうとした理由であると説明した。



展開②
意見交換

本文内容から読み取った自分の考えを伝え合う

イレナ・センドラーが子供たちをゲットーから救おうとしたときに、どのような問題に直面したのかについて、教科書本文をもとにペアで考え、全体で共有する。さらに、4人一組のグループを組み、ほかにどのような問題があったのかを本文から読み取り、意見交換をした。1人が発表している間、ほかの3人は必ずメモを取りながら相手の意見に耳を傾ける。4人が発表したあとは、グループで出たアイデアをクラス全体で共有する。生徒からは「多くの子供たちを救うにはほかの人の助けが必要であった」「子供たちをじゃがいも袋に入れて連れ出す際に、袋の中で子供が動いてしまい見つかってしまうかもしれない」などの意見が出た。



展開③
手紙を書く

想像力を働かせて、両親を説得する手紙を書く

グループで話し合った問題の解決策も踏まえ、ゲットーから子供たちを救い出そうとするイレナ・センドラーになりきって、わが子と離れることに難色を示す両親を説得する手紙を英語で書く。想像力を働かせること、解決策を少なくとも1つは挙げるなど求められる。堀尾先生は「もし、自分がゲットーにいる子供だとしたら、ある日突然、イレナ・センドラーが現れ、あなたを連れ出そうとしたら、両親はどのような気持ちになるのか。その両親を説得するには、どのような言葉で伝えればよいのかを考えてみましょう」と呼び掛けた。



まとめ

登場人物になりきって、心を込めて言葉を伝える

ペアで1人の生徒がイレナ・センドラーになりきって自分が書いた手紙を読み、もう1人の生徒はユダヤ人の両親になりきって聞く。生徒たちはどうしたら両親を説得できるのかを考えながら、ひと言ひと言に心を込めて発した。最後に、1人の生徒がクラス全体に向けて自分が書いた手紙を発表すると、堀尾先生と生徒たちは大きな拍手で称賛して授業を終えた。



鉄則その1 ちゃんと反応する

コミュニケーションとは言葉で伝えるだけではありません。生徒には私からの問い掛けに対して、内容を理解できたろうなずく、分からなければ表情を変えるなど、何らかの反応をして気持ちを伝えてほしいと指導しています。そして私自身も生徒に対して、「Do you understand?」や「React!」と呼

び掛けてコミュニケーションを促し、「いかに自分の言いたいことを伝えるか」という姿勢を示すように指導しています。そこで、1年次から「Amazing!」や「Great!」などといったリアクションの表現に慣れさせておき、生徒同士が英語でやり取りをする際には、相手が言ったことにしっかりと反応をして自分

の意見を言い、コミュニケーションを深めるよう促しています。



鉄則その2 やり取りを大切にする

教科書本文の内容確認のための Question and Answer 以外でも、授業中はできる限り英語で生徒と対話をするようにしています。初めは完璧な文でなくても構いません。単語が出てこなくて生徒が困っているときなどには、最近学んだ単語や言い回しを使って「こういう言い方ができる」と提

案したり、何か単語1つでも生徒が発したら、それに対して教師が言い換えたりすることで、英語でのやり取りがどのようなものかを示しています。また、生徒同士がやり取りをする際には机間巡視をしますが、会話が止まっているペアを見つけたら、「なぜそう思うのか」などと追加の質問を投げ掛けるこ

とで、生徒自らが考えを深めながら、少しずつ前に進めるように努めています。



鉄則その3 英語って、すごい!

私は中学生の頃に海外の同年代の人たちと文通したことで、英語が使える楽しさを知り、どんどん英語が得意になっていった経緯があります。ですから生徒たちにも、英語を学ぶ意義を実感してほしいと思って教えています。以前、授業でスペインの子供たちと Skype で交流したときは、「お互い母国

語が違うのに意思疎通ができてしまうなんて、やっぱり英語ってすごい!」と感想を述べた生徒がいました。翻訳技術が発達しても、人と人が直接、自分の言葉で表現してこそ、通じ合う楽しさを感じられるものです。単に大学入試や定期考査のためだけではなく、「英語が通じた」「英語を通じていろいろな考

え方を知ることができる」という面白さを実感できれば、将来も生かせる英語につながると思います。



鉄則その4 ICTを活用する

ICTは、無理やり使うものではなく、今まで不可能だったことを可能にするために活用できるものだと思います。今日は教科書の題材を扱った音声のない映像を見せ、自分が見た映像を、目を閉じている相手に自分の言葉で伝えるというペア活動をしました。文字だけでは理解できなくても、映像

を見れば一目瞭然という場合もあります。また、英問英答の活動をする際には、ノートパソコンをプロジェクターにつないで Word や PowerPoint の画面を黒板に投影し、生徒たちの答えを拾ってその場で入力していき、全員で多様な答えを共有できるようにしています。生徒にとっては、自分の解答が

参考にされれば自信になり、ほかの生徒にとっても「そういう考え方もあるのか」という学びにもつながります。



鉄則その5 本物に触れる

教科書には異文化理解やほかの国での出来事について学ぶ話題が多くあります。そこで、Skype をつないで実際にその国の人たちと交流して意見を聞いたり、教科書には書かれていない現実を教えてもらったりすることで、教科書での学びを現実結び付けていきます。昨年度に南アフリカの水問題について学んだときは、南アフリカの小

学校の校長先生から、水を得ることの大変さについて話を聞きました。1日に使える水の量が決まっていて、インフラも整っていないなど、教科書に書かれていない現実を教えてもらいましたが、生徒たちはそのことよりも、陽気に明るく笑って話してくれる南アフリカの先生の様子に、「私たちからすると大変そうな生活のなかでも、ものすごく人生が

楽しそう」と、それまでに抱いていたイメージとは違う印象を得たようです。
※交流の様子はページ下の動画をご覧ください。



鉄則その6 異なった意見を歓迎する

授業中は生徒の多様な意見を極力拾うようにしています。ときには一斉に黒板に意見を書かせて、1つ1つの意見に対して、「それはなぜか」「その根拠は?」などと質問して、AREA (Assertion – Reason – Evidence – Assertion) 構造で文を組み立てていき、スピーチの練習を兼ねることもあります。生徒がお互いの意見を認め

合うためには、教師のフィードバックが大切だと思います。そのため、ある生徒が言った意見に対して、ほかの意見がないかと別の生徒から引き出してシェアしたときに、それぞれの意見の観点の良さを全体に伝えるように努めています。生徒にはディベート的な活動を通じて、自分とは異なるものの見方・考え方に触れて新たな気づきを得

たり、相手の主張に対してどのような反論をしたりするかといった思考を大切にしてほしいと思います。



鉄則その7 内容+英語で興味を刺激する

英語の授業、特に「コミュニケーション英語」の教科書で読む英文の話題は、異文化理解、環境問題、パイオグラフィー、歴史など多岐にわたります。そのため、私は「英語を学ぶ」というより、「(内容を)英語で学ぶ」ことを意識して授業をしています。私自身も、教材研究の段階で本文を読んでいて

分からないことがあれば、社会科や理科など他教科の先生によく質問をしています。そして、私だけでは教える内容にも限界がありますので、そのようなときは、教科書の題材に関連する内容について新聞記事や動画を探して、それらを授業で活用しています。そのようにして授業をつくっていき、生徒たちが

「へえ～」と納得したり、「あー、そっか!」と気付いたりする場面が私は大好きです。



Skypeを活用した交流授業

Skypeで南アフリカの校長先生とつなぎ、教科書の内容に沿って意見を交換

堀尾先生は2016年度からSkypeを活用した授業を継続しており、互いの国を知らせないまま質問をし合うことで国名を当てるMystery Skypeという交流授業のほか、教科書の内容に沿った意見交換も行っています。これまでに25カ国以上と交流授業を行ってきました。

2017年12月には普通科英語コース1年生が、南アフリカのPula-Madibogo Primary SchoolのPhuti Ragophala校長とSkypeをつなぎ、教科書で学んだ南アフリカの水問題について現地の状況を知るため、英語で質問し、話を聞きました。生徒と校長先生のやり取りの様子を動画をご覧ください。



高等学校編

第4回

段階を踏んだディベート活動を通じて、主体的に学ぶ姿勢を育てる授業



千葉県立磯辺高等学校
植草 智代 先生
Tomoyo Uekusa

高等学校の新学習指導要領では、生徒が身に付けた知識を活用し、課題の解決方法を探る授業を通じて、主体的に学び、生涯にわたって学び続ける姿勢を養うことをめざしています。現行の学習指導要領の「4技能を総合的に育成する指導を充実させる」という基本方針をさらに充実、発展させ、生徒の言語活動を高度なものにしていくために、どのような授業が求められているのでしょうか。第4回は、千葉県立磯辺高等学校の植草智代先生がこれまでに実践してきた授業をご紹介します。

3年間を通したディベート活動の事例

新学習指導要領を踏まえ、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った学習到達目標と指導、評価の一体化が求められています。2018年4月に現任校に赴任して以来、日々試行錯誤をしていますが、まだ本校での実践例が少ないので、前年度まで勤めた千葉県立長生高等学校での取り組みと合わせて紹介いたします。

まず、長生高等学校のCAN-DOリスト形式の学習到達目標（平成29年度版）のなかには下記の項目がありました。

- (S) 多様な考え方ができる話題について、立場を決めて意見をまとめ、相手を説得するために意見を述べ合うことができる
- (W) 構成や表現に留意しながら、意見文を書くことができる
- (L) 社会的な話題について話されている対話や討論などを聞いて、情報や考えなどの概要を捉えることができる
- (R) 社会的な話題や時事問題について書かれている説明や評論などを速読して、概要を捉えることができる

これらの力を育むために、3年間を通してディベート（的）活動を取り入れています。1年次より、授業のWarm-upやOver to youなどで意見を問うペア活動時には、“Why?” “How?” “For example?”

“Can you tell me more?”などと会話を続けるように指示し、A (Assertion) —R (Reasoning)—E (Example)—A (Assertion)という流れに親しませます。

そして1年次の秋～冬頃には、「コミュニケーション英語Ⅰ」の授業の約8時間を使い、学年全体でアカデミックディベートを取り入れています。導入時では、「説得力のある理由」「信頼できる情報」「反駁の仕方と効果的な質問」などに焦点を当てながら、スモールステップを踏み体験的に学習していきます。その際、

教員は、トピックに関連した題材を用意して意見の構築や表現の借用を促したり、ディベートの各役割の発言フレームを提示したり、生徒たちの発言をリキャストして共有させたり、必要に応じた支援をします。このディベートは後期の成績のうち20点分を占め、定期考査1回分と同じ比重となります（定期考査2回40%：パフォーマンステスト40%：課題や平常点20%）。年度によって若干の変更はありますが、主に下記のように評価をしていました。

評価の内訳	評価の仕方
Research Sheet (関連トピックについて1人2つのデータを調べる宿題。各ディベートの班で8つの情報を書いて1枚提出)	ディベートの班員全員に同じ評価 (2点満点)
Constructive Speech (ディベートの班4人で協力し2つの理由を書いて1枚提出)	ディベートの班員全員に同じ評価 (A+, A, B, Cで4点満点) →A以上になるまで班で協力して書き直す
役割ごとのPreparation Sheet (Aff.チームのAttack、Nega.チームのDefense等に分かれ、同じ役割ごとに、相手側の発言を予測して反駁を準備し、1枚提出)	役割の班員全員に同じ評価 (2点満点)
クラス内や、他クラスとのディベートマッチ ※他クラスとのディベートマッチは5会場に分かれ、5人の教員がそれぞれ評価。1時間(45分)の授業内で各会場、2試合行う	観戦中のFlow Sheetの記入状況とディベートマッチの観察評価 (2点満点)
制限時間内に120語程度で書く関連テーマについての意見文(個人)	Persuasiveness、Expressions等で評価 (10点満点)

普段の授業でもディベート的な活動を取り入れる

1年次は、相手が言ったことに対してすぐに反駁することは難しいものです。そこでAttack、Defenseとも相手の発言を予測して準備しておく、英語が不得手な生徒でも、試合中の短い準備時間で相手の発言に合わせて適切なものを選び、論を組み直す作業で役割を遂行し、「できた」という自信をモチベーションにつなげることができます。その後の授業でも、教科書等の主張へ批判的な問いを考えさせ、英語表現の授業でもディベート的な活動を取り入れるなど、繰り返し演習して批判的な思考力や表現力の向上を図っています。また、パフォーマンステストとしては、TEAPのSpeaking Part 3のように意見を問うインタビューテストでスピーキングも評価しています。

2年次の秋には、「コミュニケーション英語Ⅱ」の授業8時間程度を使い、全国高校生英語ディベート大会と同テーマで、クラス対抗ディベート大会を行います。1年次より必要な支援は大幅に減ります。3年次になると、即興ディベートもできるように、賛否両論ある話題について多角的に考え、論理的に主張する力の伸長が見られます。例えば、教科書で風力発電について学んだ際には、関連の代替エネルギーについての資料を読んだうえで、“Resolved: The Japanese government should phase out all nuclear power by 2040.”をテーマにクラス内ディベートを行いました（右写真）。そして、次時は生徒各自に意見を書かせたところ、物理や地理の授業で学ん

だ知識も加わり、説得力のある意見を書く力の伸びを感じることができました。

“Students can motivate each other so that all students can be engaged in class.”ディベート（的）活動は、技能統合型の活動で思考力・判断力・表現力の向上を図るうえで効果的なだけでなく、生徒間の親和関係を築き、主体的に学ぶ姿勢を育てる契機にもなると考えます。



授業内評価で生徒の取り組む姿勢が変わる

ほかの技能と同様に、スピーキング（発表とやり取り）の力をどのように評価すべきかを英語科内で話し合い、学習到達目標と指導に合ったパフォーマンステストを実施して評価していくことは必要です。一方でその前段階として、日々の授業での取り組みを観察評価し、指導していくことも大切だと考えます。以前は、ペアやグループ活動を授業内で多用していても、その評価は学期に多くても3、4回のパフォーマンステストのみで、日々の授業内の活動中は机間指導にとどまっていました。しかし、授業内でも評価し始めると、活動に取り組む生徒たちの姿勢と自分自身の気付きに変化が起きました。



上の写真は、現任校の「コミュニケーション英語Ⅱ」の授業で、前時に学んだイラン・イラク戦争中のトルコ人による日本人救出の話をもとにretellingするペア活動です。1回目はspeakerを列ごとに席順で、3段階評価をしています。キーワードのみ書かれたメモを見ながら、内容について文で述べられていたら○（3点）、伝えるべき内容に明らかな不足があれ

ば△（2点）、書かれた単語のみであれば×（1点）です。全員が1回目を終えたあと、うまく言えなかった箇所を教科書で確認し、同じパートを読んだ生徒に聞くなどして改善し、ペアを代えて再度行います。2回目は、1回目とは評価する列の順番を変えとともに、1回目には○が付かなかった生徒や評価できなかった生徒を優先して確認します。

数年前からこの方法を試み、まだ改良を重ねているところですが、限られた授業時間内で生徒全員の取り組みを観察評価し、生徒たちのつまずきや伸びを発見しながら、自分自身の指導に生かしています。

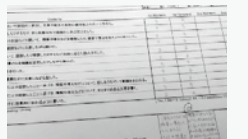
Every student matters: どの生徒も思考力・判断力・表現力は伸びる！

生徒が能動的に学ぶ姿勢を持つためには、自分自身の目標を持ち、自分の取り組みを振り返る機会が必要です。本年度は、年度当初にCAN-DO形式の学習到達目標を共有し、自分自身の目標を立て、定期的に自分の取り組みを振り返

る時間を取っています。

「どんな生徒でも、できるようになればうれしいし、できるようになりたいと思っている」——私の恩師がかつて述べた言葉です。その生徒の思考力や表現力に応じた支援をすることで、「どのような生

徒でも思考力・判断力・表現力の伸長を図ることができる」という信念を持って、今後も指導技術を向上させていきたいと思っています。





福島大学教職大学院
教職実践高度化専攻

菅野 賢介 先生

Kensuke Kanno

福島県双葉郡葛尾村立葛尾中学校
所属（現職教員派遣）

2017年3月に告示された中学校の学習指導要領は、2018年度から3年間の移行期間を経て、2021年度より全面实施となります。今回の改訂により、英語の授業は、「生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする」とされました。新学習指導要領に向けて、授業改善に取り組む先生方によるリレー連載第4回は、現職教員派遣制度で福島大学教職大学院教職実践高度化専攻に在籍している菅野賢介先生が、福島県双葉郡葛尾村立葛尾中学校で実践してきた授業をご紹介します。

文法の説明は解説的に行うより、経験的に行う

私が「2016年度 英検 英語教員海外研修」でオーストラリアでの海外研修に参加させていただいてから2年が経ちました。当時の講義資料を今でも見返し、さまざまな実践を行ってきましたが、今回はその一つである文法指導についてご報告させていただきます。

海外研修では「Expressing the past」という講義内容で、過去を表す表現について学びました。講義では過去を表す複数の表現を比較することで、その違いを明確にしていきます。まず、「学校の初日」など、いくつかのテーマについて自分の過去の経験を書き、過去を表す表現をどのように使っているかを分析します。そして、それぞれの過去形の用法について意味や説明を選択肢から一致させていくタスクを行いました。タイムラインなどの図を用いた説明もあり、細かなニュアンスもつかむことができました。また、これらをグループでディスカッションすることで、意味の捉え方が人によって微妙に違うことが分かったり、英語で文法指導を行う際の語彙や表現にも触れたりすることができました。

私がこの講義から学んだことは、まず大量の情報や比較を通じて、その文の型が見えてくるということです。そしてニュアンスが似ているものや曖昧なものなどは、内容や文脈を比較することで、その差異が明確になっていきました。情報（経験）の量やディスカッション（多角的な見方）のなかから、自分に

とって納得のいくものが見つかった瞬間でした。このことから、文法の説明は解説的に行うより経験的に行う方が良いのではないかと思い、授業ではパターンプラクティスなど、ひとり練習が終わったあとに説明をするようにしました（あえてしない場合もありました）。また使う語彙も、教科書や授業での活動、

生徒の生活に関する話題などから選び、型を繰り返しつつも、その意味を常に意識させるように心掛けるようになりました。練習中におかしな意味のものも入れ（“Haruki lives in the university.”のように）、生徒の注意を喚起することもありました。ここではパターンプラクティスの実践例を紹介します。

英語教員海外研修 講義資料より

Expressing the past

Objectives of this lesson ~ At the end of this session, you will be able to ...

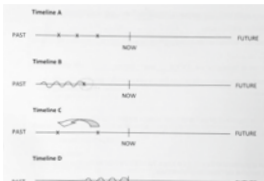
- ・ identify the different **forms** of the tenses in the past
- ・ explain the **meaning** conveyed by each of the past tenses
- ・ explain how the language items function in context (the **use**)
- ・ compare what you already about expressing the past with the content of this session

Task 2 Look at these sentences. Match each one to the relevant timeline.

- I thought I had put my glasses somewhere safe.
- I was beginning to get frustrated when the phone rang.
- I took the phone into the lounge room, pushed the rubbish onto the sofa to one side and sat on my glasses.
- I've been sitting here for almost an hour.

Task 4 Look at each pair of sentences. What is the difference in meaning between the two? Consider the context.

- I've been waiting for you for an hour.
- I waited for you for an hour.



パターンプラクティスの実践例

① Picture Talk から Retelling へ

生徒は写真を見ながら、新出語句や表現を何度も聞き、発音します。慣れてくると反応が速くなってきます。続いて、写真について5W1Hを使った質問に答えます。最後に“Please tell me about this picture.”という問いに覚えた語を使って文を再生していきます。このとき、教師は生徒の英文を聞きながら、足りない語や語順の間違いについて、5W1Hの質問やFinger Correctionで気付きを促します。徐々に慣れてきたらベアや発表などで確認を行います。

② 構造を意識させるパターンプラクティスから内容へ

海外研修に参加する前から行っていたフラッシュカードでのパターンプラクティスをアレンジしました。まずフラッシュカードの幅を10cmから8cmにし、より多くのカードを縦に並べられるようにしました。また、主語と動詞のカードを、教科書で新出語句を扱うたびに新しく作っていき、品詞ごとに色分けしておきます。

授業では、「～は、が」（主語）や「～する」（動詞）、「～を」（目的語）などのカードを始めに黒板に貼っておき、①の写真について5W1Hで質問しながら、さらに生徒の発言も貼っていきます。教師がHaruki（主語）を指し、続いてlivesと言いながらliveを指す。生徒がlive（s）と言うと同時に「どこ」を指す。生徒は（in）Australiaと言う。このように生徒の思考をカードで導きながら内容に目を向けさせます。また、（s）や（in）などをあえて表示せず、生徒の気付きや注意を促します。

例えば、（1）生徒がliveと言った場合には、その場で指を止めて待つ。（2）その間に生徒たちの間で気付いた子がつぶやき始め、それを聞いた子たちがlivesと発音していく。（3）確認ができれば次に進む、といった具合です。これは教師が（s）を指摘してやり直しをさせるより、生徒が教師や周囲とのズレに気付き、修正していくという過程が大切だと私は感じるからです。このように主語や動詞などを変えながら、写真の内容に沿って語彙を変えていく作業を繰り返します。そのほかにも次のような実践も行いました。

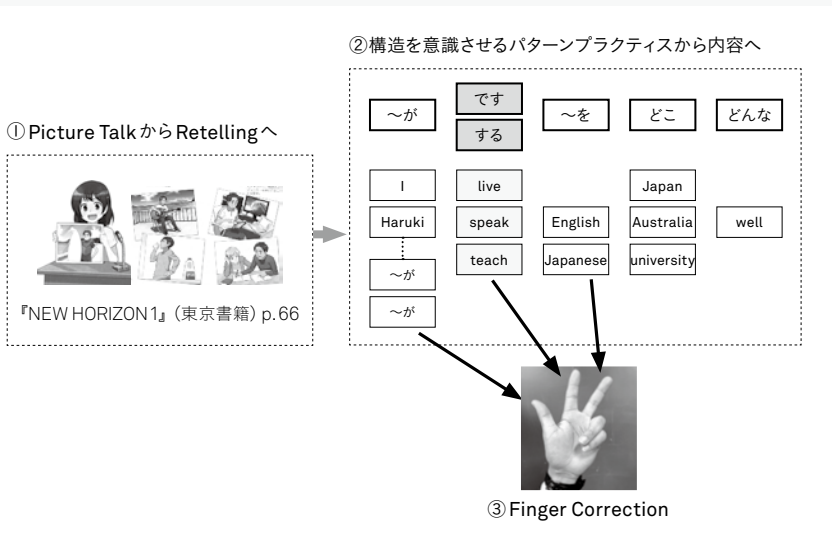
- ・ この時間は一般動詞の三単現のsの練習をしたので、主語を中心に語を入れ替え、変化するのか、しないのかをはっきりさせました。また、まとめの時間には変化する／しない場合の主語をグルーピングさせるなどの活動もしました。
- ・ 疑問文や否定文なども×や？などの

カードを提示し、それに従って生徒が英文を話す練習を行いました。

- ・ now, yesterday, tomorrowなどの時刻については、カードを提示して活用練習を行いました。

③ Finger Correction

海外研修の講義で紹介されたFinger Correctionを、このパターンプラクティスと併用して指導しています。事前に親指は主語、人さし指は動詞、中指は…などと決めておき、生徒が英語で表現する際や、教師が間違いに気付かせる際にその箇所の指をつまみます。これも「助動詞は親指と中指の間」など、いろいろと工夫ができます。また、英文には語順があることや、英文を作る際に自分の指を使いながら確認できるなどの利点もあります。教具などにも必要ないため、会話中や休み時間などいつでも行うことができます。



新学習指導要領を見据えた、これからの指導への展望

“GOOD MINDS ASK WHY. GREAT MINDS ASK WHY NOT?”

研修先のニューサウスウェールズ大学のキャンパス内にあったメッセージです。新学習指導要領を見据え、生徒に「学び続ける力」を身に付けさせることが大切だと感じています。海外研修を通し、インプット（言語指導）のあり方について学ぶ

ことができましたが、今後はさらに「何を学ぶか」「何ができるようになるか」という視点でアウトプットの部分を見直すことで、インプットの質をさらに良くしていきたいと思います。生徒一人一人の学びを大切にする授業づくりを心掛け、自分自身が学習者としての目線を忘れずに学び続けていきたいと思います。



小学校編

第4回

子供たちの伝えようとする気持ちを大切にした授業づくり



茨城県 下妻市立総上小学校

鈴木 仁子 先生

Jinko Suzuki

2020年度から全面实施される小学校の学習指導要領では、3、4年生で外国語活動、5、6年生で外国語科が導入されます。今年度から2年間の移行期間中にすべきこととは何でしょうか。この連載では、新学習指導要領に向けて、実践を積んでいる小学校の先生方の取り組みを紹介します。第4回は茨城県下妻市立総上小学校の鈴木仁子先生による指導の実践です。

人と関わりながら自分の思いを伝え合う授業をめざして

私の勤務する下妻市では、「キッズからシニアまで」を合言葉に、「英語教育の街づくり」に力を入れています。小学校と中学校の先生方がともに英語教育を考える「英語教育推進プロジェクト会議」が定期的に開かれ、外国語教育に関する情報や各校の取り組みを共有しています。また、毎年冬には、子供たちが英語学習の成果を披露し合う「下妻市小中合同英語フォーラム」も開催されています。

本校では、段階的に英語の表現に慣れ親しみ、活用することができるように、学級担任による15分間のモジュール学習を実施しています。中学年以上では授業と授業をつなぎながら、変化のある繰

り返しを意識した活動を実施し、その効果が高まるようにしています。子供たちにとって一番身近である学級担任と一緒に、高学年は週3回、低中学年は週2回英語に触れることで、学校全体に「英語を楽しもう」「英語を使ってみよう」という雰囲気が広がってきました。

そうした折に、「2018年度 全英連・英検共催 小中高英語教員向け国内研修」に参加する機会をいただきました。新学習指導要領全面实施に向けて、第6学年担任、研究主任として、外国語教育を推進するためには自分自身の指導力や英語力の向上が必要だと感じており、全国の先生方との研修を通して、中学校への接

続を意識した授業づくりの新たな気付きやヒントを得たいと参加しました。

名古屋外国語大学の太田光春教授の基調講演では、授業の主役は子供たちであり、授業で子供たちが人と関わりながら言葉を使う経験をし、自分の思いを伝え合う授業をつくること、そのためには教師と子供、子供同士の親和関係が大切であることを学びました。また、参加した小学校の先生方との授業づくりや模擬授業では、小学校と中学校がしっかり連携していくことや、子供たちが思考を働かせて即興的なやり取りができる言語活動が、今後ますます重要性を増していくと感じました。

自分の思いを伝える・お互いを認め合う



研修後は、学んだことを生かせるよう、授業やモジュール学習の内容を工夫するようにしてきました。まず、英語で授業を行うということは、教師一人がたくさん英語を話すということではないことを

全学級担任で共有し、放課後にマイクロティーチングを行うなどして授業づくりの研修を重ねています。授業の進行においては、短くて分かりやすい指示を心掛け、子供たちの活動の時間を十分に確保できるようにしています。また、低学年のうちから教師と子供たち、子供たち同士のやり取りを活動に取り入れ、ゲームで単語や表現に親しむだけでなく、自分の考えや思いを乗せて話せるような場面づくりを意識しています。自分の好きなものはどれか、ほしいものは何か、それはな

ぜか…。慣れ親しんだ表現を使って、簡単なことでも自分のことを伝える活動を大切にすることで、英語を使ってコミュニケーションを図る楽しさを実感できる子供たちが増えてきています。ペアでの会話やグループ活動のあとは、“High five!”をしたり、“Good job!”や“Nice!”などとお互いを誉め合ったりするようにしています。笑顔で声を掛け合うことを継続していくことが、学級の雰囲気づくりや子供たち同士の親和関係を深めることに効果的だと感じています。

中学校の「即興でのやり取り」につなげるために「その場で考えて話す」経験を

高学年の授業では、「その場で考えて話す」活動を意図的に位置付けるようにしました。例えば、新教材『We can! 2』Unit 5「Summer Vacation」のLet's Watch and Thinkでは、外国の小学生2人の動画を視聴したあと、どちらの夏休みの過ごし方が好きかを英語で伝える活動に取り組みせました。子供たちは“I like Mark's summer vacation. I want to eat hotdogs. Sounds delicious.”“I like John's summer vacation. I like soccer.”など、今までに慣れ親しんだ表

現を使って伝え合うことができました。またUnit 7「My Best Memory」では、自分たちの6年間のいろいろな写真を見て、そのときに楽しんだことや感じたことを思い出し、友達に伝えました。ほかに、Small Talkを計画的に実践したり、授業の振り返りを“I enjoyed interview. It was interesting.”などと簡単な英語で言うようにしたりしています。「その場で考えて話す」活動を積み重ねることで、今、自分が知っている表現を最大限に活用しながら、少しずつ自分の考えを伝

えようとするができるようになってきました。語彙の少ない小学校のうちから即興性を意識することで、少しでも滑らかに中学校への接続ができれば、と思っています。



学級担任だからこそできることを大切に

新学習指導要領全面实施を目の前に不安に思う小学校教員は少なくないと思います。私自身、子供たちの意欲をうまく引き出せずに悩んだり落ち込んだりすることもあります。でも、学級担任だからこそできることが必ずあり、それは英語の専門性よりも子供たちにとって大切なことかもしれないと感じています。学級

担任がモジュール学習を指導するようになって確信したことは、学級担任が子供たちとともに英語を楽しみ、英語を使うとする姿勢は、必ず目の前の子供たちにも広がっていくということです。

職員室で「英語を始めてから子供たちの人間関係が変わった。英語をやって良かった」という声を聞くと、本当にうれし

くなります。子供たちの「伝えようとする気持ち」を大切にしながら、英語を使う子供たちの瞳がさらに輝きを増すような外国語科、外国語活動をめざしていきたいと思います。そのためには私たち教員は情報や悩みを共有し、英語を楽しみながらスモールステップで進んでいきたいと思っています。

実践1 Fusakami Travelを開こう

『Hi! Friends 2』Lesson 5「Let's go to Italy.」ではロールプレイを実践しました。旅行会社の店員役の子供は、客役の子供に好きなものを尋ね、自分がおすすめる国でできることをプレゼンテーションします(発表)。客役の子供は、2、3カ国のプレゼンテーションを聞いて、行きたい国とその理由を伝えます(やり取り)。行き先が決まったら、店員役は客役の名前、誕生日を聞き、チケットに記入して渡します(書く)。この一連の流れで、これまで慣れ親しんできた表現を活用しながら、領域を統合した活動になりました。

店員役の子供は、客役の子供に自分がおすすめる国を選んでもらおうと相手意識を持って発表していました。また、客役の子供はいくつかの国のなかから行きたい国を選び、その理由を「その場で考えて」伝えることができました。いつもの授業以上に子供たちの笑顔が見られ、英語を使うことが楽しいと思える活動になったと思います。



実践2 発表したことに関連付けたやり取り

単元のゴールとしてShow and Tellなどのスピーチ活動をする際には、ただスピーチを聞くだけでなく、やり取りを入れるようにしています。例えば、『We can! 2』Unit 1「This is ME」の自分の好きなことやできることについての自己紹介では、スピーチのあと、相手に“Do you like ...?”や“Can you ...?”を使って質問をさせるようにしました。『We can! 2』Unit 7「My Best Memory」では、ベストメモリーについてのスピーチのあと“Was it fun?”など、そのときの感想を質問したり、“Me, too.”“Not me.”“Nice!”など相づちを打ちながら聞くようにさせたりしています。このような活動をすることで、相手の話をよく聞こうとする姿勢が育つだけでなく、話を聞いて「その場で考え、質問し、答える」という即興的なやり取りにつなげることができたと思います。



受験生のためにも、実用英語技能

～明治大学 牛丸 元 副学長（入試改革担当）に聞く



牛丸 元（うしまる・はじめ）

副学長（入試改革担当）、経営学部専任教授。1985年小樽商科大学商学部卒業、1989年筑波大学大学院修士課程修了。2005年明治大学経営学部教授。経営学部長など歴任。博士（経営学）。

グローバル人材の育成という社会の要請に応じ、全学を挙げて国際化を推進し、世界に通用する教育・研究に取り組む明治大学。近年は積極的に入試改革を推し進め、一般選抜入学試験では商学部、経営学部、国際日本学部で、全学部統一入学試験では農学部、経営学部、国際日本学部、総合数理学部で、それぞれ英語4技能試験（資格・検定試験）を活用した入試を実施している。高大接続改革における大学入試や大学教育のあり方、高等学校に期待する教育について、牛丸副学長（入試改革担当）にお話を伺った。

3つのポリシーに基づき

学部ごとに入試のあり方を検討

本学では入試改革を進めるにあたり、2021年度入試を見据えて、どのような入試を行うことが望ましいかについて、各学部からのヒアリングを行っています。そのなかで、英語4技能試験の活用や入学後の教育体制の整備など、各学部には大学として望む方向性を説明していますが、求める人材や教育、入試のあり方は学部によって異なります。各学部とも3

つのポリシー（アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシー）を見直したうえで、今後の入試の方向性を打ち出していくことになります。

英語4技能試験の活用については、英語を学問対象として学ぶのか、ツールとして使用するのか、という目的によって捉え方が大きく異なります。英語をツールとして捉えている学部では、すでに英語4技能試験を入試に積極的に活用しています。具体的には、「一般選抜入学

試験」において、商学部（英語4技能試験利用方式：出願基準として利用）、経営学部（英語4技能試験活用方式：出願基準および得点加算として利用）、国際日本学部（英語4技能試験を活用した外国語満点換算方式：満点換算として利用）が実施しています。また、「全学部統一入学試験」においては、農学部、経営学部、国際日本学部、総合数理学部が、英語4技能試験を活用した外国語得点換算を行っています。

検定（従来型）採用を継続

受験生の学習や目的を大切に

その方針は今後も変わらない

すでに英語4技能試験を入試に導入している学部では、入学後の英語教育のカリキュラムを再編したり、英語で専門分野を学ぶ科目を設置したりするなど、ツールとして英語を使い、伸ばしていく教育に積極的に取り組んでいます。そうした学部の情報は学部長や教務主任間で共有されており、現在は英語4技能試験を入試で活用していない学部でも導入の検討材料にするなどしているようです。

英語4技能試験を導入している学部では、実用英語技能検定（従来型）とTEAP、IELTSを採用しています。大学入学共通テスト（共通テスト）における外部資格・検定試験では、実用英語技能検定の新方式が認定されていますが、本学としては従来型の英検®を利用し続けることに何ら抵抗はありません。長年にわたり実施されてきた従来型の英検は、良質な問題が出題されており、一次試験に合格して二次試験を受験することで、英語力の保証にもつながると考えております。

また、共通テストは高校3年生の4～12月に受験した成績を2回まで利用できるとされていますが、本学の一般選抜入学試験や全学部統一入学試験では、高校2年生で取得したスコアの提出も認めています。これは、早い段階から英語学習に意欲的に取り組み、英語力を伸ばしてきた成果を評価することにつながるためです。受験生にとっては、すでに基準を満たすスコアを1、2年生のうちに取得しているにもかかわらず、3年生で再び受験しなければならないということでは、費用の面でも受験生に経済的に負担をかけてしまいますし、何度も受験することがかなわないご家庭もあると思います。受験生の公平性を重んじれば、これまで通りの実施方法を

継続していくが必要であると言えるでしょう。共通テストの取り扱いについては、今後も学内での検討を続けてまいります。さらに、従来型の英検の受験者数を考えれば、本学を志望する受験生の多くが高等学校在学中に受験しているであろう検定試験であり、そのような試験を採用しないことは、受験生にとっての不利益を生みかねません。

このように、本学では試験内容の質の高さ、英語学習を進めるうえでの取り組みやすさ、受験者数の多さといったことを考慮したうえで、従来型の英検を採用しています。ほかの試験についても、入学後に学生が留学を希望するのであればIELTSなどの選択肢もあるでしょうし、大学卒業後に社会で求められるビジネス英語力を加味して、その能力を測ることを目的としたテストを受験するということもあると思います。本学を志望する受験生の学習とその目的を大切にいく方針は、今後も変わることはありません。

大学や社会で求められる英語の

基盤づくりを

高大接続改革を進めるうえでは、大学も高等学校の優れた取り組みに学ぶことがあると思います。SSH（スーパーサイエンスハイスクール）やSGH（スーパーグローバルハイスクール）をはじめ、進学校などでは、在学中に課題解決型、課題探究型の学習に取り組ませるような授業を行っていると聞きます。実際に入学後に学習をリードしていくような存在の学生たちは、高等学校在学中に英語に限らず、ディベートやディスカッションなどのグループワークに取り組んでおり、主体的に学ぼうとする姿勢が身に付いています。以前に比べると、最近の学生はグループワークを上手に進め、自分の意見を主張することに慣れているように感じます。大学は高



等学校よりも規模が大きく、なかなか少数でアクティブ・ラーニングを実践することは難しい環境ではありますが、ゼミナールなどの少人数での学びの場では、アクティブ・ラーニングを積極的に取り入れていくことができるでしょう。

高等学校段階から主体的に学ぶ姿勢を身に付けていることを評価できる一方で、大学での専門的な学びを深めるためにも、論理的な思考力を養い、英語で発信できる基礎力をぜひ、高等学校在学中に培っていただきたいと思います。大学では英語で書かれた学術論文を文献として読む機会があります。また、特に理系の学生は学会で英語で発表する機会が多くあります。そのような状況に対応するためには、大学入学時点で英語で文献を読んだり、研究内容を論文にまとめたり、発信したりする下地となる英語力を身に付けておく必要があるのです。大学に入学してから留学を希望する場合にも、現地の大学で講義を受けることができるような英語力が求められるでしょう。

国際競争が激しくなっている昨今では、英語で自分の考えを発信できる力がこれまで以上に重視されています。高等学校の先生方には、社会でどのような英語力が求められているのか、そのゴールを具体的に示すことで、英語学習への動機付けをしていただき、大学や社会で必要とされる英語の基盤を培うような教育を行っていただければと思います。

上智大学が2021年度入試において「TEAPスコア利用型入試」を導入

上智大学は2021年度入試より、一般入学試験において「TEAPスコア利用型入試」を導入する予定だ。これまでのTEAPを出願基準とする一般入学試験（TEAP利用型）に対し、新しい入試方式では、TEAPやTEAP CBTの総合点を英語試験の得点に換算して利用することになる。入試改革を進めるうえで、全学的に英語4技能をどのように位置付けるかを検討した結果であり、ほかの入試方式においても外部資格・検定試験を活用する方向だ。藤村正之副学長（高大連携担当）に導入の背景と今後の展望を伺った。

従来の「出願基準」から新たに「得点換算」へ

上智大学が2021年度入試において大きく舵を切った。高大接続改革の観点から、全学的に英語4技能を評価する外部資格・検定試験の位置付けを検討してきたなかで、受験生が高等学校までに身に付けてきた英語4技能を「入試で評価し、入学後も継続的に伸ばしていくこと」を重視した結果だ。

同大学の入試は①特別入学試験、②一般入学試験「TEAPスコア利用型入試」、③同「学部学科試験・共通テスト併用型入試」、④同「共通テスト利用型入試」の4つのタイプに分かれる。このうちTEAP利用型入試の大きな変化は、

「出願基準」から「得点換算」へと方式を変えることだ。

①は公募制推薦入試や指定校推薦入試など、従来通りにTEAPなどの英語外部資格・検定試験の基準を満たす場合に出願することができるものだ。調査書や高等学校在学中の活動記録、小論文、面接など人物を重視した評価となる。

②はTEAPおよびTEAP CBTの4技能の総合スコアを、実質の英語の得点として換算するものだ。これまでのTEAP利用型入試では、TEAPは出願基準だったが、この入試方式の導入により、得点換算としてのTEAPの利用へと変化した。これまでのTEAP利用型入試と異なり、TEAPのスコアが英語の得点となるため、英語力によって得点差が付くようになる。

③と④は共通テストや学部学科試験を交えつつ、英語については大学独自の英語試験を実施せずに、英語4技能を測定する外部資格・検定試験を利用し、CEFRによるバンドで英語力を評価するものだ。

同大学では各入学試験の特性と求める学生像とを照らし合わせたうえで、英語外部資格・検定試験をどのように利用すべきかを検討してきた。そして、「出願基準」「得点換算」「CEFRバンド利用」の3つの方法を用意することとなった。これにより、同大学を受験する場合には、必ず何らかの形で英語外部資格・検定試験を受験することが必要となる。

なお、「TEAPスコア利用型入試」では、従来のTEAP利用型入試でも実施してきたように、英語以外の2教科の試験では記述式試験で思考力を評価すると

いう位置付けは変わらない。藤村副学長は、「小学校から高等学校までが一貫して『学力の3要素』を重視するなかで、知識偏重型の試験ではない、思考力を評価する試験が持つ意味は大きい」とし、今後もこうした入試を重視し、一般入学試験における柱の1つとしたいと考える。

入学後も継続した学びによる英語力向上に期待

そして、特に「TEAPスコア利用型入試」で入学を希望する受験生に対して、高等学校から大学を通じて英語4技能をバランスよく鍛えていくことを望んでいる。藤村副学長は「大学入試で英語学習は終わりではありません。大学入学後、さらには社会に出てからも、生涯にわたって英語を使い続けるために、大学入試は継続性のある学びのなかの通過点にすぎないのです。受験のために英語を学習するのではなく、社会に出てから英語を使うためのステップとして捉えていただきたいと思います」と述べた。

同大学では入学すると、1年次にどの学部の学生も、英語で学び考える力を4技能を通じて養う「Academic Communication」が必修とされている。春学期の「Academic Communication 1」はまず、講義ノートの取り方、ディスカッションやプレゼンテーションの技法、小論文の書き方、効果的な情報収集の方法など、アカデミックな英語運用能力を高める。秋学期の「Academic Communication 2」では、それらのス



学校法人 上智学院
SOPHIA UNIVERSITY



上智大学 藤村 正之 副学長（高大連携担当）

キルをもとにCLIL（内容言語統合型学習）を実践し、さまざまな学術分野の内容について学びながら語学力を向上させるとともに、批判的思考力を鍛え、協働力を磨き、国際的視野を広げる。また、1年次秋学期～4年次には「Academic English」「Professional English」「Practical English」の幅広い科目群から選択して英語で専門性を高めていく。必修や選択科目などの正規の授業以外にも、海外短期語学講座や交換留学をはじめ、スタディツアーやボランティア、海外インターンシップなどの課外講座も数多く用意されている。

藤村副学長は「大学在学中に授業はもちろん課外活動も含め、いかに英語に触れる経験を積むことができるかによって、成長の幅も変わってくるでしょう。大学としては、学生の動機付けをどのようにしていくべきかを考える必要がありますし、個々の学生には、大学入学後も継続していく学びを通じた英語力の向上に期待しています」と話す。

学びの内容でも、制度でも高大が接続することが重要

高大接続改革の重要性が問われ、各大学では入試を変える動きが急速に進んでいる。だが、これからの課題は入学後に学生をいかに育てるかにある。同大学でも、高校生を対象とするイベントを実施する際に、学びへの意欲が高い生徒が多く参加してくるのを目の当たりにすることが増えた。

藤村副学長は学びの内容の観点から高大接続のあり方について考えを述べた。

「SSH（スーパーサイエンスハイスクール）やSGH（スーパーグローバルハイスクール）などでは、生徒たちが目的意識を持って社会的な課題に取り組み、研究成果をまとめて発表するなどの課題解決型の学習に取り組んでいます。そうして育まれた生徒たちの学びへの興味・関心を、大学での学びにいかにつないでいくか。大学としては、学びへの意欲を持続しながら取り組むことができるようなプログラムを開発する仕組みなどを整えていくことが求められるでしょう。分かりやすい例では、国連のSDGs（Sustainable Development Goals＝持続可能な開発目標）の17の目標については、高等学校の『総合的な学習』などの探究型の学習で取り組みやすいでしょうし、幅広い学問分野を持つ大学としてもこれらの目標は受け入れやすいものです。そのようにして、学びを通じて高大が接続することで、進路選択につなげることが考えられます」

また、前述したように英語力を継続性のなかで伸ばしていくことに着目し、TEAPを活用することの有効性と試験制度による高大接続のあり方について説く。

「TEAPは大学入試のためだけに開発された試験ではありません。大学入学後の英語学習にも活用することができます。本学では、入学時に1年生全員がTEAPをプレースメントテストとして受験します。スコアに応じてクラス分けを行い、そのうえでAcademic Communicationの授業を1年間受講し、1年生修了時には、再

度TEAPを受験して、英語力の伸長度を測っています。このように、高等学校での学びの成果を入試の段階でTEAPで測るだけではなく、入学後も継続してTEAPを受験することで、一貫性を持って英語力の向上を見ているのです」

こうして入学後の英語学習の成果をTEAPで評価したあとは、個々の学習や留学、就職などの目的に応じて、さまざまな資格・検定試験の受験へと向かうようになる。つまり、TEAPは次の資格・検定試験への橋渡しともなっているのだ。

将来、英語を使い続けるための基礎力を高校段階で培う

高大連携担当として藤村副学長は、大学入試において英語4技能を評価することの意義について、「高等学校では2013年度より現行の学習指導要領のもとで、英語は4技能を統合的に学ぶことがすでに示されています。2022年度から実施される新学習指導要領においては、さらにそれが重視され、言語活動の高度化が求められています。小学校から高等学校までが一貫して、英語によるコミュニケーションを重視し、4技能での指導を求めている以上、そのようにして学んできた生徒たちの英語4技能を大学としても正當に評価するべきだと思います」と強調する。

そして、入試改革を高大が連携して進めていくにあたり、次のように高等学校の先生方にメッセージを送った。「高校生にとって大学入試が大きな関門となることはやむを得ないことでもあります。しかし、高等学校の先生方には、生徒が英語学習を受験のためとだけ捉えずに、自身の将来の基盤をつくるための学びであると捉えられるようにご指導いただきたいと思います。これからの社会は、英語に親しく接せられることが人生の幅と可能性を広げる時代に入っていきます。ですから、大学在学中、さらに社会に出てからも継続して英語4技能を鍛えていくための基礎力を高校生の段階で身に付けていくことが重要なのです」

活用事例のご紹介

公立学校編

東京都立桜修館中等教育学校

TEAPは本校の生徒の英語力にふさわしく
授業で身に付けた4技能を客観的に測定できる

東京都立桜修館中等教育学校は2016年度から3年間、東京都の英語教育推進校としてTEAP団体受験料の補助を受け、「TEAP団体専用クーポン利用型申込」を利用している。数ある英語資格・検定試験からTEAPを採用したのは、試験内容が同校の生徒の英語力に見合っており、取り組みやすい試験だと判断したからだという。5年生でのTEAP団体受験をどのように位置付け、英語教育に生かしているのだろうか。



(左) 5学年 主幹教諭 梶山 智子 先生
(右) 6学年 主任教諭 吉澤 美香 先生

「話すこと」の指導がもたらした効果

桜修館中等教育学校の英語の授業は、「話すこと」に重点を置いて4技能をバランスよく育成する指導を行っている。例えば前期課程（中学生）では、1年生で教科書の会話文をスキットにした劇に、2年生で『トム・ソーヤーの冒険』の英語劇に取り組み、3年生ではキング牧師のスピーチに取り組む。後期課程（高校生）ではスピーチやディベートに取り組み、最終的にはディスカッションへと発展させていく。ディベートやディスカッションには、日頃から社会的な話題に目を向け、自らの考えを持ち、発信する力が求められる。そこで、授業計画に基づいてJETが選んだ英文記事を題材としてリテリングやサマリーに取り組ませるなど、社会的な話題について読んだり話し合ったりする場を設けている。また、授業で話し合ったことを基に、自分の考えを英語で書いたり、文法習得のために定型の和文英訳をしったりといった「書くこと」にも取り組ませ、書いた英文は授業中に生徒同士で読み合い、コメントや修正を入れるなどして学び合う機会も大切にしている。

5年生を指導する梶山智子先生は「日頃の授業で話したり書いたりすることに取り組んでいるためか、TEAPではWritingとSpeakingで高いスコアを得ることができました。一方で、単語・熟語、

文法などを覚えることや、正確性に欠けるところが現状の課題です」と分析する。

同校は2016年度に東京都の英語教育推進校の指定を受け、オンライン英会話や外部の資格・検定試験による生徒の英語力調査などの支援を受けた。外部資格・検定試験は、東京都から受験料補助により年1回受験することができる。同校では多くの生徒が前期課程のうちに実用英語技能検定（英検）準2級まで合格する。TEAPを活用する決め手となったのは、TEAPが英検準2級から準1級レベルに相当すること、技能統合型の授業で身に付けた英語力を客観的に測定できることだという。また、大学の授業や留学などの場面・状況を想定した試験問題であることも、生徒が内容をイメージしやすく取り組みやすいとも感じている。

5年生で経験してハードルを下げる

同校では5年生で第2回のTEAPを受験する。大学入試のスコア利用に直接結び付けるのではなく、5年生で一度受験しておくことで、生徒が現時点での英語力を把握し、外部資格・検定試験や大学入試へのハードルを下げることを目的とする。「TEAP団体専用クーポン利用型申込」を利用しているため、スコアを一括ダウンロードして、技能ごとの得点順にソートして4技能のバランスを

見るなど、成績の分析や学習指導に活用できることも魅力に感じている。

6年生を担当する吉澤美香先生は昨年度、5年生がTEAPを受験する前に、授業でTEAPの4技能の問題に取り組ませた。「生徒たちは『Listeningのスピードが速くて難しく感じた』『これならできそう』などと体感し、問題構成の傾向を理解して当日に臨みました」と振り返る。そして、「スコアを大学入試に実際に利用しようとする生徒もいます。また、英語が得意な生徒は一般入試で挑戦しようと思ったようです。5年生のうちにTEAPを受験したことで、大学入試の選択肢の1つとして捉えることができました」と話した。

現在の4年生以降は大学入学共通テストを受験することになる。知識・技能に偏らず、思考力・判断力・表現力等を評価する試験となり、英語の4技能を評価する外部資格・検定試験が活用されることに対して、同校では「日頃から実践している授業で生徒が身に付けた英語力を発揮できる」と好意的に捉えている。東京都の英語教育推進校の指定は今年度で終了する。だが、「3年間取り組んできた成果はこれからの教育にも活かしていきたい」と梶山先生と吉澤先生は口をそろえた。

活用事例のご紹介

私立学校編

大妻中野中学校・高等学校

TEAPは高等学校から大学へと
教育をつなぐ架け橋になる

大妻中野中学校・高等学校は大学入試での英語4技能化の広がりを受けて、エッセイ・ライティングへの取り組みに重点を置いた指導を進めてきた。そうしたなかで、大学で求められる英語力を4技能で測定するTEAPは、生徒の英語力をアカデミックなものへと引き上げ、高等学校と大学の教育をつなぐ架け橋になると、TEAPを軸に据えた英語教育を展開し、2017年度より「TEAP団体専用クーポン利用型申込」を導入している。



(左) 国際・教務主幹 水澤 孝順 先生
(右) グローバル・ランゲージ担当 スピーチ・ディベート担当 Willie E Vickers 先生

Writingを強化した新しい英語
カリキュラムの軸となったTEAP

海外進学や将来のグローバルな活躍まで視野に入れた英語教育を行う同校では、生徒が中学段階で英検[®]、高校2、3年生でTEAP、さらに高校卒業時にはIELTSといった段階を踏んで英語力を伸ばしていくことを想定している。その過程において、「大学進学をめざす生徒たちが、大学で実際に必要なアカデミックな英語に触れる機会をいかに持つかが重要」だと、Willie E Vickers先生は考える。そこで、大学の授業や留学、大学生活などの場面・状況を想定した問題が出題されているTEAPに早くから着目し、TEAPの教材をベースにWritingに重点を置いたカリキュラムを編成してアカデミックな英語の指導を取り入れている。これまでのほかの検定試験では、Writingテストの出題が和文英訳の域を出なかったという。だがTEAPでは、グラフなどのデータから必要な情報を読み取り、英文を読解したうえで自らの言葉で言い換えたり、自分の主張を書いたりするなどのスキルが必要とされる。そこで、日本人教員とネイティブ教員の

全員が同じTEAPの教材をベースに授業での活用についての研究を重ね、特に「英語表現」の授業では、文法重視のライティングではなく、アカデミック・エッセイ・ライティングに取り組み、たくさんの英語を生徒に書かせてきた。

「TEAPで使用される語彙は、実際の大学の授業でも使用されるものばかりです。Writingパートの難易度は高いですが、生徒は何度も取り組むうちに、アカデミックな英語とは何かを理解し、書く力が伸びてきました」とVickers先生は述べる。

トータルでシームレスな指導で
英語4技能をバランスよく

同校では「TEAP団体専用クーポン利用型申込」により、高校2年生が第3回を受験し、一括ダウンロードした生徒のスコアを個別にファイリングして、生徒へのフィードバックに役立てている。

水澤孝順先生は「本校の生徒はWritingとSpeakingの力は高い一方で、Readingの力が弱いことが浮き彫りになりました。4技能をバランスよく育成するためには、TEAPが求める英語スキルを

統合したトータルでシームレスな指導をバランスよくする必要があります。TEAPを軸に据えた指導を通じて、ネイティブ教員も含めた教員間の連携が図られ、生徒たちに身に付けさせたい英語力のゴールが見え、何を指導すべきかが明確になりました」と語る。

今年度はSpeakingの強化にも取り組み、「コミュニケーション英語」の授業では生徒が英語を使う場面を増やすことを重視している。その結果、生徒のなかには模擬国連に参加し、世界の同世代の生徒たちと安全保障やジェンダー、核など世界的規模の課題について意見を交換し合い、自分の意見を発信するなど、積極的な姿勢を見せるようになった生徒もいる。

「Writingを通じて、生徒たちはアカデミックなトピックへの興味・関心を広げ、語彙や知識を吸収し、課題解決力に変えていきます。そして、その力をSpeakingでも発揮するようになっていきます。発信力を持った生徒たちが増えることは、学校のカルチャーを変えていく可能性さえ秘めています。今後は即興性のある英語力も身に付けていけたらと考えています」と、水澤先生は期待を込めた。

「TEAP成績ダウンロードシステム」について

P.34-35でご紹介した活用事例のように、「TEAP団体専用クーポン利用型申込」にご登録いただいた学校（団体）は、「TEAP成績ダウンロードシステム」を無料でご利用いただけます。このシステムは生徒が学外で個人受験された場合も含め、スコアを一括ダウンロードできるサービスです。詳細はP.02-03をご覧ください。

【お問い合わせ先】

公益財団法人 日本英語検定協会 英検サービスセンター TEAP運営事務局
〒162-8055 東京都新宿区横寺町55
TEL : 03-3266-6556
E-mail : teap-dantai@eiken.or.jp

英検 2 級・準 2 級・3 級
ライティングテストを活用した
発信力の育成

Write more. Write well. Write it right!

最終回

アカデミック・ライティングの
内容と指導

リーディング指導に不安を覚える先生方に向けて、「大丈夫！ライティングは難しくないですよ。楽しいですよ」ということをお伝えしてきましたこの連載も、これで最後の回となります。英検 3 級、準 2 級、2 級レベルのライティングの話をしてきたので、最終回は、学校教育でのライティング教育の最終段階でめざしたいアカデミック・ライティングについて、総括的に話をしたいと思います。

大井 恭子 (おおい きょうこ)

清泉女子大学文学部英語英文学科教授。東京大学文学部英語英米文学科卒、New York 州立大学 Stony Brook 校大学院言語学科博士課程修了。博士（外国語教授法）。専門は英語教育、応用言語学、クリティカル・シンキング。特にライティング能力の習得に関し、認知面と文化的背景という観点から外国語としての英語のライティング教育の構築をめざしている。

1. 2 つの文章産出モデル

英語のライティングにはさまざまなジャンルがあり、中学・高等学校の授業で取り上げられるのは「意見文」といわれるものが多い、ということは前回取り上げました。しかしながら、実社会で出会ったり、要求されたりする文章はさまざまなものがあります。本来であれば時間をかけて、日本語においても英語においても、さまざまなジャンルの文章の書き方を学ぶことが大切でしょう。ここではそれを取り扱うだけの紙幅はありませんので、今回はライティングの産出過程として、認知心理学的から提案されている 2 つの大きな文章産出モデル、「知識伝達モデル (Knowledge telling model)」と「知識変形モデル (Knowledge transforming model)」を紹介します (表 1)。

2. これからめざすべきライティング

これからめざすべきライティングを考えると、「知識変形モデル」のライティングを指導していただきたいと考えます。表 1 の 2 つのモデルの違いを具体的にみるために、「結婚について」という題で書かれた以下の 2 つの文章を見てください。

[A] Now, I am 18 years old. And I have not seriously thought about marriage because I think it is not near me. I think I would like to have marriage when I am 27, 28, or 29 years old. But it is not a serious wish. I can marry when I meet a person whom I would like to marry. So my marriage may be earlier, or later than around 28 years old. Now I love a girl who belongs to my play team together. But I don't know whether she loves me or not. (I hope she does) I don't know if I marry her. Anyway, marriage is not a serious topic for me now.

[B] Why do we get married? Or if you are modern, why do we live together? Answer: Insecurity. “Man needs women; women need man.” However, this cliché fails to explain need. How do you need someone of the opposite sex? Sexuality is an insufficient explanation. Other animals do not stay with a mate for more than one season; some not even that long. Companionship, although a better answer, is also an incomplete explanation. We all have several friends. Why make one friend so significant that he at least partially excludes the others? Because we want to “join our lives.” But this desire for joining is far from “romantic” -- it is selfish. We want someone to share our lives in order that we do not have to endure hardship alone.

(Kane (1988) より一部改変。下線は筆者。大井 (2002) にて引用)

[A] は表 1 にあるように、自分の身の回りにある個人的な体験に依拠してそのことのみを伝えているだけなので、「知識伝達モデル」の文章といえるでしょう。それに対して [B] は問いを発

■表 1 「知識伝達モデル」と「知識変形モデル」(Bereiter & Scardamalia (1987) より)

	Knowledge teling (知識伝達モデル)	Knowledge transforming (知識変形モデル)
モデルの特徴	・自然な書き方 ・Knowledge transforming のなかの下位的な機能とされるモデル	・より複雑な書き方 ・複雑な取り組みのなかで発展していくライティング能力のモデル
必要とされる能力	・自然に習得できる能力 ・誰にとっても習得可能なもの	・習熟によってのみ得られる高度なレベルの能力 ・考えや知識を文にする通常の能力以上のもの。目標や達成のために、知識を再構築していく能力
ライティングの方法	・日常生活で得られる言語能力や技術を最大限に生かす。しかし、それを超えるものではない。	・日常で得られる以上の能力を必要とするもの。情報の再処理に関わるライティングの方法
ライティングのプロセス	・個人的な経験に依存 ・日常的な会話の域を超えるようなプランニングや目標設定を必要としない。	・ライティングそのもののプロセスによって得られる認知的な能力を養成する。 ・ライティングのプロセスそれ自体をとおして考えが表出し、再考、言い換えによって発展した考えが形をなす。テキストにおける変更のみならず、意図したこと自体に変更がおこる。 ・プランニングや目標設定を必要とし、ライティングが知識の発展に重要な役割を担う。
特色	・議論 (アーギュメント) という面からみると、自分の立場を述べ、サポートがあるようにみえるが、説得力のあるアーギュメントにはなっていない。 ・目標設定や問題解決を必要としない。	・意味を精選し、論理に一貫性をもたせ、意味合いを考え、全体の意味のつながりを考える。 ・既に書かれたテキストを参照しながら、目標設定を試みる。 ・読み手をはっきりと意識している。

し、それに答える形で文章を進めていっている「課題解決型」の文章、つまり「知識変形モデル」と分類されるでしょう。また、[A] の方は全て “I”、すなわち一人称で書かれているのに対し、[B] は全て三人称です。別の言い方をすると、[A] は個人的な出来事が書き連ねてあるので主観的な文章であり、[B] は抽象概念を扱った客観的な文章であるともいえます。

実は、[A] は日本人大学生が、[B] はアメリカ人大学生が書いたものです。後者にとって英語は母語ですから言語的には自由が利きます。しかしながら、話の内容やレトリックに関しては、やはり大きな違いを感じずにはいられません。[B] にとっても、生まれながらにこのようなレトリックが身に付いたわけではなく、表 1 にあるように、「複雑な取り組みのなかで発展していく能力」「習熟によってのみ得られる高度なレベルの能力」を習得したということです。一方、[A] は、「自然に習得できる能力」「誰にとっても習得可能なもの」「日常生活で得られる言語能力や技術を最大限に生かす。しかし、それを超えるものではない」という記述通りと思われます。したがって、[A] から [B] に変異するには学校での指導が必要であるということなのです。私が敬愛するライティング研究者 Grabe and Kaplan (1996) も「書く力は自然には習得されるものではなく、それは学校あるいはほかの教育環境において、ある世代から次の世代に受け継がれなくてはならないものである」(p.6、筆者訳) と述べています。つまり、ライティング力の習得においては、ほかの技能と比べて「教室での指導」が大切であることを説いています。

3. アカデミック・ライティングで求められるもの

では、日本の学校の授業で求められる「アカデミック・ライティングの内容と指導」はどのようなものをめざすべきなのか、

【参考文献】

大井恭子 (2002) 『英語モードでライティング』講談社インターナショナル

Bereiter, C. & Scardamalia, M. (1987). *The Psychology of Written Composition*, Lawrence Erlbaum Associates.

Grabe, W. & Kaplan, R. (1996). *Theory & Practice of Writing*, Longman.

Johns, A. M. (2006). Genre and ESL/EFL composition instruction. In B. Kroll, (Ed.), *Exploring the Dynamics of Second Language Writing* (pp.195-217). Cambridge University Press.

主として Johns (2006) の定義をもとにして、その概要を 10 の項目として述べてみます。

- 1) アカデミックな文章は当該分野 (genre) の書式の要件を満たし、その様式に従う。
- 2) そのなかで展開されている議論 (argumentation) が明示的なものでなければならない。
- 3) 論旨の展開が演繹的であることが望ましい。⇒文章のテーマと筆者の主張が冒頭部分にあらかじめはっきりと提示され (topic sentence、thesis statement)、文章を通じて、それが一貫してサポートされていること。
- 4) 読み手が議論の展開を正しく把握できるように、書き手は文章の構成を考え、文章中に適切な「道標 (signposts)」(therefore、however、in contrast など)を提供しなければならない。
- 5) 独りよがりの主観的な書き方から脱却し、書かれた内容が客観性を持つようにする。
- 6) 文体に関しては、口語体を排し、フォーマルな文章の要件であるいくつかの様式に従う。
- 7) 文法的に正しい文を書かねばならない。
- 8) 等位接続詞 (and、but、so など) で結ばれた稚拙な印象を与える文を避け、従属接続詞を中心に、名詞節や、副詞節、そして形容詞節などを多用し、より複雑な構文を使う工夫をする。
- 9) 口語表現とは異なる洗練された抽象度の高い語彙を使用する。
- 10) スペリングは正しくなければならない。

これら 10 項目を目標として掲げ、これからの世の中を生きる生徒たちにライティング指導を行っていただきたいと願いつつ、筆をおきます。

「CAN-DOリスト及び言語活動」をベースに 「わかる」から「できる」授業へ

静岡県では2013年度に全ての公立高等学校でCAN-DOリストを作成したもの、実際にはCAN-DOリストに基づいた授業改善に結び付かず、CAN-DOリストが活用されていないという課題が明らかになった。そこで、CAN-DOリストを授業で行う学習活動と直結させるため、CAN-DOリスト、年間指導計画、単元構想（学習指導案）の三位一体の改善に取り組んでいる。完成年度となる2019年度を迎えるにあたり、静岡県総合教育センターの指導主事である塚本裕之教育主査と平川由紀子教育主幹に、これまでの取り組みと課題、今後の展望についてお話を伺った。

CAN-DOリストが どうしたら活用されるか？

2011年に文部科学省が発表した「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」により、中学・高等学校は、各学校が学習指導要領に基づき、生徒に求められる英語力を達成するための学習到達目標を「CAN-DOリスト」の形で具体的に設定することが示された。CAN-DOリスト形式の学習到達目標を作成することには、

- ①指導方法や評価方法の工夫・改善が容易になる
- ②子供たちの英語力の水準向上に資することができる
- ③グローバル社会に通用する、より高度な英語力の習得をめざすことが可能になる
- ④小・中・高等学校が連携した英語教育の実現が可能になる

といったメリットがあるとされる。静岡県では2013年度から全ての公立高等学校でCAN-DOリストを作成したが、「実際には授業での具体に落とし込めず、活用できていない」ということが、県

総合教育センターの指導主事による学校訪問をはじめ、初任者研修などを通じて明らかになった。

この課題にどのように対応すべきかを検討したところ、「CAN-DOリストはどうしたら活用されるようになるのか。その原因を現場視点で見直し、CAN-DOリストを授業の具体と直結させることが大切である」との結論に至った、と塚本指導主事は説明する。従来のCAN-DOリストは学年を軸とし、4技能ごとに「できること」を記載していたが、目標設定レベル（難易度）が不明確であったほか、学年間で差が大きかったり重複があったりした。また、4技能のバランスが取れていないことも課題とされた。そしてこれらの問題点は、教員間で「何ができるようになるか」を適切に配置するための

共通の尺度を持って教材やタスクについて議論することができていないことに起因する、ということが明らかになった。

CEFRに基づく学習到達目標と 言語活動を作成

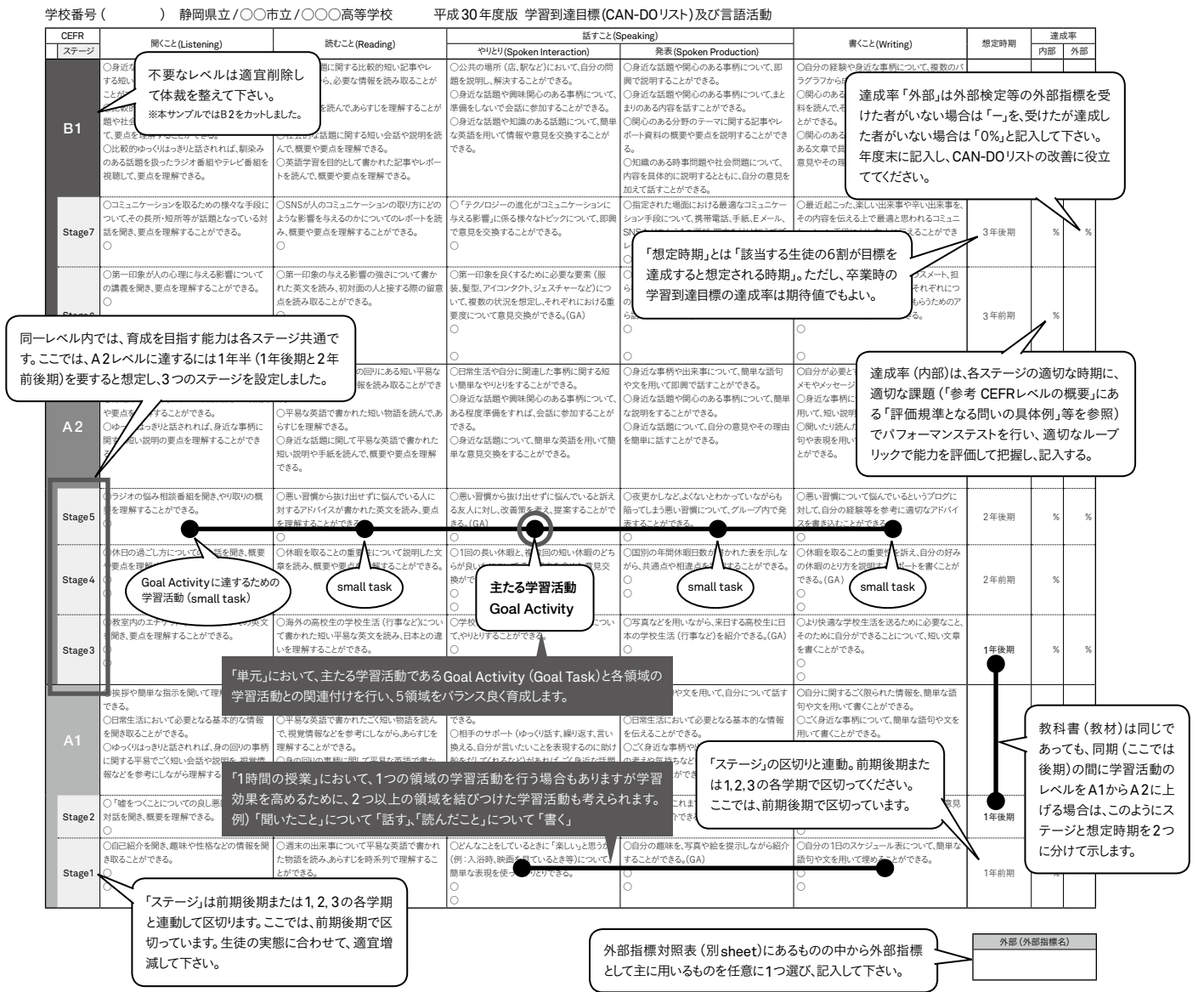
そこで、静岡県では2015年度より、CAN-DOリストをCEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）を参考にすべき共通の尺度として軸に据え、CEFRのレベルに応じて4技能で「できること」と、それを具体的な言語活動（タスク）について記述する様式「学習到達目標（CAN-DOリスト）及び言語活動」に改めて提出するよう、各高等学校に依頼した（2018年度版からは新学習指導要領に準拠し、「話すこと」を[やり取り][発表]に分けて5領域とした）。新たなCAN-DOリスト作成にあたり、県総合教育センターでは「静岡県高等学校外国語科『CAN-DOリスト』作成の手引き」を準備し、各高等学校にはサンプル解説を参照のうえ、①様式1（能力記述文は入力されており、具体的な学習活動のみ作成して記入【図1】）、②様式2（能力記述文と具体的な学習活動を各学校で作成）、③任意の様式（能力記述文と具体的な学習活動を作成）のいずれかの様式で作成して提出することを求めた。



静岡県総合教育センター 塚本 裕之 指導主事

静岡県総合教育センター 平川 由紀子 指導主事

【図1】県で示した「様式1：学習到達目標（CAN-DOリスト）及び言語活動」のサンプル



学習到達目標はCEFRのレベルに基づくものとし、各レベルの学習到達目標に達するまでの段階を「ステージ」で設定する。ステージ数は各校で設定するが、各学年2ステージ以上、卒業までには6ステージ以上に区切ることにした。この各ステージに具体的なタスクを書き込むが、この欄には、学習到達目標に基づいたGoal Activityを主たるタスクとして記載し、これを達成するためのタスクを全ての領域でそれぞれ具体的に記入して、関連付ける。さらに、設定した学習到達目標の達成状況を把握するため、各ステージ終了時における「達成率」を内部と外部に分けて記載する欄を設けた。内部の達成率については、校内で実施

するパフォーマンス評価により、該当する生徒の6割以上が目標を達成することを念頭に計画するものとしており、外部については外部検定試験等の外部指標による達成率とした。

なぜCEFRを共通尺度としたのか？

CEFRを共通尺度として参考にした理由について、塚本指導主事は「これまでの高等学校で使われている日本の教科書は共通尺度に基づいて作成されていません。そのため、内容や話題、英文の難易度に偏りがあるのが実情です。先生方はこれまでの指導経験から、文法事項をどの順番で教えればよいかにってはある程度の共通理解がありま

すが、語彙や内容、英文などについては共通理解がありませんでした。そこで、CEFRのような共通尺度を持ち、そのレベルに基づいた内容や英文、タスクなどを理解することが、授業改善の質的転換へとつながるかと考えました」と述べた。

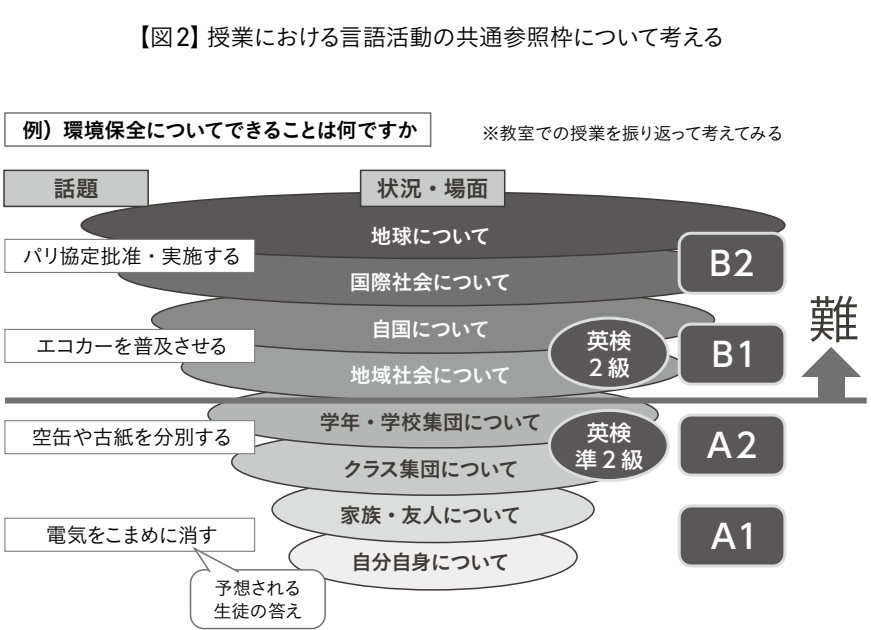
県総合教育センターでは悉皆研修の際に、CEFRについての解説やレベルに応じたタスクを考えるなどの演習も行っている。だが、初年度はまだCEFRに対する教員の理解が不足しており、各校で作成して提出はしたものの、レベルに応じた適切なタスクを考えることができていなかった。

そこで、CEFRのA2とB1のレベルの差を実感してもらうために、実用英語技

能検定（英検[®]）の問題を例示したところ、理解が深まり、効果的だったという。例えば「環境保全についてできることは何ですか」という問いに対し、英検準2級レベルの生徒であれば「空缶や古紙を分別する」、2級レベルであれば「エコカーを普及させる」といった話題が答えとして予想され、準2級での身近な話題から、2級では地域社会における話題へと内容が広がり、深まっていく（【図2】）。その差がA2とB1の差であると説明すると、多くの先生がこれまでの指導経験から「肌感覚」で理解でき、腑に落ちたのだ。「このような感覚を持ったうえで、日々の授業における指導に役立ててほしい」と、塚本指導主事は考える。

年間指導計画や学習指導案の改善にもつながった

CAN-DOリストの改善は、年間指導計画や学習指導案の改善にもつながった。「本来、年間指導計画や学習指導案はCAN-DOリストに基づいて作成されているべきははずです。しかし実際には、CAN-DOリストが反映されていないという実態が学校訪問などによって明らかになりました。そこで、これらを相互に関連付けるために、CAN-DOリストの各ステージに記述される具体的なタスクを、年間指導計画、学習指導案にもコピー＆ペーストできるように県の様式を改めて、できるだけシンプルなものにしました。こうして関連付けができるとともに、教員の仕事の



効率化にもつなげたいと考えたのです」と平川指導主事は説明する。2017年度からは「CAN-DOリストにおける達成率調査書」の提出も求めた。これは各高等学校が実施しているパフォーマンステストの実態をデータベース化して広く共有することで、A2レベルのパフォーマンス評価の普及を図ることを目的としたものだ。2017年度はライティングテスト、スピーキングテストのどちらを提出してもよいとしたが、ライティングテストによるものがほとんどだった。そして、県内85校から提出されたパフォーマンステスト（総数90）を、静岡大学の協力のもとで分析したところ、A2レベルに合致する内容であったものは

38件にすぎず、A1からB1までばらつきがあった（【図3】）。そのため、今後はこのばらつきをなくしていくことが当面の課題となった。2018年度はスピーキングテストの実態を提出することとし、どのような問題を出題し、どのようなルーブリックを設定したのか、ルーブリックにおいて合格ライン上の生徒と優れた生徒の例を映像または音声で提出させ、同様に検証を行う予定だ。

平川指導主事は「2019年度のCAN-DOリスト作成にあたっては、生徒のパフォーマンステスト等の達成状況を踏まえ、まず現状のCAN-DOリスト及び言語活動を見直していただきたいとお伝えしてあります。授業で実践してきたタスクがうまく機能していなかったのであれば、それはレベルに適したタスクではなかったということになりますので、生徒の実態に応じてどのレベルの、どのステージで、どのようなタスクが必要なのかを、もう一度考えていただきます。『読むこと』の活動であれば、単に『教科書本文を読む』と記載するのではなく、『何についてどのように読む』というように、具体的な活動内容を記載する必要があります。提出していただいたCAN-DOリストについては、レベルとステージに合った内容になっているかを確認し、フィードバックします」と話す。

【図3】静岡県県立高等学校85校 総数90のパフォーマンステストの分析（静岡大学）
「中学校・高等学校における英語教育の抜本的改善のための指導方法に関する実施研究」（文部科学省委託事業）より

CEFR A2レベルのパフォーマンステスト提出依頼

CEFR レベル	数
B2	1
B1	11
A2	38
A1	31

現時点ではばらつきがある

※内容を把握できたもののみ。分析不可能であったものもあり合計値は校数や総タスク数に達さない。

思考を深める問いを
いかに立てるかが大切

CEFRを軸としたCAN-DOリストを作成するようになり、教員間のCEFRに対する理解は徐々に深まってきた。それに伴い、県内各校で授業改善に対する意識が高まり、県総合教育センターや静岡県高等学校英語教育研究会が実施する公開授業等に参加して、より良い実践に学び、研究協議で「生徒が何ができるようになっていくか」という視点を持って意見交換できる先生方が増えてきたことも、授業の質的改善につながっているという。このような先生方の意識の変化を目の当たりにして、塚本指導主事は「先生同士が議論したり、悩みを相談したりすることができる場を用意することが大切」だと強く感じている。

今後はさらに、CEFRのレベルに応じたタスクを考えるだけでなく、生徒とのやり取りにおける発問の立て方やフィードバックをいかにすべきかについて、改善が望まれる。塚本指導主事は「クラスにはA1レベルの生徒もいれば、A2レベルの生徒もいます。先生方には全体に投げ掛けた問いに対し、個々のレベルに応じた即時的なフィードバックができるような指導力を高めていただきたいと思います。また、生徒の興味・関心に応じたトピックを扱うことも必要です。教科書で扱う題材は必ずしも全ての生徒の興味・関心に合うものとは限りません。目の前の生徒の実態に合わせて生徒が話したくなるようなトピックを選ぶことも、学びの意欲を引き出すうえでは重要です」と話す。さらに、いかに生徒の思考を深める問いを立てるかも考える必要がある。「現在、副教材として『Q : Skills for Success』（オックスフォード大学出版）など海外



静岡教育事務所 地域支援課 伊藤 賢一 教育主査
静岡教育事務所 地域支援課 染葉 美智子 教育主幹

のコースブックを紹介しています。これらは、意見の異なる英文を読んだり、生徒が互いの意見や価値観を交換したりする活動を通して、生徒のクリティカルシンキングを促すことができる教材と考えています。このような教材を活用して、生徒とのやり取りを中心とした授業を行うことができるようになれば、これまでのように教科書に基づいて、ハンドアウトを作る負担が大幅に減ります。また、『生徒ができることを意識した授業』を展開するならば、毎年教科書を変える必要もありません。従来の『答え合わせの授業』ではあまり注目されなかった、タスクの達成度の評価方法を考えるなど、授業のあり方が変わってくるでしょう」と述べた。

学習到達目標と指導、
評価の一体化のために

静岡県ではCEFRを軸とした5領域でのタスクに基づく授業を行うことで、これまで重視されていた「わかる」ことから、生徒が「できる」ことを意識した授業づくりへの質的転換が進んでいる。CEFRのレベルは社会での評価と学校での評価が一致するため、計画的・効率的・持続的に学びをつなげることができる。県全体でのCEFRに基づいた英語教育改革が進めば、CEFRの同レベルの生徒が在籍する学校間で学習活動や指導法、評価を共有して同質の教育を行うことができるようになり、先生方の業務負担が軽減することも想定している。塚本指導主事は「大切なのは、生徒にどのような英語力を身に付けてほしいのか、生徒に活動を通して何ができるようになってほしいのかを意識して授業をつくることです。今後も県内全ての外国語科教員が共通の尺度を持って学習活

動をつくり、具体的で優れた実践例を共有しながら、学習到達目標と指導、評価の一体化をめざしていきます」と語った。

CEFRをベースに小中高連携が進んだ

このようなCEFRを参考にしたCAN-DOリスト及び言語活動の改善への取り組みは、小・中学校にて外国語を担当する指導主事との連携を促進した。

2014年度より実施してきた文部科学省の「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」において、2016年度からは稲取地区と藤枝地区、2018年度からは富士宮地区と森地区で小・中・高等学校の研究協力校による連携推進会議を開催している。静岡教育事務所の伊藤賢一指導主事は「会議にてCEFRを参考にした小・中・高等学校の連携によるCAN-DOリストを作成し、授業改善を進めています。また、各地区で公開授業を行う際には、先生方が校種を超えて参加して研究協議を行っています」と説明する。そして、静岡教育事務所の染葉美智子指導主事は「小・中・高等学校がCEFRといった共通の尺度を持ってCAN-DOリストを作成したことで、小・中・高等学校が一貫性を持った目標を設定することができるようになり、先生方が縦の連携をより意識できるようになりました」と述べる。

「この事業を通じて、初めて異校種の授業を見たという先生もいましたが、小・中学校の先生、特に小学校の先生は子供たちのことをよく見ているからこそ、タスクを作ることに長けていました。一方で、高等学校の先生は英語に関する専門的な知識が豊富です。それぞれが長所を生かし、学び合うことが多かったと思います。今後は小・中・高等学校で一貫した学びが、大学入試だけでなく、大学や社会での学びにつながればと考えています。CEFRを社会の共通尺度として上手に活用すれば、それは難しいことではないと思います」と塚本指導主事は語る。2018年度をもって文部科学省の事業は終了するが、県としては独自に連携事業を継続していきたいという。

第68回 全英連滋賀大会レポート

「Be Active! ～児童・生徒が主体的に学ぶ英語教育～」

2020年度から段階的に実施される新学習指導要領を見据えて、小・中・高等学校が連携しながら、自ら発信し生涯にわたり学び続ける姿勢を育成する英語教育への転換が求められている。2018年11月16～17日に滋賀県大津市内で開催された「第68回全国英語教育研究大会（全英連滋賀大会）」での授業実践などの様子をレポートする。

小中高の連携のもとで

児童・生徒の主体的な学びを発信

全英連大会は毎年、各都道府県が持ち回りで開催している。今年度は滋賀県で開催され、全国から1,200名を超える参加者が集まった。今大会は、実行委員会の尾中圭実行委員長（滋賀県立安曇川高等学校長）や中村隆秀副実行委員長（東近江市立聖徳中学校長）、高原透副実行委員長（大津市立南郷小学校長）を中心に、実行委員会メンバーが一丸となって準備を進め、当日を迎えた。

初日の全体会は、びわ湖ホール（滋賀県立芸術劇場）大ホールが会場となった。“Welcome to Shiga!”との尾中実行委員長のあいさつで、大会は幕を開けた。そして、大会コンセプトである「Be Active! ～児童・生徒が主体的に学ぶ英語教育～」には、「小・中・高等学校の教員が連携して、児童・生徒が自ら発信し、生涯にわたって学び続ける姿勢を育成する英語教育をめざそうとの思いが込められている」と紹介。そして、スローガンの「Think! Dare! Share!」には、主体的にいろいろな立場から考えよう（Think!）、勇気を出して自分の意見を言おう（Dare!）、お互いを認め合い、支え合い、共感する心を持って、対話を通じて、相手の意見を聞こう（Share!）の意味が込められている。「今大会が小中高の先生方が絆を深め、指導力向上に寄与できる機会となることに期待したい」と結んだ。

全英連の栃倉和則会長は、「新しい時代の教育においては、国連のSDGs（持続可能な開発目標）に見られる課題にどのような解決策を見いだしていくのか

求められます。次代を担う子供たちの未来のために、Be Active!の姿勢を持って、英語教育改革に取り組んでいきましょう」と呼び掛けた。

続く来賓祝辞では、文部科学省初等中等教育局の山田誠志教科調査官が、次のように述べた。「外国語の授業において、思考力、判断力、表現力等を育むにはどうすればよいのか。外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせるために教師がすべき指導は何か。話すこと[やり取り]の言語活動において、子供たちが自分の考えや気持ちを即興的に伝え合うことができるためにどのような指導が求められるのか。また、単元や題材の内容のまとまりを通して、資質・能力を育成するという考え方に立脚した場合、単元指導計画はどう立案すればよいのか、といったさまざまな具体的な指導の手立てを授業実演や分科会の発表から学んでいただきたいと思います。そのような実践を行うことができるようになるためには、どのような指導観、児童・生徒観を持つべきなのか、といったことも感じ取って学んでいただきたいと思います」

来賓挨拶で登壇した滋賀県教育委員会の青木洋教育長は、「海外から来日する外国人が増えている現代においては、英語のコミュニケーション能力を身に付けていくことが極めて重要」だと強調し、大津市教育委員会の船見順教育長は「大津市では英語教育におけるめざす子供像として、『大津の自然や文化をはじめ、自分の考えたことや伝えたいことなどを自信を持って英語で発信できる子供』を掲げ、新学習指導要領全面实施を見据

えた質の高い英語教育をめざしています」と紹介した。竜王町教育委員会の甲津和寿教育長は「グローバル化が急速に進み、英語教育の果たす役割が大きくなるなかで、今大会は大変意義深いものになると期待しています。竜王町では、英語が好きになり、英語を通じてグローバル社会で活躍できる子供たちを竜王町から育てていきます」と述べた。

これからの時代に求められる 英語教育のあり方を提唱

記念講演は「アクティブ・ラーナーを育てる英語教育」を演題として、立教大学経営学部の松本茂教授が講師を務めた。過去・現在の英語教育を概観したうえで、英語教育はどう変わるべきなのか。



記念講演
立教大学 経営学部
松本 茂 教授

全英連
滋賀大会
ダイジェスト



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。（アプリの詳細は巻末へ）

松本教授は「アクティブ・ラーニング」や「今後の日本の英語教育のあり方」「高大接続」といった観点から、教員に求められる指導について説いた。

まず、「アクティブ・ラーニング」について、学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授（学習）法の総称であり、新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」という言葉が同義で使われていることを示した。その具体的な学習法としては、ディスカッションやディベートなどのグループ・ワークが有効とされる。アクティブ・ラーニングには動機付けが重要だが、「面白そう」「人の役に立ちそう」などと、学習者自身の心が動かない限り、能動的に学ぶことは難しいのが実情である。そこで、授業を設計する際には、従来の「何かを教え込む」という発想から、「何を学んでほしいか」という発想への大きな転換が求められる。つまり、先生中心から生徒主体の授業への転換である。「英語教育においては、教師は授業をデザインする役割を担い、生徒が英語を使えるようになるために授業を設計することになります。授業では生徒が英語を使って活動する時間をつくることが重要であり、そのためには生徒

同士の安定した関係性の構築が必要なのです」と、松本教授は参加者に語り掛ける。そして、「最近では『ディープ・アクティブ・ラーニング』といって、先生には生徒の思考をいかに深め、どのような学びが生じているのかをフォローすることが求められています」と述べた。

今後の日本の英語教育のあり方については、「外国語を使える力を付けるという発想で授業を行うことが必要」とし、「グローバルマインドを育てるためには、違いを受け入れ、相手の立場で物事を考えること、共通点を探ることが重要」とした。そのための指導として、「なぜ?」と問い掛けて思考を促しながら、対話を取り入れた学びを通して俯瞰した考えを持てるようにし、異文化交流を通して「常識」とは何かに気付かせることが求められる。さらに、「外国語の学習を通して、言葉ができないことにハンデを感じることや、英語が使えて交流ができた実感できる体験も必要」と言葉を添えた。そして、英語教育は1人で行うものではなく、チームで英語科のMissionやVisionを明確にし、CAN-DOリストに基づいて全員が実践していける共通の指導計画の作成をめざしてほしい」と強調した。

最後に、大学入試や大学における教育も変わらなければならないとし、「これからの大学入試は「公平性」を再検討し、多様な入試制度でどのような評価が必要になるのかを考え、入学者の実態から指定校推薦制度を見直すことなども必要でしょう」と語り、講演を締めくくった。

授業実演や分科会などで

さまざまな指導の実践事例を紹介

午後には、小・中・高等学校の教員による授業実演が行われた。ステージでは、大津市立晴嵐小学校の平山美穂先生、竜王町立竜王中学校の関口真先生、滋賀県立虎姫高等学校の川瀬千津先生が登場し、児童・生徒が自分の考えや気持ちをやり取りすることを大切にした授業を展開した（次ページより紹介）。

2日目は会場をピアザ淡海、コラボしが21へと移して分科会が実施された。分科会は2部構成で行われ、滋賀県内の学校をはじめ、滋賀県高英研や滋賀県中英研のほか、大阪府や京都府など隣県からも発表者を迎えた。新学習指導要領を見据えた実践や指導法などが紹介され、参加者との活発な意見交換の場面も見受けられた。

大津市立晴嵐小学校
平山 美穂 先生

小学校 授業実演

Report

コミュニケーションの楽しさを味わい、自ら求めて学ぶ児童の育成

授業実演のトップバッターは平山美穂先生だ。6年生の児童たちとALTのDipti Shadadpuri先生が、平山先生と一緒にステージに登場。“What is your best memory in Shiga?”について、児童たちが自分の体験した学校行事や家族との出来事を紹介し、どのような気持ちだったかをALTや友達に伝えた。

【単元名】
Unit 7 My Best Memory (『We Can! 2』より)
【本時のねらい】
滋賀県で体験した思い出の学校行事や出来事について尋ねたり、伝えたりすることができる。
(全5時間中3時間目)

平山先生の
実演の様子は
こちら



故郷の魅力に気付くとともに
ALTにおすすめの場所を伝える

大津市立晴嵐小学校は全校児童850名を超える大規模校だ。同校では、「まわりと関わり合い、児童同士が聴き合って、つながる授業づくり」を研究し、ペアやグループでの学び合いに積極的に取り組んできた。児童たちは週1回の外国語活動を心待ちにしており、Dipti先生との英語でのコミュニケーションの楽しさを感じているという。今大会の発表にあたっては、児童同士の活発な英語によるコミュニケーションを促す工夫を追究し、「コミュニケーションの楽しさを味わい、自ら求めて学ぶ児童の育成」をテーマに掲げた。

本単元では、小学校生活を振り返り、自分が滋賀県で体験した思い出の学校行事や出来事について伝え合う活動を通じて、自分たちの故郷の魅力を再発見すると同時に、滋賀県に転居してきて間もないDipti先生に、滋賀県でのおすすめの体験を伝えるという必然性のある場面設定をしている。児童たちは毎時間の帯活動やアクティビティによって、外国語の音声や基本的な

表現に慣れ、“Me, too.”や“That’s nice.”といった表現を自然に発し、児童同士での活発なやり取りができるようになってきた。

友達とのやり取りを通して
伝え合う喜びを感じた児童たち

授業冒頭の帯活動では、SummerチームとWinterチームに分かれて、その季節が好きな理由について自分の意見を伝え合うディベート活動に取り組んだ。“I like winter because I like New Year’s Day. I eat Osechi. It is very delicious.”と言う主張に対し、“I like summer because I like sea and beach. I can swim and play beach volleyball.”という主張も出るなど、児童たちは自分の主張を伝えたり、相手の主張を聞いたりすることを楽しんでいた。続くLet’s Listen 1は、デジタル教材を使って、登場人物が話す「My Best Memory」について耳を傾け、どの人物がどのようなことをしているのかを推測して選ぶ活動だった。

その後、Today’s Goalに設定した「滋賀県で自分たちの体験したことから一番の思い出を伝え合おう」を全員で声に出して確認し、メインアクティビティのための慣れ親しみの活動へと移った。Dipti先生が“I went to the park.”などと「行った場所」を言ったら、その場所で「したこと」に当てはまるカードを選んで“I enjoyed It was fun.”などと発言する。まず3人の児童とDipti先生でデモンストレーション

を行ってから、グループに分かれて活動した。

そして、メインアクティビティとして、ペアで1人が“What’s your best memory?”と尋ね、もう1人が自分が行った場所や経験したこと、そこで感じたことを答える。その後、全体への発表に移ると多くの児童が挙手し、琵琶湖で釣りをしたこと、運動会でソーラン節などのパフォーマンスを見たことなど、さまざまな体験が児童自身の言葉で語られた。なかには、普段の授業では発言しないような児童までもが自ら主体的に発表する姿も見受けられ、友達のがんばる姿にクラス全員が拍手を送り、平山先生とDipti先生は“Good job!” “That’s nice!”などと褒めていた。

振り返りの時間には、振り返りカードに「今日のめあてを達成できたか」などについて各自が感想を書く。児童たちは「Dipti先生に自分の体験が少しでも伝わったことがうれしい」「友達の話を聞いて、滋賀県のことをいろいろ知ることができた」「友達が自分の話していることにリアクションしてくれたので、もっと話したい気持ちになったこと」を喜んだ。最後には「グッバイチャレンジ」として、平山先生やDipti先生からの“What is your best memory?”の質問に1対1で答え、めあてを達成できているかを確認したあと、全員で元気に“See you next time!”と言って授業を終えた。

竜王町立竜王中学校
関口 真 先生

中学校 授業実演

Report

即興的な対話力と発信力の育成～言語活動の指導と評価～

関口真先生とともにステージに現れたのは3年生の生徒たちだ。日頃から関口先生や友達と英語でのやり取りを楽しむことに慣れている生徒たちは、「最も共感できるピースメーカー(ノーベル平和賞受賞者)の生き方や、より良い世界にしていけるために自分たちができること」について、ディベートやディスカッションに取り組んだ。

【単元名】
Unit 6 Striving for a Better World (『NEW HORIZON English Course ③』より)
【本時のねらい】
最も共感できるピースメーカー(ノーベル平和賞受賞者)についてグループで議論し、自分たちが平和のために何をできるかを考え、共感し合うことができる。
(全9時間中8時間目)

関口先生の
実演の様子は
こちら



即興的に自分の言葉で話せる生徒を
育てるための言語活動

滋賀県の中央に位置する竜王町。町内1校の中学校である竜王町立竜王中学校は全校生徒320名の中規模校だ。周辺を田んぼに囲まれた穏やかな環境で育った生徒たちは温厚で親和的だという。関口先生は「多くの日本人が苦手とされる、即興的に自分の言葉で英語を話すことができる生徒を育てたい」と、プレゼンテーションやディベート、ディスカッションなどの言語活動に取り組ませてきた。

研究テーマは「即興的な対話力と発信力の育成～言語活動の指導と評価～」だ。関口先生は「英語の即興力とともに、全ての英語運用能力に必要な『知識・技能』が身に付くような活動とその評価について研究したい」との思いから設定した。授業ではICTをフル活用し、テンポ良く展開することで生徒が英語を使う時間を多く確保した。そして、生徒が間違いを恐れずに自信を持って英語を発信できるようにするやり取りを大切にしたい指導と、ルーブリックを用いたパフォーマンス評価の工夫について研究を重ねてきた。

本単元では、アウンサンスーチーの反省を通して人権や平和への意識を高めるとともに、ピースメーカーについて調べ、最も共感できる人物についてグループで議論し、自分たちが平和のために何ができるかを考えることを目標として学んだ。単元の

まとめとなる本時は、生徒が主体となった統合的な言語活動を通して、積極的に即興で英語でのやり取りを楽しみながら、深い学びへとつなげていくことをめざした。

さまざまな活動で思考を深め、表現を磨く
当番の生徒のあいさつで授業が始まると、まず「ノーベル平和賞受賞者をゲストに迎え、司会と2人のファンがインタビューを行う5分間のテレビ番組」という設定で、生徒がグループ発表を行った。2011年の受賞者であるリベリア共和国の政治家エレン・ジョンソン・サーリーフ氏に扮した生徒が司会役の生徒とともに登場し、自己紹介をした。ファン役の生徒は「ノーベル平和賞を受賞してどのような気持ちか」などと質問し、ほかの生徒たちはオーディエンス役として4人のやり取りを聞いて共感し合った。

前時までに学んだ教科書本文の内容を関口先生とピクチャーカードを使ったやり取りを通じて復習したあとは、Mini Talk Battle (ミニ・ディベート)に取り組んだ。本文でアウンサンスーチーが、夫の最期を看取らずに、ミャンマーで仕事を全うしたことに関連し、“Job is more important than family.”をトピックとした。生徒は4人一組のグループで、肯定側2人と否定側2人に分かれて活動する。動画で視聴したALTの意見を参考に各チーム1分間で準備し、肯定側の主張に反論するように、否定側が意見を述べる。その際、OREO (Opinion –

Reason – Example – Opinion)を意識するようにと、関口先生から伝えられた。その後、肯定側と否定側のチームリーダーが全体の前で主張を繰り広げる。チームメイトはリーダーの発言をサポートするように応戦した。

続くグループディスカッションでは、“Who is the best peace maker?”をトピックに、4人一組で話し合った。グループリーダーが進行役を務め、各自がアウンサンスーチー、ネルソン・マンデラなどの8人から1人を選び、理由を伝え合う。そして、グループで出た考えや意見を全体で発表して共有した。さらに、“What can we do to make our world better?”についてもグループで話し合った。生徒たちは国連のSDGs (持続可能な開発目標)の17のゴールから、世界を良くするためにできることについて意見を交換し、再び全体に共有した。関口先生は生徒の言葉を引き出しながら、思考を深めていくサポートに徹した。

最後に、話し合ったことを受けて自分はどうに考えるのか、理由を添えて英文を書いてくる宿題が伝えられて終了した。

虎姫高校で育てたい学習者像を目指した英語指導のあり方

授業実演の最後を飾るのは、川瀬千津先生と普通科理系クラス2年生の生徒たちだ。「コミュニケーション英語Ⅱ」の教科書で学んだ内容から派生した「ペットロボットと生き物のペットとどちらがいいペットか」について、生徒各自が意見を発表し、質疑応答で即興的なやり取りを行った。

川瀬先生の
実演の様子は
こちら



勇気を持って考えを表現する力や態度を英語の発信力と併せて育成

2020年に創立100周年を迎える滋賀県立虎姫高等学校は、湖北地方の伝統校として「真に実力を持ち、我が国の発展と国際社会の繁栄に貢献できる人間の育成」を目標に掲げる。2012年にSSH（スーパーサイエンスハイスクール）の指定を受け、現在は国際バカロレア候補校として、2年後のプログラム開始に向けて準備を進めている。

そうしたなかで、英語科教員たちは生徒に分かりやすい形になるようCAN-DOリストを見直し、CEFRや外部資格・検定試験と組み合わせるとともに、めざす学習スキルを表示し、学習内容や教材も含めて、「各段階で何がどれだけでできればいいか」を具体的に示すようにした。そして現在は、「協働」をめざすためのペア活動やグループ活動、「多角的な視野」を育むディベート、「己を省み」る振り返り等の充実を図っている。また、授業では「勇気を持って」考えを「表現」する力や態度を、英語の発信力と併せて育成することをねらいと

【単元名】

Lesson 8 Selective Breeding (『Revised ELEMENT English Communication Ⅱ』より)

【本時のねらい】

- ① Which is a better pet, a robot pet or real pet? という問いに対し、与えられた立場について、リサーチした結果で得られた事実を資料として活用し、それを根拠に、説得力のある発表ができる。
- ② 異なる立場のグループの発表を聞き取り、要約し、反論することができる。
- ③ ロボット派、生き物派双方のプレゼンテーションを聞き、自分の意見をまとめ、発表することができる。
- ④ 間違いを恐れず自分の考えを発表することができ、意見交換を楽しむことができる。

(全9時間中9時間目)

した言語活動を設定している。

単元のまとめにあたる本時の授業は、「ペットロボットと生き物のペットのどちらがいいペットか」について、生徒それぞれが自分の意見を持ち、発表する。川瀬先生は、生徒たちが思考を伴う言語活動に取り組む、質疑応答などの即興的なやり取りを通じて、自分の考えや思いを伝え合う姿が見られることを期待した。

ロボットペット派と生き物のペット派が

理由を添えて意見を発表

本単元では、人間に最も身近な動物である犬が、人間の生活の役に立つように、何世代も交配によって品種改良されてきたこと、品種改良によって人に脅威を与えたり、動物愛護の観点で問題を引き起こしたりもしてきたことについて学んできた。生徒たちは自然に対して人間が手を加えることに関する利点や問題点について、言語活動を通じて思考を深めてきた。

本時の導入では、3人一組のグループで、「What kind of app would you like to have on your smartphone?」をトピックに、各自が1分間で意見をまとめ、グループ内で発表し、質疑応答をした。その後の全体発表では、「思い出を残すためにもDiaryを大切にしている」といった意見が出た。

続いては、「Which is a better pet, a robot pet or a real pet?」について、ロボットペット派5グループと生き物のペッ

ト派5グループが、くじ引きで選ばれた順番に自分たちの意見を発表した。各グループは4人一組で編成されており、1人目は前に発表したグループの主張を要約して反論する。2人目は自分たちのグループの主張を、理由を添えて伝える。3人目は主張の根拠を示し、4人目は再び主張をした。ほかの生徒たちはメモを取りながら、各グループの発表を聞く。そして、発表に対する質問や反論をして、発表グループは即興的に質問に答えた。

「ロボットは死なないので、ペットロスにならない」という主張に対して、「ペットロスを経験して、生命の尊さを知ること、子供の成長過程では大切」と反論する生徒もいる。また、「生き物のペットは飼い主の感情を理解してコミュニケーションが取れる」と主張すれば、「ロボットペットは生き物よりも上手にコミュニケーションすることができる」などと、さまざまな意見が飛び出し、その様子を川瀬先生は見守っていた。

全ての発表を聞き終えて学んだことを生徒5人が代表して発表すると、川瀬先生は生徒たちに向けて、「この単元を通じて学んだことを踏まえ、皆さんは自然と技術のあり方をどう考えますか？ 技術革新が私たちの生活にもたらした影響を考える一方で、それらが自然界にもたらした影響についても考えてほしい。そのバランスを取ることが大切なのです」と、メッセージを告げて授業を終えた。

分科会

Report

県内などの小・中・高等学校で実践している指導法などを発表し、参加者と意見交換

新学習指導要領を見据えて

さまざまな研究実践が発表された

大会2日目は、ピアザ淡海とコラボしが21の2会場を使用して、2部構成で分科会となった。滋賀県内の公立・私立の小・中・高等学校の先生方をはじめ、滋賀県の高英研、中英研による発表、近隣の大府や京都府の先生も実践報告を行った。今大会では小学校6、中学校9、小中連携1、中高連携3、高等学校13の計32もの分科会が開かれた。

前日に授業実践を行った3人の先生方のほか、新学習指導要領を見据えて、小学

校では「書くこと」の活動に焦点を当てた研究、児童が相手意識を持って主体的にコミュニケーションを取ろうとする態度の育成などの研究が発表された。中学校ではICTの活用や、即興で伝え合う言語活動、外国籍の生徒のための授業づくりなどのテーマに基づく発表が行われた。中高連携では、多読による自主的に英語を読む態度の育成や中高一貫校でのディベート指導、高等学校ではSkypeを活用したグローバル教育の可能性、生徒の英語習熟度に応じた再話活動、アウトプットにつながるリーディング指導などのテーマで研究が紹介された。

どの分科会も満席となったが、授業実践を行った先生方の発表にはより多くの参加者が集まり、どのような学習到達目標のもとで指導計画を立て、児童・生徒の発信力を育ててきたのか、指導力をいかに高めてきたのかといったことへの関心が高かったようだ。そして、発表者の実践報告に加え、指導助言者の解説、参加者との質疑応答などによって、どの分科会も盛り上がりを見せていた。こうして2日間の日程を終えた全英連滋賀大会は、発表者にとっても参加者にとっても、学びが多く意義深い大会となり、幕を閉じた。

次回告知

第69回 全英連三重大会は、11月8～9日に開催！

「サミット開催の地 三重から発信！～校種間の学びの系統性を意識した英語教育～」

1日目 11月8日(金)

会場：三重県総合文化センター 大ホール

〒514-0061 三重県津市一身田上津部田1234

TEL:059-233-1111 (代表)

記念講演：敬愛大学 向後 秀明 教授(前 文部科学省 教科調査官)

授業実演：三重大学教育学部附属小学校 岡井 崇 先生 / 指導助言者 文部科学省 直山 木綿子 教科調査官

津市立芸濃中学校 庄山 大樹 先生 / 指導助言者 名古屋外国語大学 太田 光春 教授(前 文部科学省 視学官)

三重県立津高等学校 伊藤 毅 先生 / 指導助言者 敬愛大学 向後 秀明 教授(前 文部科学省 教科調査官)

2日目 11月9日(土)

会場：三重県総合文化センター 各施設

分科会：小学校6、中学校10、高等学校14 計30テーマ(予定)

お問い合わせ先

第69回全英連三重大会実行委員会 kawai.ya@mxs.mie-c.ed.jp

全国英語教育研究団体連合会(全英連)事務局 <http://www.zen-ei-ren.com/>

全英連の各地域ブロックでも「英語教育研究大会」を開催

第66回 九州地区英語教育研究大会（日本のひなた宮崎大会）

「はぐくもう！ 未来の国際人！～主体的・協働的な学びを通して、創造性豊かな人材を育てる英語教育～」

2018年10月19日（金） メディキット県民文化センター（宮崎県宮崎市）／10月20日（土） 宮崎大学教育学部附属中学校・宮崎公立大学（宮崎県宮崎市）



公開授業 小学校の部

宮崎市立西池小学校
金丸 睦子 先生
6年生

「夏休みの思い出について、相手に思いが伝わるように話したり、それを聞いたりしよう」をめあてとし、過去の表現を使って夏休み中の体験や感想を伝え合った。授業冒頭では、金丸先生とFLAA（外国語活動アシスタント）のColleen先生が夏の食べ物をトピックにSmall Talkを聞かせたあと、児童同士でペアを組み、“What foods do you like in summer?” “I like watermelon.”のようにやり取りを楽しんだ。続いて、夏休みの思い出についてのチャンツで英語のリズムやイントネーションに慣れ親しんだあと、デジタル教材を使用して登場人物4人が夏休みに行った場所と体験したこと、感想を話すのを聞いて、誰がどこで何をしたのかを推測し、線で結んだ。メインの活動では、ペアで夏休みの思い出についてやり取りをした。児童たちは、“This is my summer vacation.” “Where did you go?” “I went to It was fun!” “Sounds good!”のように尋ね合いながら、自分の思いを相手に伝えるためにリアクションの工夫をしながら対話を楽しんでいた。活動はペアを代えながら進めるが、金丸先生は中間評価を取り入れ、より良いコミュニケーションをしていたペアに発表させ、何が良かったのかなどを児童たちに考えさせていた。授業の終わりには各自が活動を振り返り、気付いたことや学んだことをカードに記し、全体で発表して共有した。



公開授業 中学校の部

宮崎市立生目南中学校
小川 馨 先生
2年生

単元の言語材料であるto不定詞を用いて、職場体験学習の目的やスローガンをグループで考えることをメイン活動に設定した。冒頭のSmall Talkでは、スクリーンに映し出された学校の写真を見ながら小川先生が学校を紹介し、生徒たちに“Why do you go to school?”と投げ掛けて、学校へ行くことの目的について考えさせた。生徒たちはペアで、“Why do you go to school?” “Because I want to talk with my friends. Do you like to talk with your friends?” “Yes. And I want to play basketball.”などと対話し、複数のペアが全体発表をした。メインの活動に移る前に、小川先生は生徒にペアで不定詞の副詞的用法のさまざまな表現を使って表現させながら、名詞的用法との違いについて解説し、生徒の理解を促していく。その後、各自が職場体験に行く目的について不定詞を使って考えをまとめ、その内容を全体で共有したうえで、再び各自で考え、表現を修正したり加えたりした。そしてグループでの活動に入り、生徒たちはこれまでに表現してきた内容を踏まえて、お互いにアイデアを出し合いながら、Let's ... to ...! の形でスローガンを考える。さらに、各グループでホワイトボードに書いたスローガンを全体に発表し、なぜそのような内容としたのかを英語で説明した。



公開授業 高等学校の部

宮崎県立高鍋高等学校
肥田木 洋之 先生
1年生

生徒たちは日頃から、課題研究や協働的な学びに意欲的に好奇心を持って取り組んでおり、英語の授業では英語でのコミュニケーションを楽しみ、表現力を磨いてきた。テストのためだけではなく、自分の考えや意見を伝えるために、授業での言語活動に積極的に取り組もうとする姿勢が見られるという。同校では、横浜の中学校で導入されている「5ラウンドシステム」をアレンジして授業を行っている。毎回の授業は、既習事項を活用して即興性を高めるペアやグループでの常活動と、教科書を用いたりテリング活動などを通じて言語技能を高めていくテキスト活動で構成される。本単元では病院に設置されている芸術作品から、人々を癒すことができる芸術の力について学んできた。冒頭のペアトークでは、生徒の身近なトピックを題材に自分の考えを相手に伝え合う。伝えたい「内容」を大事にした活動だ。ペアで活動したあとには、自分が話した内容について、文構造を意識しながらノートに書く。肥田木先生は、話してから書くという流れを大切にしている。テキスト活動に移ると、教科書本文内容を音声で聞いたり話したりして、ワークシートも使いながら理解を深めていく。そして、生徒たちは、絵やキーワードを使って相手が理解できるような工夫をしながら、自分の言葉でストーリーを再現するリテリングに取り組んでいた。

「英語教育の振興をはかり、文化の向上と発展に寄与すること」を目的とする全国英語教育研究団体連合会（全英連）は、各都道府県や9つの地域ブロックの中学校、高等学校の英語教育研究会を統括する団体だ。全英連が開催する年1回の全英連大会と同様に、各地域ブロックでも「英語教育研究大会」を各県持ち回りで開催している。2018年秋に開催された「第66回 九州地区英語教育研究大会（日本のひなた宮崎大会）」と「第68回 東北六県英語教育研究大会」より、公開授業の様子を紹介する。

第68回 東北六県英語教育研究大会

「グローバル社会での相互理解を深める英語教育～発信力の育成を通して～」

2018年11月8日（木） いわき芸術文化交流館 アリオス（福島県いわき市）



公開授業 中学校の部

いわき市立湯本第一中学校
竹中 亜木子 先生
2年生

学校のある湯本地区は温泉街として知られ、映画にもなったレジャー施設も有する。生徒たちは、1年生の「総合的な学習」の時間に、「地域を知る」をテーマに学び、今年度は地元の旅館や企業で職場体験学習を行った。竹中先生は生徒たちのこうした経験を生かしながら、教科横断的に本単元の学習を進めてきた。英語の歌やペアでのチャンツから授業が始まり、メインの活動では自分たちが住むいわきの町について、英語でのやり取りを楽しみながら紹介することを目標とした。生徒たちはまず、全員で町の観光施設などを英語で紹介する練習をして表現に慣れ親しんだあと、グループごとに、観光施設などを紹介するカードを使った神経衰弱ゲームに取り組んだ。生徒たちは裏返しにして並べたカードを2枚引いて、“There is a big pool. Its name is Hawaiians.”のように引いたカードの施設について紹介し、同じ施設が出たら手持ち札にする。何度も繰り返しThere isと使うことで、表現を定着させていく。次のペア活動では、観光客と旅行代理店スタッフの役に分かれ、観光客役の生徒は町のおすすめの場所を尋ね、旅行代理店スタッフ役の生徒はThere isの表現を使って町を紹介する。ペアで役割を交代して活動したあと、最後に会話した内容をもとに、各自で町の紹介文を4文で書くよう、竹中先生から指示が出された。その後、生徒たちに配布してあるCAN-DOリストと照らし合わせて授業を振り返り、自己評価をして授業を終えた。



公開授業 高等学校の部

福島県立磐城桜が丘高等学校
竹中 睦 先生
2年生

1年生の頃から英語を通して自分の意見を述べたり、状況説明をしたりするなど表現力の育成に取り組んできた2年生の生徒たち。竹中先生によれば、多少難しい内容であっても熱心に取り組み、他者の意見を尊重しながら学んでいこうとし、自己発信力を高めようとする前向きな姿勢が見られるという。本単元では、パキスタン出身で2014年にノーベル平和賞を最年少受賞したマララ・ユスフザイさんの活動やその背景を学び、世界が直面している数々の課題と現状に対して自分には何ができるのかを考える。本文の題材に関連した教材を用いて前時までの復習を行い、本文内容を理解したのち、生徒たちはペアでリテリングに取り組んだ。活動を行う際には、本文を音読した際に聞き取ったキーワードをもとに、自分の言葉で相手に内容を伝える。ペアでのやり取りを始める前に、竹中先生は内容を整理するため、生徒たちに向かって“Why?”や“What?”と思考を深める質問を投げ掛けていく。マララさんが置かれた社会状況と自分たちの生活を比較しながら、マララさんは世界に何を伝えなかったのか、そしてマララさんの友達はパキスタンでなぜ医者になれなかったのか、などについて自分の考えを述べる。その後、4人組でグループを組み、本文内容から読み取った内容について、自分の意見を伝え合う。クラス内には間違いを恐れずに自分の意見を発表できる空気がある。そして、生徒たちには相手の意見に耳を傾け、相手からも学ぼうとする姿勢が育まれていた。

来年度は、沖縄と宮城でそれぞれ開催予定！

2019年度の「九州地区英語教育研究大会」は沖縄県で、「東北六県英語教育研究大会」は宮城県で開催される。今回紹介した地域ブロック以外でも、同様の大会が年1回開催されている。『英語情報』では今後も英語教育研究大会の取材を通して、授業改善に取り組む先生方の実践の様子を紹介していく予定だ。

自身の授業のあり方を見つめ直し 指導力の向上に努めた16日間

「英語教員の指導力や資質向上」を目的として、公益財団法人 日本英語検定協会（英検協会）は2018年夏に16日間にわたり、オーストラリアのニューサウスウェールズ大学（UNSW）での英語教員海外研修を実施した。今号から3回にわたって、研修参加者の声をお届けする。第1回は小学校教員編だ。



学習者として「教えられる側」の 立場で実践的に学ぶ

2018年度の英語教員海外研修は7月28日から16日間の日程で実施され、公募制により選抜された小学校13名、中学校11名、高等学校12名の計36名が全国から参加した。滞在期間中、参加者はホームステイをし、異文化交流・理解を深めることも目的とされている。

カリキュラムは第二言語習得理論に基づき、日本の学習指導要領等を考慮した内容となっている。授業は全て英語で行われるため、参加者自身が学習者として「教えられる側」の立場を実感し、指導者としてどのような教え方が求められるのかを体感できることが魅力の1つだ。

研修は校種別プログラムを中心に行

うが、初日は参加者と講師との顔合わせも兼ねて、小・中・高等学校の合同プログラムからスタートした。自身の校種や指導力、研修で学びたいことなどをペアで話し合ったり、オーストラリアの食べ物を英語の授業で取り上げるならどのように扱うか、などを参加者同士で話し合ったりするなど、実際に参加者自身が英語を使って活動し、「授業を英語で行うこと」とはどのようなことなのかを実践的に学んだ。英語を専門としない小学校の先生方がいるなかで、参加者たちはともに協力しながら学び合い、自身の指導観や授業観を共有しながら交流を深め、指導力の向上に努めた。

各校種では第二言語習得理論や授業運営、異文化理解などの要素別に授

業が行われるほか、現地の小・中・高等学校を実際に訪問して授業を参観する機会も用意されている。参加者たちは、児童生徒に思考を促し、自分の考えを表現することを大切にした授業の様子に刺激を受け、自身の授業のあり方を見直すきっかけとなったようだった。そして最終日には、研修で学んだ知識や身に付けた指導技術を踏まえて作成した授業案に基づき、参加者を学習者として、グループごとに模擬授業を発表した。

16日間にわたる実践的な学びを経て、自身の授業における指導力のブラッシュアップにつながる研修を受けた参加者たちは、帰国後にそれぞれの勤務校で学びを生かした授業改善に努めている。



加山 桃子 先生
（佐賀県 唐津市立厳木小学校）

外国語活動の授業づくりにおいて、私が感じていた課題は、児童が意欲的に活動する単元構成や自分自身の英語力です。研修を通して、コミュニケーションの目的・場面・状況を明確にすることの大切さを学びました。歌やチャンツを活用する際も、場面を示すことで意味を推測でき、その後の活動へと広がっていくことができることを体験できました。授業やホストファミリー、参加者同士の交流では、英語を用いて伝え合う機会が多くあり、自分の思いが伝わる喜びを感じることができました。今後は、研修での学びを生かしながら、英語を通して関わり、伝え合うことの楽しさを児童に伝えていきたいと思います。



小椋 よう子 先生
（岡山県 瀬戸内市立美和小学校）

「児童の日常生活と英語の授業がもっとつながるように工夫したい」。これが研修参加前の私の課題でした。講義や現地小学校訪問では、リスニングの大切さや指導方法を学び、英語の歌や本の読み聞かせを活用してそれを実践していきたいと思いました。UNSWまでの通学路にはレースコースがあり、2000年のシドニーオリンピックで活躍した日本人選手を思い、マラソン好きな私は毎日うきうきした気分で通学したものです。2020年の東京オリンピックでは、子供たちにとって、英語が、世界中から日本にいらっしゃる人々となつがる夢の架け橋となるように一層努力していきたいと思います。



眞鍋 早季 先生
（香川県 丸亀市立富熊小学校）

研修中の教室は常に温かい空気で包まれていました。誰が何を言っても受け入れてくれる、途切れ途切れの英文でも最後まで耳を傾けてくれる、この空気こそが、緊張していた私の心を解きほぐしてくれたのです。そして、ロールモデルの存在がいかに重要であるかも実感しました。難しい言葉についても分かりやすく解説してくれる先生、ジェスチャーを使って物事を伝えようとする仲間たちは、自然にまねをしたという気持ちにさせてくれました。このような教室をつくり出すことが、積極的に外国語を学ぼうとする子供たちにも、学習に取り組む前から高い壁をつくっている子供たちにも大切だと強く感じています。



相澤 昭乃 先生
（山口県 宇部市立厚南小学校）

単調な外国語活動をどうにか打破し、多様な活動で楽しく、英語が身に付く授業をしたいという課題を持って参加した私が研修を通じて学んだことは、考えとなる状況を設定すること（Context）、情報を引き出すこと（Eliciting）です。教師が場面を演じたり、実際に物を見せたりしながら、物の名前や色・状況などを児童に尋ねることを大切にし、児童から情報を引き出す技術を学びました。自分が学習者として授業を受けたことで、これらが児童の理解を助け、考えたい！と意欲も高まることを実感しました。英語好きの子供たちを増やせるような授業をつくっていきたいと思います。



小野 由美子 先生
（東京都 江東区立第一大島小学校）

海外研修では講義だけではなく、全国各地の先生方と実践したマイクロティーチングからも英語の指導法を学ぶことができ、毎回の授業でContextを設定することの大切さを知りました。また、現地小学校を訪問した際には、国語や算数のほかにも、ICTを活用しながらクラス全体で意見を交換するSTEM教育の授業も参観することができたことも有意義でした。ホームステイ先では、オーストラリアの経済、芸術、食文化などについて教えてもらい、異文化交流の大切さ、面白さを実感することができました。研修全体を通して、もっと英語が話せればと感じることが多く、学ぶ意欲の向上にもつながりました。



白石 鮎子 先生
（熊本県 菊陽町立菊陽西小学校）

これまで外国語活動の授業に携わる機会が少なかったため、授業の組み立て方や進め方、活動、英語の指導に関する知識が少ないことが課題でした。研修で一番印象に残ったことは、英語表現を使う状況を設定し（Context）、児童から言葉を引き出しながら授業を進めていくこと（Eliciting）の大切さです。また、これまで研修に参加しても、ただ活動を知って終わりという受け身の姿勢だった自分に気付かされました。今後は、児童がしっかりと目的意識を持ち、「英語で話してみたい!」と考える授業づくりを心掛けていきたいです。



立石 喜美子 先生
（石川県 北陸学院小学校）

研修では英語の授業のStrategyとMethodを学び、授業を計画する新しい視点を得ました。それらはほかの授業でも適用できる部分が多く、児童を学習者として育てていく視点も同時に学ぶことができました。今回、自分が教えられる側に戻ったことで、児童が感じているであろう「英語を話すことへの不安や恐れ」を感じると同時に、それらを解消することもできました。授業の雰囲気ポジティブにつくり、適切なサポートをしてくださった先生方、多くのディスカッションを通して考えを伝え合った仲間から学んだ多くのことを生かし、育み、児童のより充実した学びにつながるよう尽力していきたいと思います。



武田 春香 先生
（熊本県 合志市立合志南小学校）

海外研修を希望した一番の理由は、私自身が児童に“生きた”英語を指導することができているのかという不安があったからです。研修では、授業を行ううえでの場面設定と、児童と一緒に授業をつくることの大切さを学びました。教授法を児童の立場で学ぶことで、現場で早く使ってみたいという気持ちになり、この「使ってみたい」という気持ちを抱かせることこそが、“生きた”英語を指導することなのだと思えを見いだすことができました。児童が実際に学習したことを使ってみたくなるよう、場面設定を工夫し、児童が自ら進んで発言できる授業づくりをしていきたいと思います。



中村 恵美 先生
（埼玉県 鴻巣市立鴻巣中央小学校）

今年度から英語専科教員として小学校に配属されました。これまでの中学生への指導と同じ方法では通用するはずもなく、具体的な指導法を学びたいと、研修に参加しました。研修で学んだElicitingやContext settingを授業づくりでも意識するようになり、児童が生き生きと英語を使う場面が増えたことが成果の1つです。また、一緒に学んだ先生方と協力しながら授業づくりをしたことも心に残っています。教員同士の連携においても「ともに悩み一緒に学んでいく」という姿勢を大切にするようになりました。児童にも教師にも英語教育が楽しく充実したものとなるよう、これからも追求していきたいです。



長屋 宏香 先生
（岐阜県 関市立洞戸小学校）

研修で一番印象に残ったのは、フォニックスの有用性です。文字を学ぶようになると、読み書きの活動が始まります。アルファベットの文字が持つ音を早くから知ると、子供たちが知らない単語に出会ったときに発音し、読むことができる、自律した学習者につながると学びました。また、子供たちから発話を促すElicitingもこれから大事にしたいと思います。これまでは、外国語活動は楽しく活動するという印象でしたが、これからはコミュニケーションの素地を養うことも重要だと感じました。研修で学んだことを生かし、子供たちが自分の考えや気持ちを伝え合う力が付く授業を展開できるよう努力します。



板橋 望美 先生
（東京都 中央区立月島第一小学校）

英語を書くことや読むことについて抵抗を感じる児童が多く、どのようにしたら楽しく活動に取り組めるだろうかと思い、研修に参加しました。印象的だったのは授業で扱う教材は、実際のレストランのメニューや映画のチラシなどが、より効果的であるということです。滞在中に「行ってみたい東京のおすすめスポット」という現地の新聞記事を見つけ、子供たちに見せたらきっと内容が知りたいと、自然と読み出したり、ほかの場所を書きたくなったりする子もいるだろうと思いました。小学生でまだ習っていない内容だからと敬遠せずに、本物の英語に触れさせることの大切さを学ぶことができました。



川合 由希恵 先生
（北海道 札幌市立北都小学校）

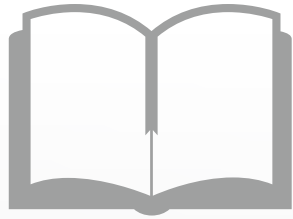
英語を楽しく教えたいという思いの一方で、自分の指導経験やスキル、英語力の不足を痛感していました。今回の研修では、今後に生かせるたくさんの知識と経験を得ることができました。単に教科書や教材をなぞるのではなく、常に目標と子供の実態を照らし合わせて適切なアクティビティを見極め、その有効性や必要な指導、教師の役割などを分析的に捉えることで、より充実した学習となるのだと実感しています。The reason to speak Englishを意識しながら、子供たちが「話したい」「聞いてほしい」「もっと知りたい」と思えるような授業を積み重ねていきたいと考えています。



井上 叶子 先生
（滋賀県 甲賀市立信楽小学校）

私は英語に苦手意識があり、ときには消極的な気持ちで授業に臨んでしまうこともあるのが課題でした。本研修を通して、子供たちから意見や答えを引き出すことで授業を進めていくような授業展開を学び、ぜひ実践してみたいと思いました。また、大学の先生やホストファミリーとの関わりを通して、間違ってもいい、失敗してもいいから自分の思いを伝えようとする気持ちが強まったように思います。今後は、子供たちがわくわくするような活動を設定し、「もっと話せるようになりたい!」「もっと知りたい!」という思いを持つきっかけをつくりたいです。



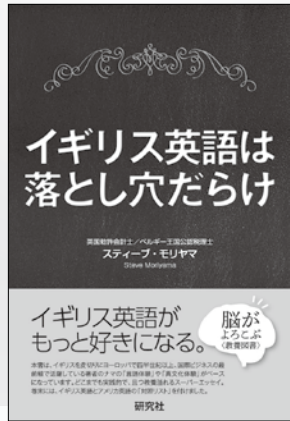


『英語情報』オススメ本

英語教育に携わる皆さんにおススメの書籍をご紹介します。今回は、『英語情報』連載執筆者の大井恭子先生と滋賀県立米原高等学校の堀尾美央先生よりご推薦いただきました。イギリス英語特有の表現、読むことへの興味を育てるためのヒントを知ることができる書籍です。

1 『イギリス英語は落とし穴だらけ』

ステイブ・モリヤマ (著)
研究社 定価 1,512円(税込) 2016年1月発行



清泉女子大学 文学部教授
大井 恭子 先生

日本ではアメリカ英語が主流です。私自身も合計6年間ほどアメリカ生活を送ったこともあり、圧倒的にアメリカ英語が身に付いています。しかし、年を取ってからイギリスで生活してみると、なんと心地よいことか。新たにイギリス英語を身に付けようと本書を手にしたところ、驚いたり感心したりすることしきりでした。例えば、イギリス人教授に“*That's quite interesting.*”と誉め言葉のつもりで言ったら、相手の顔がさえないことがありました。それはイギリス英語では*quite*はくせ者であり、“*It's quite good.*”とは「イマイチだな」ということであると本書で知ったのです。巻末の「イギリス英語 vs アメリカ英語」の一覧も興味深く、まさに“*Two nations divided by a common language.*” (George Barnard Shaw) という皮肉がよく理解できる1冊です。

2 『イン・ザ・ミドル ナンシー・アトウェルの教室』

ナンシー・アトウェル (著) 小坂敦子・澤田英輔・吉田新一郎 (編訳)
三省堂 定価 2,400円(税込) 2018年8月発行



滋賀県立米原高等学校
堀尾 美央 先生

著者のナンシー・アトウェル氏は、アメリカの国語教師です。本書は、彼女の教師としての物語と、自立した書き手や読み手を育てる「ライティング・ワークショップ」「リーディング・ワークショップ」の実践をまとめた日本語版です。そっくりそのまま普通の授業に取り入れることはまず不可能ですが、ただ質問に答えたり、日本語に訳したりするだけの長文読解だけではなく、英文そのものをじっくり吟味して読んで、そこから思考を深めたり、読んで理解してそこから興味を広げたり、読むことへの興味を育てたりするためにどのような活動ができるのか、そのヒントが詰まっている本です。英語圏の英語の教師という視点からは、私たちが学べることが多くあるのではないのでしょうか。

Present!

本コーナーでご紹介した書籍を読者の皆様へプレゼントいたします。

ご希望の書籍の番号と下記の必要事項をご記入のうえ、P.53のFAX申込用紙またはEメールにて、『英語情報』編集部までご応募ください。

- ① 氏名 ② 所属(勤務校名)・役職 ③ 連絡先(住所、電話番号、メールアドレス) ④ ご希望の書籍番号
⑤ 今号で興味深かった記事とその理由 ⑥ 今後、本誌で取り上げてほしい内容や意見

抽選で各1名様にご希望の書籍を差し上げます。皆様からのご応募をお待ちしております。

応募締切 **2019年4月14日(日)** 応募方法 ☎ 03-5439-6879 ✉ eigojoho@morecolor.com

※当選者の発表は商品の発送をもって代えさせていただきます。応募時に記載していただいた個人情報、本件以外の目的には使用いたしません。

『英語情報』オススメ本プレゼント

FAX申込用紙

プレゼント申込専用FAX番号
『英語情報』編集部宛



03-5439-6879

P.52でご紹介した書籍のうち、ご希望の書籍の番号に○をして、下記の必要事項をご記入のうえ、FAXにて、『英語情報』編集部までご応募ください。

ご希望の書籍のいずれかに○印をご記入ください。

1 『イギリス英語は落とし穴だらけ』	2 『イン・ザ・ミドル ナンシー・アトウェルの教室』
--------------------	----------------------------

氏名	(氏)フリガナ	(名)フリガナ
	様	
所属	勤務校名	役職
連絡先	住所 □□□-□□□□	
	都 道 府 県	
	電話番号	

※当選者の発表は商品の発送をもって代えさせていただきます。応募時に記載していただいた個人情報は、本件以外の目的には使用いたしません。

1. 『英語情報 冬号』で興味深かった記事は何ですか？ 該当するものの番号に○をつけてください。(複数回答可)

- | | |
|---------------------------|----------------------------|
| 1. NEWS&TOPICS | 10. TEAP団体専用クーポン利用校事例 |
| 2. 特集「中学校の授業のあり方と果たすべき役割」 | 11. 英検ライティングテストを活用した発信力の育成 |
| 3. 特集事例 CLASS REPORT | 12. わが町の英語教育事情 |
| 4. 授業改善と評価のあり方 | 13. 全英連滋賀大会レポート |
| 5. 授業で使える「評価」のためのアイデア | 14. 九英連宮崎大会レポート |
| 6. 英語で授業7つの鉄則 | 15. 東北六県英語教育研究大会レポート |
| 7. 新学習指導要領に向けて(小・中・高) | 16. 英語教員海外研修報告 |
| 8. 高大接続改革ニュース | 17. 『英語情報』オススメ本 |
| 9. TEAP Hot News! | |

2. 上記の記事が興味深かった理由がありましたら、記事の番号とともにご記入ください。

3. 今後、本誌で取り上げてほしい内容やご意見がございましたらご自由にお書きください。

最新の英検試験内容にマッチ！

1回10分程度で終わる授業内の副教材

Step Up Listening

【改訂版】

ディクテーションの特典教材が加わり、さらに充実。

リスニング教材「Step Up Listening【改訂版】」

「Step Up Listening【改訂版】」は、実用英語技能検定（英検®）のリスニング問題に慣れ親しんでもらうことをコンセプトとした、学校・塾・英会話スクール向けのリスニング教材です。Step1から4のレベル別に英検の各級のレベルに合った300問のリスニング練習問題を収録しており、英検を受験する予定の生徒の皆様をはじめ、英語学習のサポート用教材としてご活用いただいています。このたびの改訂では、トピックを新しいものに差し替えたり、リスニング問題の放送回数を現在の英検の出題に合わせてしたりするなど、実際の英検の試験形式に、より近づけました。また、英語力向上に有効なディクテーションにも取り組むことができるよう、「ディクテーション特典」も追加しています。

改訂のポイント

- ◆古くなったトピックを新しいものに刷新
- ◆Step2・3の放送回数を、現在の英検の出題に合わせて従来の「2度読み」から「1度読み」に変更
- ◆ディクテーション特典を追加！（CDにディクテーション用音声を収録。Web上からディクテーションシートとディクテーションスクリプト・和訳をダウンロード可能）

■レベル・問題形式・問題数

レベル			Step 1 英検4級・5級レベル	Step 2 英検3級レベル	Step 3 英検準2級レベル	Step 4 英検2級レベル
形式	リスニング練習問題	Part 1	会話の応答文選択 2度読み 4題	会話の応答文選択 1度読み 4題	会話の応答文選択 1度読み 4題	会話の内容一致選択 1度読み 5題
		Part 2	会話の内容一致選択 2度読み 3題	会話の内容一致選択 2度読み 3題	会話の内容一致選択 1度読み 3題	文の内容一致選択 1度読み 5題
		Part 3	文の内容一致選択 2度読み 3題	文の内容一致選択 2度読み 3題	文の内容一致選択 1度読み 3題	
		問題数	10題×30回 計 300題	10題×30回 計 300題	10題×30回 計 300題	10題×30回 計 300題
	ディクテーション問題数		3題×10セット 計 30題	3題×10セット 計 30題	3題×10セット 計 30題	3題×10セット 計 30題

※一部実際の英検の出題形式と異なるものがあります。 ※太枠の囲み箇所の放送回数を変更しました。

①授業で使いやすい！

余分な内容をそぎ落としたシンプルな教材にすることで、授業中に取り組みやすくしています。また、朝学習や授業のウォーミングアップで活用しやすいように、1回10題の出題とし、所要時間10分程度*で終了できる分量です。週1回ペースで実施した場合には、無理なく1年間で完結できる30回分の分量ですので、年間計画に取り入れてご活用いただけます。なお、指導者用資料と学習者解答用紙（30回分）は分冊としていますので、朝学習や授業でご利用いただきやすくなっています。

※解答・解説の確認に要する時間を除きます。

②多くの問題にチャレンジ可能！

各セットには300題（10題×30回）のリスニング練習問題だけでなく、改訂版ではディクテーション問題30題（3題×10セット）を追加し、より多くの問題に取り組んでいたできるようになりました。英検ではディクテーション問題の出題はありませんが、「聞いて書く」技能統合型の学習や英語力を総合的に高めるためにもディクテーションは有効です。

③手頃な価格！

学習者解答用紙は、1冊500円（税込）とお手頃な価格に設定しています。

同一レベルのものを30冊以上ご注文いただき、一括納品の場合には、下記の指導者用セット（1セット）を無料で提供させていただきます。

指導者用セット内容：1セット 6,000円（税込）

・指導者用資料 1冊（64ページ） ・リスニングCD 5枚 ・学習者解答用紙 1冊（32ページ） ・ディクテーション特典 ダウンロードのご案内 1部（2ページ）
※2018年12月現在の価格です。

④英検のリスニング試験準備に！

英検の出題形式・レベルを意識してリスニング練習問題が作られているため、英検に向けた準備にご活用いただけます。

お申し込みは…

「Step Up Listening【改訂版】」のパンフレットおよび申込書を、公益財団法人日本英語検定協会ウェブサイトからダウンロードのうえ、必要事項をご記入いただき右側に記載の送付先にFAX送信またはメール添付にてお申し込みください。
<https://www.eiken.or.jp/learning/school/stepup/>



申込書送付先
公益財団法人 日本英語検定協会 通信教育課
FAX：03-3266-0948
E-mail：webinfo@eiken.or.jp

お知らせ

「英検」研究助成制度のご案内 ～第32回（2019年度）研究テーマ募集～

「英検」研究助成制度とは

公益財団法人 日本英語検定協会（英検協会）の「英検」研究助成制度は、全国の小学校・中学校・高等学校・高等専門学校先生方、大学院の方から研究テーマを募集し、英語教育やテストングの専門家による選考を経て、入選者に助成金を交付して、研究を支援する事業です。
実用英語の普及・発展と英語能力検定試験の質的向上を目的に1987年に発足し、今回で32回目を迎えます。

「英検」研究助成制度の応募総数は、累計で約1,400点を超えました

これまでの応募総数は約1,400点を超え、そのうち360点以上が選考されました。入選して研究期間後に提出された論文は、英検協会発行の研究報告書「EIKEN BULLETIN」および英検ウェブサイト等で広く公表され、教育現場をはじめ、関係者の間で活用されています。

第32回（2019年度）研究テーマ募集要項

募集テーマ

- A 研究部門**…英語能力テストに関する研究
- B 実践部門**…英語能力向上を目指す教育実践
- C 調査部門**…英語教育関連の調査・アンケートの実施と分析

応募資格

- 小学校・中学校・高等学校・高等専門学校で英語教育に携わる先生（共同研究も認めます）
- 英語教育に関わる研究を専攻する大学院に在籍する方

ただし、以下のいずれかの条件に該当する方は応募できません。

- ・「研究」を主たる生業としている方（共同研究者の方も含む）
- ・第30回および第31回の研究助成制度に入選された方
- ・研究テーマ（企画内容）が、過去に発表したことがあるもの、または発表する予定のもの（ともに大学院等での修士論文も含みます）
- ・他の団体等から委託されたもの、または委託される予定のもの

応募期間（予定） 2019年2月1日～ 4月5日

（詳細は英検ウェブサイト上で公開）

研究助成金交付額 全部門で30万円以内

詳細、お問い合わせにつきましては、英検ウェブサイトまたは「英語教育研究センター」でご検索ください。

https://www.eiken.or.jp/center_for_research/

英語教育研究センター

検索

「英検」研究助成制度に関するお問い合わせ

公益財団法人 日本英語検定協会 英語教育研究センター「英検研究助成」担当
Email：center@eiken.or.jp

英語教育や英語能力テストに関わる多くの皆様からの独創的かつ有用な企画のご応募をお待ちしております！

編集後記

今号では、新学習指導要領の実施を控えて、「中学校の授業のあり方と果たすべき役割」について特集を組みました。文部科学省初等中等教育局の山田誠志教科調査官によれば、新学習指導要領で示されている「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは何かを理解したうえで、小学校や高等学校とのつながりを大切に、生徒の言語活動中心の授業をつくる、新学習指導要領の掲げる目標を具現化していくことが必要とされています。授業における具体的な指導の事例については、各地の小・中・高等学校におけるCLASS REPORTに加え、全英連滋賀大会や九英連宮崎大会、東北六県英語教育研究大会のレポートでの授業実演の記事をご覧ください。ほかにも大学の外部検定試験活用の動向や、TEAP団体専用クーポン利用校の英語教育と大学入試への取り組みなどもご紹介しています。どうぞ一読いただき、編集部へご意見・ご感想などもお寄せいただければ幸いです。

『英語情報』編集部一同

英語情報 2019 冬号

2019年1月15日発行

発行 公益財団法人 日本英語検定協会
総務部 総務課
〒162-8055
東京都新宿区横寺町 55

編集統括 株式会社モアカラー
アートディレクション・制作 株式会社モアカラー
印刷 日新印刷株式会社
製本 有限会社穴口製本所

©無断転載、複製を禁じます。

©2019 公益財団法人 日本英語検定協会

英検® 試験問題と解答のウェブサイト公開のご案内

公益財団法人 日本英語検定協会は、より広範な情報公開と、サービスの質的向上を図るべく、一次試験問題を英検ウェブサイトにて公開するサービスを行っております。**一次試験日から約1週間後に問題を提供いたします。**英検ウェブサイトのURLは、下記の通りです。

英検試験問題 <https://www.eiken.or.jp/eiken/exam/>

一次試験の「解答速報」は、毎回一次試験日の翌月曜日13時以降に英検ウェブサイトにて公開いたします。

英検解答速報 <https://www.eiken.or.jp/eiken/result/>

本誌について

お問い合わせ先 英検サービスセンター TEL 03-3266-8311

本誌は以下、英検ウェブサイトよりPDFにてダウンロードしていただくことが可能です。

<https://www.eiken.or.jp/eiken/group/>

お問い合わせ電話案内

電話番号はお間違えのないようお願いいたします。

- 英検申込受付に関すること
(出願、検定料など) **英検サービスセンター** (個人) **03-3266-8311**
(団体) **03-3266-6581**

- 英検 Jr. に関すること **英検サービスセンター** (英検 Jr.) **03-3266-6463**

- BULATS・GCAS に関すること **BULATS・GCAS 事務局** **03-3266-6366**

- IELTS に関すること **IELTS 事務局** **03-3266-6852**

- TEAP に関すること **TEAP 運営事務局** **03-3266-6556**

- 英検留学に関すること **英検留学情報センター** **03-3266-6839**

- 通信講座に関すること **通信教育課** **03-3266-6521**

- その他のお問い合わせ **英検サービスセンター** **03-3266-8311**

※全国の英語教育に関する研究会、セミナーなどのウェブへの情報掲載については、英検のウェブサイトのフォームよりお申し込みください。

大学入試で高い採用率を占める

実用英語技能検定 (従来型)、TEAP、TEAP CBT

2018年度外部検定を利用した入試の中で、実用英語技能検定(英検®)の採用率は、推薦・AO入試、一般入試でそれぞれ90%※を超え、TEAPの一般入試での採用率は80%※を超えています。また、「受験生が大学入試で利用しようとしている英語外部資格・検定試験」に関する調査※では、英検が高い比率を占め、TEAPが続いています。

※旺文社教育情報センター調べ (採用率は学科単位で集計・算出)



年間試験日程

英検

英検 文部科学省

2019年度 実用英語技能検定 (従来型) 試験日程

	受付期間	一次試験	二次試験
第1回検定	3月15日(金)～5月9日(木) 書店受付締切日:4月26日(金)	本会場:6月2日(日) 準会場(すべての団体):6月1日(土)、2日(日) 準会場(中学・高校のみ):5月31日(金)	A日程:6月30日(日) B日程:7月7日(日)
第2回検定	8月1日(木)～9月12日(木) 書店受付締切日:9月6日(金)	本会場:10月6日(日) 準会場(すべての団体):10月5日(土)、6日(日) 準会場(中学・高校のみ):10月4日(金)	A日程:11月3日(日) B日程:11月10日(日)
第3回検定	11月22日(金)～12月12日(木) 書店受付締切日:12月6日(金)	本会場:2020年1月26日(日) 準会場(すべての団体):2020年1月25日(土)、26日(日) 準会場(中学・高校のみ):2020年1月24日(金)	A日程:2020年2月23日(日) B日程:2020年3月1日(日)

TEAP

2019年度 TEAP 試験日程

	試験日	申込期間
第1回	7月21日(日)	5月13日(月)～6月16日(日) コンビニ・郵便局ATM 5月13日(月)～6月27日(木) クレジットカード
第2回	9月15日(日)	7月8日(月)～8月4日(日) コンビニ・郵便局ATM 7月8日(月)～8月15日(木) クレジットカード
第3回	11月17日(日)	9月9日(月)～10月13日(日) コンビニ・郵便局ATM 9月9日(月)～10月24日(木) クレジットカード

TEAP CBT

2019年度 TEAP CBT 試験日程

	試験日	申込期間
第1回	6月16日(日)	4月15日(月)～5月16日(木) コンビニ・郵便局ATM 4月15日(月)～5月23日(木) クレジットカード
第2回	8月11日(日)	6月3日(月)～7月11日(木) コンビニ・郵便局ATM 6月3日(月)～7月18日(木) クレジットカード
第3回	10月20日(日)	8月19日(月)～9月19日(木) コンビニ・郵便局ATM 8月19日(月)～9月26日(木) クレジットカード

『英語情報 AR』アプリで誌面で紹介した授業の動画を視聴できます。

2019年1月、英語情報 AR がバージョンアップします。スキャン後に誌面から離れても動画が見られるようになり、さらに便利に！

英語情報
英検公式
英語情報 AR



現在 iOS において、iOS12.1 にアップデートした状態で『英語情報 AR』を新規インストールすると、アプリがカメラを認識しない不具合が確認されております。iOS12.1 では、最新の『英語情報 AR』(バージョン 2.0) をインストールしたうえでご利用ください。

STEP 1
アプリをダウンロード

STEP 2
画像をスキャン

STEP 3
動画を見る

スマートフォンかタブレットを用意して、App Store / Google Play で「**英語情報 AR**」と検索し、ダウンロードします。

英語情報 AR **検索**

「英語情報 AR」を起動し、**AR** マークの付いた写真が**枠内に収まるようにスキャン**します。

「**スキャン完了**」と表示されると、動画が再生されます。「**スキャン完了**」と表示された動画は「**履歴**」画面より動画を選択すれば、誌面から離れても動画をご覧いただけます。

※ iPhone/iPad ➡ iOS 7.0 以上、
Android ➡ ver. 4.0 以上。

〔Android 版は一部対応していない端末がございます。インストール画面の動作確認端末をご確認ください。〕

※ カメラのピントが合わなかったり、光が反射したりすると、読み込みができません場合があります。
※ 読み込まない時は、カメラ位置を少し上下させて読み込み距離を調整してください。
※ 読み取りに時間がかかる場合はアプリを再起動し、再スキャンをしてください。
※ 動画の再生にはネットワーク環境が必要です。Wi-Fi、またはLTE環境を推奨しています。

